高松市埋蔵文化財調査報告 第96集

高松丸亀町商店街A街区第一種市街地再開発事業に係る隔地駐車場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

高 松 城 跡(厩跡)

2006年9月

高松市教育委員会
高松丸亀町商店街A街区市街地再開発組合

例　　言

1．本書は，高松丸亀町商店街Ａ街区第一種市街地再開発事業に係る隔地駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で，高松市内町に所在する高松城跡（厩跡）調査報告及び同事業に伴う試掘調査結果報告を収録した。

2．発掘調査及び整理作業については高松市教育委員会が実施した。

3．調査から報告書に至るまで，下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意としたい。

片桐孝浩（香川県埋蔵文化財センター），佐藤竜馬（香川県歴史博物館），乗松真也（香川県教育委員会文化行政課），松本和彦（香川県歴史博物館），森格也（香川県埋蔵文化財センター），御厨義道（香川県教育委員会文化行政課），香川県教育委員会，香川県歴史博物館，讃岐文化遺産研究会　（順不同，敬称略）

4．高松城跡（厩跡）の調査は，小川賢（文化振興課文化財専門員），末光甲正，中西克也（讃岐文化遺産研究会，当時）が行い，大朝利和，片桐節子の補佐を得た。丸亀町Ａ街区の試掘調査については，大嶋和則（文化振興課文化財専門員）が行った。

5．以下の業務については，委託業務として行った。
遺構測量及び図化：株式会社四国コンサルタント
遺物実測及び整理作業（一部）：片桐節子
遺物保存処理：株式会社吉田生物研究所
遺物写真撮影：杉本和樹（西大寺フォト）

6．本書の執筆は，第２章を川畑聰（文化振興課文化財専門員），第５章を大嶋，その他を小川が行い，編集は小川，片桐で行った。

7．本文の挿図として，高松市都市計画図２千５百分の１「高松市街北部」を一部改変して使用した。

8．発掘調査で得られた資料は，高松市教育委員会で保管している。

9．本報告書の高度値は海抜高を表し，方位は座標北（世界測地系）を表す。

10．本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SA：柵列状遺構　SD：溝状遺構　SK：土坑
SP：柱穴　SR：旧河道　SX：性格不明遺構

11．土壌及び土器観察の色調表現は，新版 標準土色帖農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修）に拠る。

12．本書に掲載した古図の所蔵については，以下のとおりである。
「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」：高松市歴史資料館所蔵
「讃岐国高松城図寛永17年生駒家報地没収大洲藩主加藤泰興預当時」：高松市歴史資料館所蔵
「高松城下図屏風」：香川県歴史博物館所蔵
「享保年間高松城下図」：高松市歴史資料館所蔵
「讃岐国香川郡高松城図」：香川県歴史博物館所蔵
「東讃高松絵図」：香川県歴史博物館所蔵
「明治五年作図高松旧城下町図」：高松市歴史資料館所蔵
「讃岐高松市街細目新図」：高松市歴史資料館所蔵

13．本書で用いる遺物の材質略号は次のとおりである。
Ｗ：木製品　Ｓ：石製品　Ｍ：金属製品
Ｂ：骨角製品　Ｇ：ガラス製品

14．本書で用いた陶磁器・土器類の分類及び編年は，概ね以下の論考に拠る。
・佐藤 2000：「高松平野と周辺部における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』
・横田・森田 1978：「白磁・青磁の分類」『九州歴史資料館研究論集４』
・乗岡 1999：「中近世の備前焼擂鉢の編年案」『第11回関西近世考古学研究会大会レジメ』
・乗岡 2000：「中世の備前焼甕（壺）の編年案」『第２回中近世備前焼研究会』
・乗岡 2002：「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』
・堀内秀樹ほか東京大学埋蔵文化財調査室 1997：「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（１）」『東京大学校内遺跡調査研究年報Ⅰ 1996年度』
・藤澤 1998：「近世瀬戸村陶磁器変遷図」『瀬戸市史　陶磁史篇６』
・大橋 2000：「九州陶磁の編年」『九州近世陶磁学会10周年記念』
・白神 1992：「堺摺鉢考」『東洋陶磁 第19号』
・松本 2002，佐藤 2003：「高松城編年」『国内出土の肥前陶磁』・『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ・第５冊高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』

目　　次

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1

第２章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　調査の成果

第１節　調査地の設定と調査の方法 …… 4
第２節　主要遺構と基本層序 …… 4
第３節　中世以前の遺構・遺物 …… 11
第４節　近世の遺構・遺物 …… 15
第５節　近世～近代の遺構・遺物 …… 64
第６節　時期不明の遺構・遺物等 …… 88

第４章　調査のまとめ

…… 90

第５章　丸亀町Ａ街区における試掘調査の結果報告について

…… 121

挿　図　目　次

第 1 図　調査位置図 (1/2,500)
第 2 図　遺跡位置図 (1/50,000)
第 3 図　高松城跡周辺主要調査地位置図 (1/10,000)
第 4 図　調査地内グリッド区分
第 5 図　第2遺構面平面図 (1/100)
第 6 図　第1遺構面平面図 (1/100)
第 7 図　基本層序①
第 8 図　基本層序②
第 9 図　SR201 西岸部遺物出土状況図 (1/20)，出土遺物実測図 (1/4)
第 10 図　SR201 平・断面図 (1/50)，SR201 他 出土遺物実測図 (1/3)
第 11 図　SD201・202・SK201 ～ 205 平・断面図 (1/40)，SK202・砂堆 G 層上面出土遺物実測図 (1/3)
第 12 図　SE106 平・断面図 (1/40)，SE106 出土遺物実測図 (1/3・1/2)
第 13 図　SD107・SP193・194 平・断面図 (1/40)，SP193・194 出土遺物実測図 (1/3)
第 14 図　SE103 平・断面図 (1/40)，SE103 出土遺物実測図 (1/3・1/2)
第 15 図　SD105 平・断面図 (1/40)，SD105 出土遺物実測図 (1/3・1/2)
第 16 図　SK118・124・125 平・断面図 (1/40)，SK124，SK124・125 検出時出土遺物実測図 (1/3)
第 17 図　SK126・127・129・130 平・断面図 (1/40)，SK126・129・130 出土遺物実測図 (1/3・1/2)
第 18 図　SX103 平・立面図① (1/50)，刻印拓本 (1/8)
第 19 図　SX103 平・立面図② (1/50)
第 20 図　SX103 石材分類図 (1/50)
第 21 図　SX103 断面土層図 (1/50)
第 22 図　SX103 出土遺物実測図① (1/3)
第 23 図　SX103 出土遺物実測図② (1/3・1/2)
第 24 図　SX103 出土遺物実測図③ (1/3・1/2)
第 25 図　SX103 出土遺物実測図④ (1/3)
第 26 図　SX103 出土遺物実測図⑤ (1/3)
第 27 図　SX103 出土遺物実測図⑥ (1/3)
第 28 図　SX103 出土遺物実測図⑦ (1/3・1/4)
第 29 図　SX103 出土瓦実測図① (1/4)
第 30 図　SX103 出土瓦実測図② (1/4)
第 31 図　SX103 出土木製品実測図 (1/3)
第 32 図　SX103 出土木製品・金属製品実測図 (1/3・1/2)
第 33 図　A8・9 地点 E 層上面検出遺構 (1/50)
第 34 図　SK106・108・110・119・132・SE105 平・断面図 (1/40)，SK106・108・119・SE105 出土遺物実測図 (1/3)
第 35 図　SA102 平・断面図 (1/50)
第 36 図　SX107 平・立・断面図 (1/40)，SX107 出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)
第 37 図　A8・9 地点 I 層上面検出柱穴群 (1/50)
第 38 図　SE104・SX105 平・断面図 (1/40)，SE104・SX105 出土遺物実測図 (1/3・1/2)
第 39 図　SX104・SD103 平・断面図 (1/40)
第 40 図　SX104 出土遺物実測図① (1/3)
第 41 図　SX104 出土遺物実測図② (1/3)
第 42 図　SX104 出土遺物実測図③ (1/3)
第 43 図　SX104 出土遺物実測図④ (1/2・1/3)
第 44 図　SX104 出土瓦実測図 (1/4)
第 45 図　B12・C12・D12 地点E層上面検出遺構 (1/50)
第 46 図　SK112・113 平・断面図 (1/40)，SK112・113 出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)，刻印拓本(1/2)
第 47 図　SK115・120・121・122・SX106 平・断面図 (1/40)，SK122・SX106 出土遺物実測図 (1/3)，刻印拓本 (1/2)
第 48 図　SA101 平・断面図 (1/50)
第 49 図　G6 ～ G9・F6・F8 地点 E ～F層上面検出遺構 (1/50)
第 50 図　G6 ～ G9 地点 E 層出土遺物実測図 (1/3)，F8 地点 E 層上面検出遺構平面図 (1/50)，SE102・SD104・SX108 平・断面図 (1/40)，SX108 出土遺物実測図 (1/3)
第 51 図　SE101・SK116・SK104 平・断面図 (1/40)，E2・E3・F2・G2・G3 地点焼土出土遺物実測図 (1/3)
第 52 図　調査地西端 E2・E3・F2・G2・G3 地点上層部検出遺構 (1/50)
第 53 図　SD101・SD102・SK101 ～ 103・SP102 平・断面図 (1/40)
第 54 図　SX102・SE107 平・断面図 (1/40)，SX102・SE107 出土遺物実測図 (1/3)
第 55 図　SX101 平・断面図 (1/40)
第 56 図　SX101 出土遺物実測図① (1/3)
第 57 図　SX101 出土遺物実測図② (1/3)
第 58 図　SX101 出土遺物実測図③ (1/3)
第 59 図　SX101 出土遺物実測図④ (1/3)
第 60 図　SX101 出土遺物実測図⑤ (1/3)
第 61 図　SX101 出土遺物実測図⑥ (1/3・1/4)，刻印拓本 (1/2)
第 62 図　SX101 出土遺物実測図⑦(1/3)，刻印拓本(1/2)
第 63 図　SX101 出土遺物実測図⑧ (1/3)
第 64 図　SX101 出土遺物実測図⑨ (1/3)
第 65 図　SX101 出土遺物実測図⑩ (1/3，625：1/4)
第 66 図　SX101 出土遺物実測図⑪ (1/4)
第 67 図　SX101 出土遺物実測図⑫ (1/3)
第 68 図　SX101 出土遺物実測図⑬ (1/3，653：1/4)，刻印拓本 (1/2)
第 69 図　SX101 出土遺物実測図⑭ (1/2・1/3)，刻印拓本 (1/2)

第 70 図　SX101 出土遺物実測図⑮（1/4，695：1/3）
第 71 図　SX101 出土遺物実測図⑯（1/3・1/4，696・697：1/8）
第 72 図　SX101 出土遺物実測図⑰（1/4）
第 73 図　SX101 出土遺物実測図⑱（1/2，S17：1/3，G1・2：1/4）
第 74 図　SE001・SK001 ～ 004・SP025 平・断面図，A13 地点砂堆面検出遺構（1/50），SE001・遺構外出土遺物実測図（1/3）
第 75 図　遺構変遷図－中世－（1/250）
第 76 図　高松城における調査地点の比定図（1/2,500）
第 77 図　遺構変遷図－ 17 世紀前葉－（1/250）
第 78 図　遺構変遷図－ 17 世紀中葉－（1/250）
第 79 図　遺構変遷図－17世紀末葉～ 18 世紀前半－（1/250）
第 80 図　遺構変遷図－18 世紀中葉～ 19 世紀後半－（1/250）
第 81 図　「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」（調査地付近）
第 82 図　「高松城下図屏風」（調査地付近）
第 83 図　「享保年間高松城下図」（調査地付近）
第 84 図　「讃岐国香川郡高松城図」（調査地付近）
第 85 図　「東讃高松絵図」（調査地付近）
第 86 図　「明治五年作図高松旧城下町図」（調査地付近）
第 87 図　丸亀町 A 街区調査地位置図　（1/25,000）
第 88 図　調査地位置図及び土層柱状図及び出土遺物実測図

図　版　目　次

図版 1　SX103（南方向から）
図版 2　SX103 完掘時（北方向から）
　　SX103 完掘時（南方向から）
図版 3　SX103 踊場礫敷（東方向から）
　　SX103 踊場石列（北方向から）
　　SX103 刻印石
図版 4　SX103 石材 G1 類
　　SX103 石材 G1 類拡大
　　SX103 石材 G1' 類
　　SX103 石材 G1' 類拡大
　　SX103 石材 G2 類
　　SX103 石材 G2 類拡大
　　SX103 石材 D 類
　　SX103 石材 D 類拡大
図版 5　調査地西壁（NS1）土層
　　調査地西端部焼土
　　SK104 検出状況
図版 6　SK116 断面
　　SX103 埋土上層部
　　調査地北東部（EW4 西半）土層
図版 7　調査地全景（西方向から）
　　第 1 遺構面（南方向から）
図版 8　SX103 完掘時（南方向から）
　　SX103 完掘時（南東方向から）
　　SX103 完掘時（北方向から）
図版 9　SX103 東壁
　　SX103 西壁
　　SX103 北壁
図版 10　SX103 踊場石列
　　SX103 石積（南西隅）
　　SX103 踊場西壁裏込
図版 11　SX103 踊場（東方向から）
　　SX103 踊場礫敷（東方向から）
　　SX103 踊場礫敷（北西方向から）
図版 12　SX103 踊場瓦出土状況
　　SX103 踊場瓦出土状況
　　SX103 踊場木製品出土状況
図版 13　SX103 北壁裏土
　　SX103 北壁裏土
　　SX103 西壁裏土
　　SX103 西壁根石下確認状況
　　SX103 東壁裏土
　　SX103 東壁根石下確認状況
　　SX103 南西隅根石下確認状況
　　SX103 踊場西壁裏土断面
図版 14　SD101 南部（北方向から）
　　SD101 北部（南方向から）
　　SD102（北方向から）
図版 15　SD101 南部
　　SD101 北部
　　SD101 北部断面
　　SP102
　　SE101
　　SE101 断面
　　SE001
　　SK003 断面
図版 16　SX102
　　SE107
　　SE105
　　SE105 完掘
　　SE102
　　SE104

SE104・SX105 断面
SE104・SX105
図版 17　調査地西端部遺構（北方向から）
調査地東端部遺構（東方向から）
調査地北東隅遺構（東方向から）
図版 18　SX107（東方向から）
SX107（西方向から）
SX107 北壁
図版 19　SE106・SD107（南方向から）
SE106（南方向から）
SE106 埋土断面
SE106 掘方断面
図版 20　SX104
SX104 断面
SX104 瓦出土状況
C12・D12 地点第 1 面上層遺構
SA102（西方向から）
調査地北端部遺構検出状況
SK124・125
図版 21　SE103
SE103 断面
SD105
SD105 断面
SK126
SK126 断面
SP175
SP025
図版 22　SX108
SX108 断面
SX101 南北方向断面
SX101 石材出土状況
SX101（北方向から）
図版 23　SR201 西岸部遺物出土状況
SR201 遺物出土状況
SR201
SR201 土層堆積状況
SK201
SK202
SP220・224
SD202
図版 24　SX103 出土磁器碗類
SX103 出土磁器皿類
SX103 出土磁器碗類
図版 25　SX103 出土磁器類
SX103 出土陶器皿類
SX103 出土陶器碗類
図版 26　SX103 出土陶器類
SX103 出土陶器類
SX103 出土土師質土器皿
図版 27　SX103 出土焼塩壺
SX103 出土遺物
SX104 出土焼塩壺
図版 28　SX104 出土磁器類
SX104 出土陶器類
図版 29　SE103 出土遺物
SK124 出土遺物
SX102 出土遺物
SX105 出土遺物
図版 30　SX106 出土遺物
SX103 出土土師質土器皿
SX101 出土玩具類
図版 31　SX101 出土磁器類
SX101 出土陶器類
図版 32　SX101 出土陶器類
SX101 出土土師質土器類
図版 33　出土遺物
図版 34　SD105 出土遺物
SE106 出土遺物
図版 35　SE103 出土遺物
SE107 出土遺物
SX104 出土遺物
図版 36　SK112 出土遺物
出土遺物
図版 37　SR201 出土遺物
砂堆上面出土遺物
SK124・125 検出時出土遺物
図版 38　SK202 出土遺物
SK126 出土遺物
SX103 出土遺物
図版 39　出土遺物
図版 40　出土遺物
図版 41　SX107 出土遺物
SX104 出土土師質土器皿
SD105 出土遺物
SX104 出土土師質土器
SK130 出土遺物
SX103 出土金属製品
図版 42　SX103 出土軒丸瓦
SX103 出土軒丸瓦
SX103 出土塼
図版 43　SX103 出土瓦
図版 44　SX104 出土軒丸瓦
SX104 出土軒平・桟瓦
SX101 出土瓦
図版 45　SX103 出土木簡
図版 46　出土遺物
図版 47　SX103 出土石製品
SX101 出土石製品
SX101 出土金属製品
SX101 出土ガラス製品

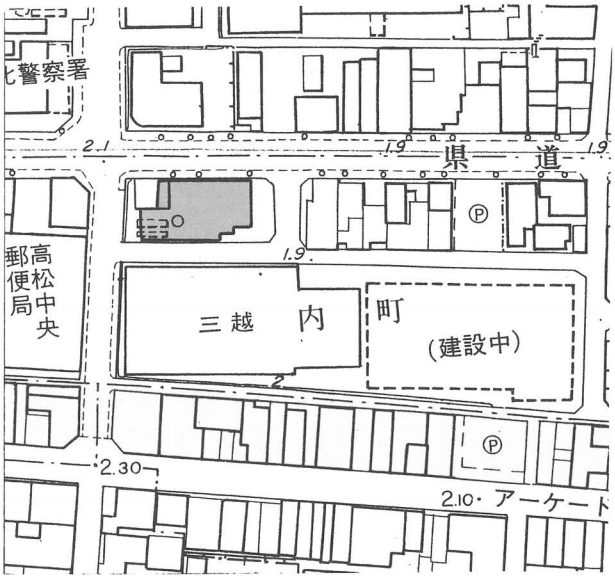
第1章　調査の経緯と経過

第1節　調査の経緯（第1図参照）

高松丸亀町商店街A街区市街地再開発組合（以下,「組合」と略称する）は，株式会社三越高松店が同本館北側に所有する平面駐車場において立体駐車場を建設する計画を立てた。当該地は旧高松城内大手筋に面しており，古図によれば高松藩の厩，御用屋敷に相当することから，高松市教育委員会（以下,「市教委」と略称する）と組合は協議を行った。その結果,「現状では周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが，高松城跡に関係する遺構が存在する可能性が高く，工事着手後に遺跡が発見された場合は工事の進捗に重大な影響を及ぼす可能性もあるため，工事着手前に試掘調査を実施し，遺跡の有無を確認することが望ましい。」ということで合意に達した。これを受けて，組合から市教委に対し埋蔵文化財確認調査の依頼があり，平成16年7月20・21日に市教委が試掘調査を実施した。試掘調査は，立体駐車場建設予定地内で幅2m，長さ10mのトレンチを3箇所設定して実施し，西側のトレンチを中心に中・近世の遺構・遺物が存在する2つの遺構面を確認した。市教委は試掘調査結果を香川県教育委員会に報告し，当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地となった。そこで，組合は平成16年12月9日に香川県教育委員会へ「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の届出」を提出し，事前に発掘調査を実施するよう県教委から指導があった。市教委と組合は再び協議を行い，立体駐車場建設予定地の内，試掘結果から埋蔵文化財の遺存する可能性が高い西側約650㎡について工事着手前に発掘調査を実施することで合意し，平成17年1月31日に両者の間で埋蔵文化財調査協定書を締結した。業務名は「高松丸亀町商店街A街区第一種市街地再開発事業に係る隔地駐車場建設に伴う埋蔵文化財管理業務」とし，市教委は発掘調査・整理作業の実務を行い，その費用負担及び契約・支払事務については組合が行うこととした。発掘調査は平成17年2月21日～同年5月12日に実施し，整理作業は平成17年5月1日～平成18年9月30日に市教委文化振興課円座整理事務所で実施した。

第2節　調査の経過

発掘調査は着手当初，重機によりコンクリート・撹乱土除去を行ったが，一部は手作業で行わざるを得ず，3月の天候不良の中，調査は難航した。それでも4月の好天の中，予定していた第2遺構面までの調査を終え，大型井戸（SX103）の上部に残したコンクリート製基礎を関係機関の協力により徹去し，遺跡の現地説明会を開催することができた。説明会には，800名の参加者が集まり盛況に終わった。この後，大型井戸の調査等の残務を終え，期間中に調査を無事終えた。



第1図　調査位置図（1/2,500）

2/21～3/4　重機によるコンクリート除去・表土剥ぎ
3/7～18　人力によるコンクリート塊・撹乱土除去作業
3/22～4/26　第1遺構面（近世）遺構調査
4/27　第1遺構面写真測量
4/28・29　第2遺構面（中世）遺構調査
4/30　大型井戸上部コンクリート基礎除去
5/1～6　大型井戸調査
5/8　遺跡説明会
5/9～12　井戸石積調査，コンクリート基礎下遺構調査
5/12　調査終了，撤収作業（5/13まで）

整理作業については，下記の工程で行った。

	h17.5～7月	h17.8～10月	h17.11～h18.1月	h18.2～4月	h18.5～7月	h18.8～9月
接合・復元						
遺物実測						
トレース						
レイアウト						
遺物撮影						
原稿執筆						
編　集						
校　正						
遺物収納						

第2章　地理的環境・歴史的環境

第1節　地理的環境（第2図参照）

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に，低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地，東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km，南北16kmの範囲に及んでいる。また，この平野は，讃岐山脈から流下し，北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。さて，高松城の城下町として発展した高松市街地は，香東川の東流路が瀬戸内海に注ぐ河口の中洲や砂堆上に立地している。このため，城下町は高松城築城と同時にこの中洲や砂堆を大規模に埋め立てて形成されたと考えられている。香東川は，現在，石清尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが，17世紀初頭，高松藩に招かれた西嶋八兵衛の河川改修によって一本化されたものである。なお，17世紀の廃川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

第2節　歴史的環境（第3図参照）

高松市街地の下に埋没している中洲や砂堆上に初めて人の活動が認められるのは，弥生時代後期である。高松城内南の武家屋敷跡で行われた発掘調査（新ヨンデンビル別館）では，ベースとなる砂層上面より柱穴とともに弥生土器が多く出土し，付近に集落が存在していた可能性が指摘できる。この発掘調査では，平安時代前期の溝もわずかながら確認している。

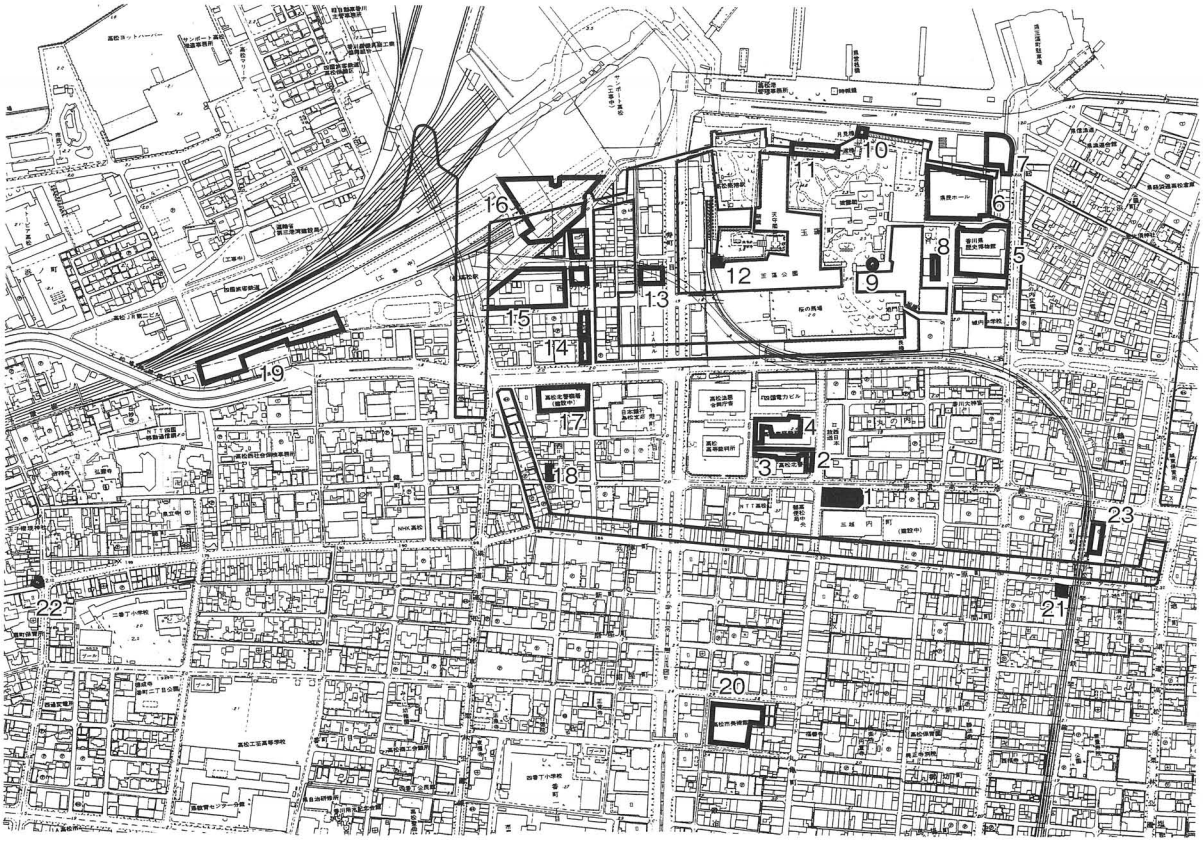
この地域の土地が安定し，人が恒常的に居住できるようになるのは平安時代後期と考えられる。当時，この地域は篦原郷と呼ばれ，安楽寿院領である野原庄が高松城跡の南方に所在していた。野原庄は，白河院の勅使田が応徳年間頃（11世紀末葉）に立券荘号されたものである。康治2年（1143）8月19日の太政官符によれば野原庄の四至が条里によって表記されていることから，土地が安定し条里地割または条里呼称がこの地まで普及していたと考えられる。さらに時代が下ると，荘園としての機能以外にも，文安2年（1445）の「兵庫北関入船納帳」には船籍地として名前が記載されていることから，中世においては港町としての機能を有していたと考えられる。時代は遡るが，高松城跡西の丸地区の発掘調査では，11世紀後半～13世紀前半の護岸施設とともに県外から搬入された土器が高い比率で出土している。さらに，西の丸地区に隣接する浜ノ町遺跡では，白磁四耳壺を埋納していた13世紀末から15世紀末の集落跡が確認されている。一方，高松城跡東の丸地区に目を転じると，16世紀後半以前の漁民の墓群が検出されている。城跡より南東方向にある片原町遺跡においては，15～16世紀に属するL字形の大溝を検出しており，これは居館の外側にめぐらしていた堀の一部と考えられている。

このように，高松市街地下において，古代末から中世の集落等が確認され，文献からもうかがえるように，かつて港町が栄えていたと考えられる。この砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は，博多や草戸千軒遺跡にも見られるように全国的な傾向であり，これらの都市をつなぐ交易が行われていたのであろう。このような時代背景のもとに，高松城がこの地に築かれ，城下町が整備されたと考えられる。

さて，この高松城および城下町を造ったのが，豊臣秀吉の家臣であった生駒親正である。豊臣秀吉の四国征伐により，天正13年（1585）長宗我部元親が降伏し，讃岐国は仙石秀久・十河存保に与えられ，その後尾藤知宣の領国となったが，天正15年（1587）生駒親正が入封し，讃岐17万石を領した。高松城は，生駒親正の居城として，翌天正16年から築城され，数ヵ年を要して完成された水城である。水城と呼ばれる由縁は，北の守りを瀬戸内海にゆだねるだけでなく，堀には海水が導かれているからである。また，南方には大手（旧太鼓門）を構え，城の南側に城下町が展開する「後堅固」の城でもある。城の構造は，内堀・中堀・外堀といった三重の堀をめぐらし，内堀より内側には本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配している。本丸は，さらに堀によって他の曲輪と独立しており，本丸と二ノ丸をつなぐ鞘橋を落とすことによって敵の侵入を防ぐ構造となっている。本丸には，天守閣と地久櫓が設けられている。

寛永17年（1640）御家騒動により生駒氏は出羽国矢島に転封となり，寛永19年に代わって松平頼重が高松城主となり，東讃岐12万石を領した。松平頼重は，城の改修を度々行っているが，寛文11年（1671）頃の大規模な改修では，東ノ丸を造成するとともに，月見櫓・続櫓・渡櫓などを造り，北に設けた水手御門より直接海へ出入りができるようにしている。その後，松平氏は高松城主として明治維新を迎える。高松城は昭和29年（1954）に松平氏より高松市に譲渡され，翌年玉藻公園として市民に開放されるとともに，史跡として国指定され文化財の保護が図られている。しかしながら，明治17年（1884）に天守閣が取り壊されるとともに，都市化の波によりしだいに堀は埋め立てられ，本丸近くまで市街化が進んでいる。

第 2 図　遺跡位置図 (1/50,000)



第 3 図　高松城跡周辺主要調査地位置図 (1/10,000)

1. 厩跡　2. 松平大膳家中屋敷跡　3. 丸の内地区 4. 松平大膳家上屋敷跡　5. 歴博地点　6. 県民ホール地点　7. アクトホール地点　8. 東の丸（作事丸）
9. 三の丸（多目的トイレ）　10. 水手御門　11. 三の丸　12. 地久櫓台　13. 無量寿院跡　14. 西の丸Ａ地区　15. 西の丸Ｂ地区　16. 西の丸Ｃ地区
17. 高松北署地区　18. 県高等学校ＰＴＡ会館地点　19. 浜ノ町遺跡　20. 紺屋町遺跡　21. 片原町遺跡　22. 扇町一丁目遺跡　23 東町奉行所跡

第3章　調査の成果

第1節　調査地の設定と調査の方法（第4図参照）

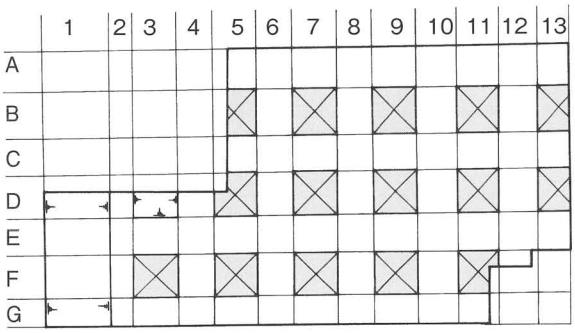
調査は立体駐車場建設予定地内において，試掘結果から約650㎡の調査範囲を予定していたが，アスファルト舗装，撹乱土を除去する過程で，旧三越仮店舗（昭和41年建設）の基礎部分が予想された以上に大規模なものであることが判明した。基礎は約3m四方，地下1～1.2mの深度においてコンクリートブロックを設置したもので，各基礎間の距離が短く，また軟弱な砂質土の上に構築されていることから，重機によって遺構を傷めず除去を行うことが極めて困難な状況であった。このことから，これらを除く約550㎡について調査を終えた後，調査工程等について再度調整を行い，基礎下にあって遺存状態が良好であるSX103を覆う4箇所に限り，クレーン車を用い撤去し調査を実施することとした。

調査方法については，上述のコンクリート基礎を残した状態で，太平洋戦争時の空襲痕を重機により除去した。この後は人力で掘り下げ，暫時，遺構確認・遺構掘削を行いながら，地山面とされる砂堆層まで掘削を行った。またコンクリート製基礎の下端に，0.5m程度，四方に張り出す捨てコン材の打設部及び人頭大になる石敷き部分を人力により除去し，遺構及び土層断面の確認を行った。遺構等の図化は，空中写真測量（業務委託）により1/50等で全体及び主要部の図化を行い，適宜，手書きによる1/20等の図化を行った。調査地内の小区分は，この等間隔に認められるコンクリート基礎を基準に，南北方向A～G，東西方向1～13で示されるグリッドを用い，地点の呼称や遺物の取り上げに用いた。

第2節　主要遺構と基本層序（第5～8図参照）

調査では中～近世の遺構・遺物を確認したが，このうち調査地中央部で確認されたSX103（17世紀中葉）が特筆される。当遺構は，精緻に石積された石室と礫敷きを伴った昇降部をもつ地下遺構で，埋没流路上に設置された地下空間は豊富な湧水により大型の井戸状を呈している。良好な石積の遺存状況に加えて，生駒家の家紋とみられる刻印石をもつ他，遺構の廃絶後となる東讃高松絵図（弘化年間）で記された「井戸址」に比定される等，遺構のもつ特異性が窺われる。この他，SX103と同時期の所産で石室をもつSX107，道路の側溝とみられる石組み溝SD101（18世紀前半～19世紀中葉），石組み井戸SE106（17世紀前葉）があり，石造りされた遺構が比較的良好な遺存状態で確認された。また大型の廃棄土坑がSX104（18世紀前半），SX101（19世紀後半）の2基確認された他，17・18世紀代の井戸跡が7基あり，武家屋敷での生活・土地利用の状況が窺われるものとなった。

基本層序については，調査地の西壁N-S 1で層序が最



トーンの範囲はコンクリート基礎部分を示す

第4図　調査地内グリッド区分

も揃って観察でき，これを基準としA～H層に分類した。また調査地東部のみで認められるI層については，E-W4の層序に認められる焼土よりD，E間に位置付けた。地点毎の観察結果では，土質・色調等は必ずしも均一ではないが，概ね次のような特徴をもつ。

A層：太平洋戦争時の被災遺構とそのベースとなる整地。

B層：鈍い黄～暗灰黄色のシルト質土，土壁や礫を含む。SX101より19世紀後半以降の所産と考えられる。

C層：灰黄～浅黄色細砂。小礫を含む。洪水層，あるいは馬場に由来する可能性が考えられた。SX104より18世紀前半以降の所産と考えられる。

D層：焼土層あるいは焼土塊を含む整地。E層の上位で，C層下位の層序となるが，出土遺物に欠け時期を特定できない。

I層：オリーブ～浅黄色土を塊・層状に含むシルト質土で，SX103の埋め戻しに用いられる等，調査地東部で認められる整地。SX103より17世紀後半の所産と考えられる。

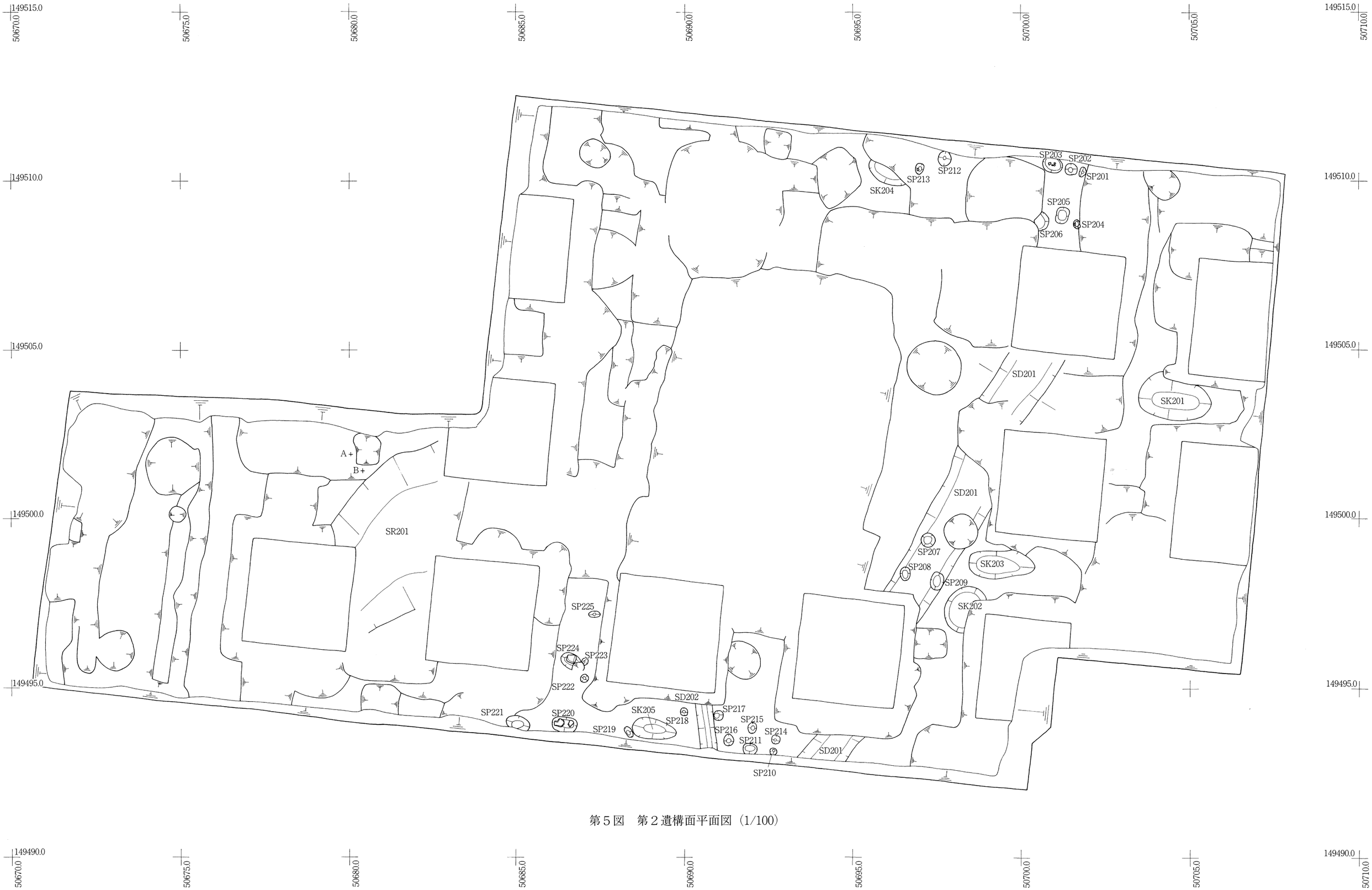
E層：炭を含む褐灰色シルト質土で，部分的に硬化が認められる。直下で埋没するSE103，SD105等は焼土・炭を伴っており，火災直後となる整地の可能性も考えられる。SE103，SD105等により17世紀前葉頃の所産と考えられる。

F層：褐灰色シルト質土。一部で砂混じりとなるが，基本的には自然堆積層で，下位のG層が土壌化したものとみられる。

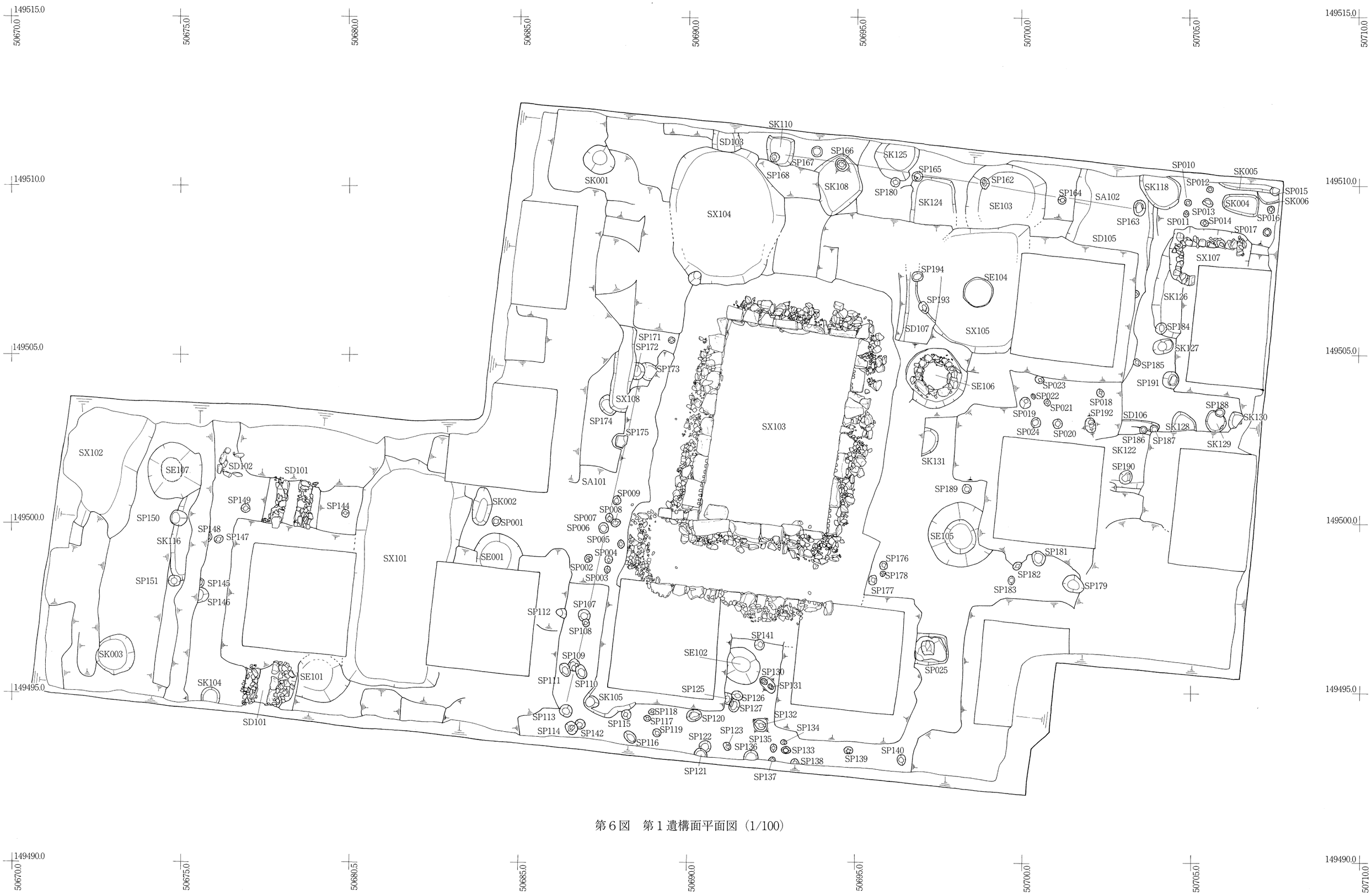
G層：灰色シルト質土～砂で，東部において軟弱な砂堆となる。中世前半に埋没するSR201を覆う。

H層：SR201の西岸部となる砂礫。調査地西部で微高地を形成するが，当堆積層も礫・砂のラミナ状の堆積であることから，本来は河川の沖積に由来するものと考えられる。

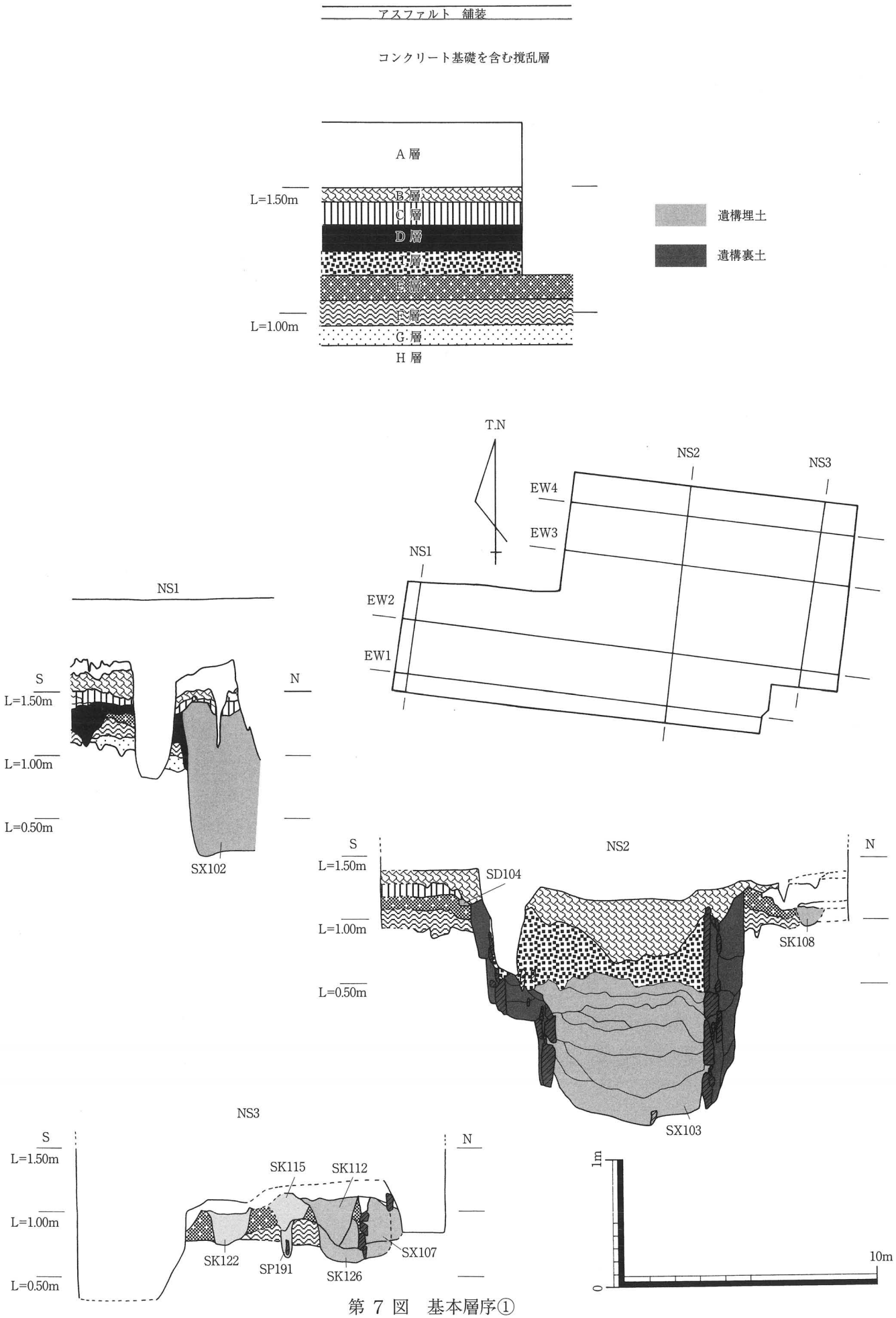
調査は試掘結果により，B層直下～F層上面までを第1遺構面（近世～近代），砂層G層及びH層上面を第2遺構面（中世）として実施し，遺構面の所属を遺構番号の頭に用いた。また0で始まる遺構番号は，撹乱直下の砂層面で確認されたもので，直接，遺構面の所属が特定できないものを示す。



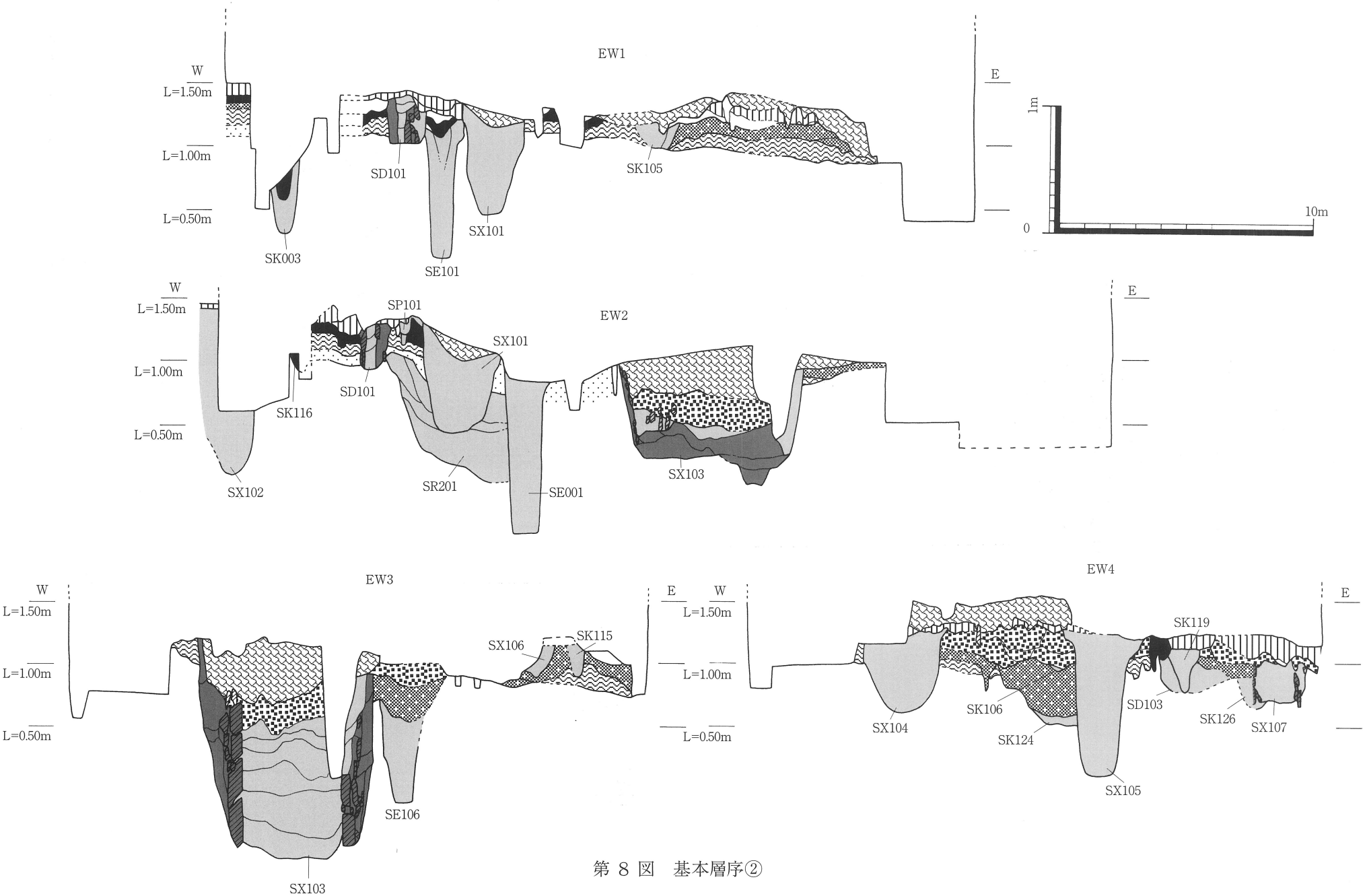
第５図　第２遺構面平面図（1/100）



第６図　第１遺構面平面図（1/100）


アスファルト　舗装
コンクリート基礎を含む撹乱層
A 層
B 層
C 層
D 層
E 層
F 層
G 層
H 層
L=1.50m
L=1.00m
遺構埋土
遺構裏土
T.N
NS1
NS2
NS3
EW1
EW2
EW3
EW4
S
N
L=1.50m
L=1.00m
L=0.50m
SX102
SD104
SK108
SX103
SK115
SK112
SK122
SP191
SK126
SX107
1m
0
10m

第 7 図　基本層序①


EW1
W
E
L=1.50m
L=1.00m
L=0.50m
SK003
SD101
SE101
SX101
SK105
1m
0
10m
EW2
SP101
SX101
SD101
SK116
SX102
SR201
SE001
SX103
EW3
SX106
SK115
SE106
SX103
EW4
SK119
SK106
SD103
SK126
SX107
SX104
SK124
SX105

第 8 図　基本層序②

第3節　中世以前の遺構・遺物

SR201 西岸部出土遺物（第9図参照）

調査地西部 D3，砂層中において確認した弥生土器底部である。標高 0.8 m前後，SR201 の西岸を形成する H 層中に埋没していたもので，出土状況からも原位置を留めるものでなく，南西部からの流入物とみられる。よって H 層については，弥生時代後期以降に形成された堆積層と考えられる。

1は，弥生土器の底部。体部下半に穿孔が認められ，土器棺に使用されていた可能性が考えられる。ローリングの痕は大きくなく，外面にミガキ調整，内面にはケズリ調整及び有機物の付着が認められる。底部には平坦部が残り，後期の所産と考えられる。

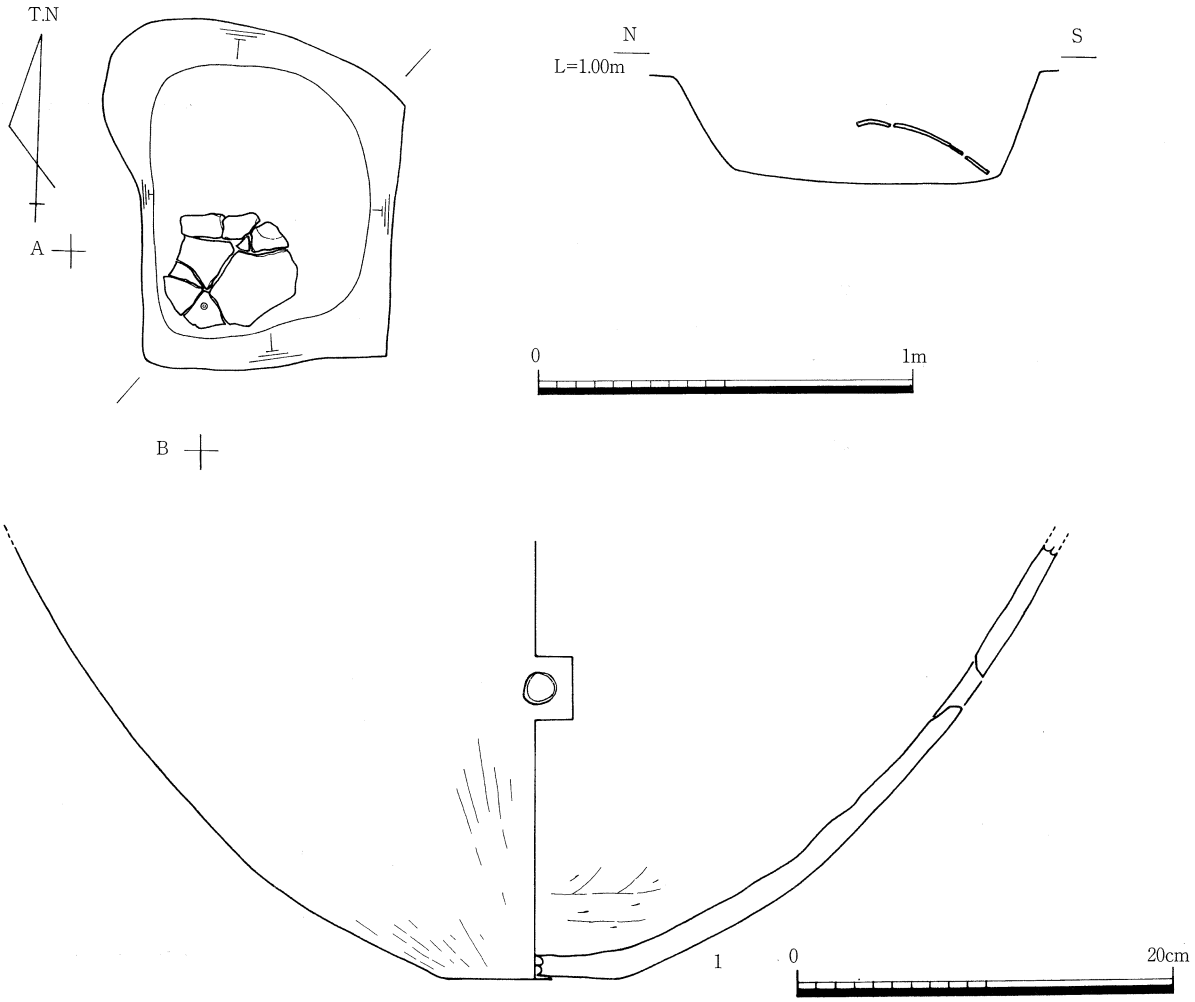
SR201（第 10 図参照）

調査地西部 E3，4，F4 において確認した自然流路で，砂層 G 層の下位に位置する標高 0.88 mで西岸を検出した。幅4 m程を測るが，東岸については大きく下がり，また礫を伴わない砂質土であったことから，更に東へ広がる可能性がある。埋土は上層部が円礫を含む黄色～灰黄褐色砂質土で，下層部は灰色シルト質粘土とオリーブ色砂のラミナ状の堆積を呈するもので，深度は西岸部から 0.7 m程を測る。

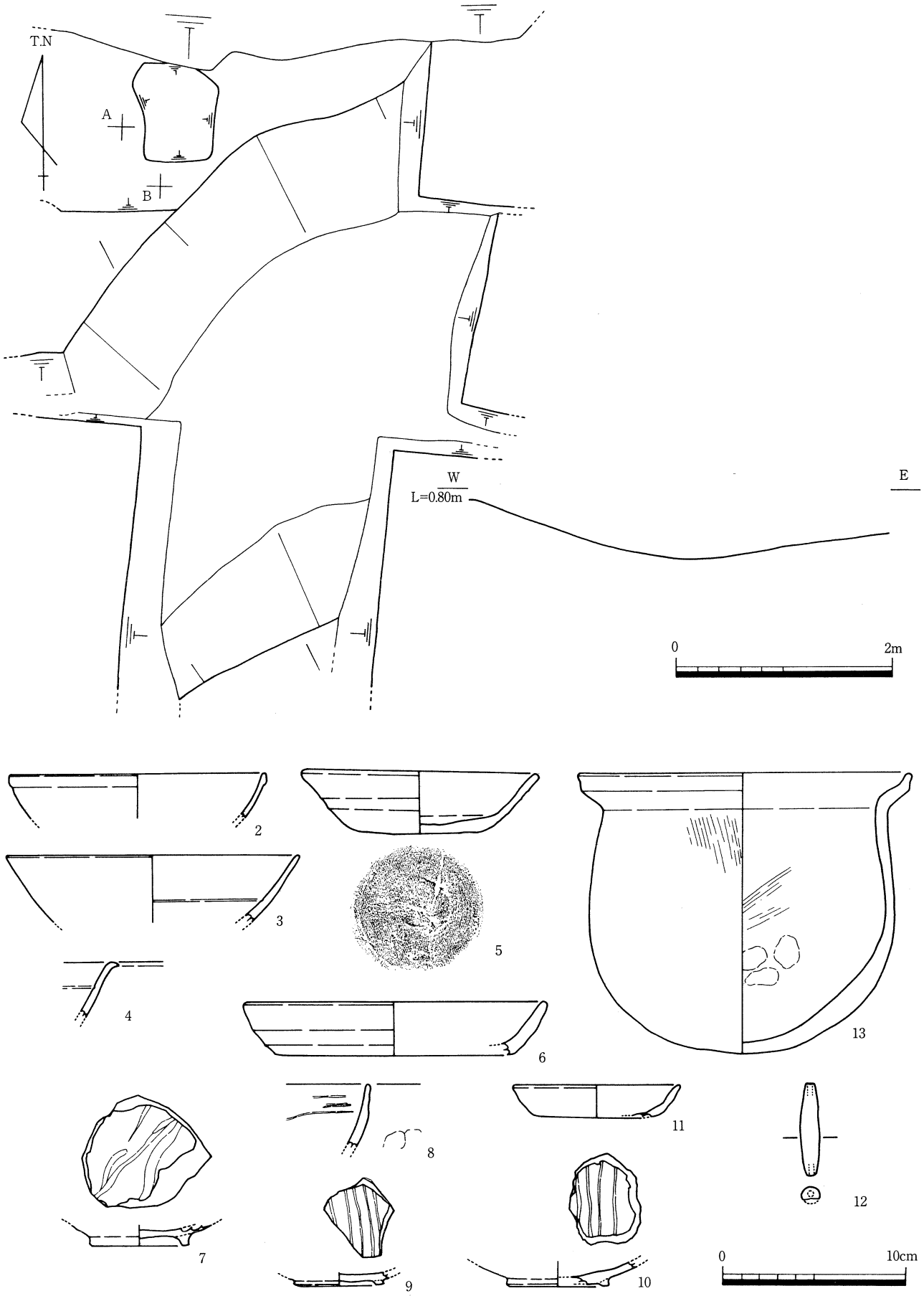
調査が可能であった範囲は狭小であったが，北東方向を示し，この方向に位置する SX103，SE103，SD105 等一定の深度をもつ遺構に当該期の遺物が見られ，これらの下位を通り調査地の北東方向へ延びるものと考えられる。遺物は下層に堆積した粘質土を中心に認められ，比較的遺存の良い杯等の土師質土器や牛馬とみられる顎部の骨等が出土した。所属時期については，出土遺物から概ね 12・13 世紀代に埋没期を迎えるものと考えられる。

SR201 他出土遺物（第 10 図参照）

2～4は白磁碗で，小片だが横田・森田分類（横田・森田 1978）でⅡ・Ⅷ類に相当するものとみられる。5・6は，土師質土器杯である。5は底部の回転ヘラ切り痕及び法量から，佐藤編年（佐藤 2000）の杯 D Ⅱ - 4に相当する。7は，黒色土器の椀底部。8～11 は，和泉型瓦器椀・皿である。12 は，管状の土錘である。13 は小型の土師器甕で，内外面に荒いハケ目調整を施す。口縁端部は摘み上げられ，凹状の面をもつ。13 については重複する SX101 の出土であるが，明確に異なる所属時期やほぼ完存する状態から，当流路に関わる遺物の可能性が考えられる。



第 9 図　SR201 西岸部遺物出土状況図（1/20），出土遺物実測図（1/4）



第10図 SR201平・断面図(1/50), SR201他 出土遺物実測図(1/3)

第2遺構面検出溝・土坑（第5，11図参照）

調査地東半部ではSR201埋没後にあたるG層上面で，以下の溝・土坑の他，ピットが比較的密集して検出された。SR201と同様に北東方向を向くSD201や東西方向に主軸をもつSK201・203・205があるが，確認可能であった範囲が狭く，また遺物も皆無に等しい出土状況からも不明な点は多い。これらの遺構の所属時期については，G層上面までで採取した遺物やSK202の出土遺物から，中世後半～近世初頭の時期が窺われるのみである。

SD201（第5・11図参照）

調査地東部で確認した溝である。標高0.76～0.92mで，約13mにわたり検出した。N-28°-E前後の方位をやや蛇行気味に延びる。幅1.5m，深度0.15mを測り，埋土は灰白色細砂の混じる灰黄褐色砂質シルトで，断面は舟底形を呈する。出土遺物は，少量の瓦器，土師質土器，白磁があるが，細片でローリングが著しく所属時期を窺えるものはない。

SD201出土遺物（第11図参照）

14は，和泉型瓦器椀の口縁部片である。

SD202（第11図参照）

調査地南部G7，標高1.3mで確認した溝である。検出長1.2mに留まるが，直線的に延びてN-74°-Wの方位を示している。幅0.48m，深度0.12mを測り，埋土は灰白色細砂の混じる灰黄褐色砂質シルトで，断面はU字形を呈する。出土遺物は無く，詳細な時期は不明である。

SK201（第11図参照）

調査地東部C12・13，標高0.80mで確認した土坑である。平面は長軸2.18m，短軸1.30mを測る楕円形を呈し，主軸方位はN-84°-Wを示す。埋土は灰白色細砂の混じる灰黄褐色砂質シルトで，断面は舟底形を呈する。出土遺物は少量で，須恵器甕，瓦器，土師質土器細片があるが，詳細な時期は不明である。

SK202（第11図参照）

調査地東部E10，標高0.87mで確認した土坑である。東半部を撹乱坑により欠くが，平面は径1.3m程の円形を呈するものと推定される。埋土は炭を多量に含む褐灰色シルトで，断面は舟底形を呈する。出土遺物は少量で，図化したものの他に，瓦器，土師器の細片がある。詳細は不明だが，出土遺物から概ね中世末・近世初頭の所属時期が推定される。

SK202出土遺物（第11図参照）

15は瀬戸・美濃系陶器で，鉄釉を施す天目茶碗である。16は，瓦質焼成の甕口縁部である。器面は摩滅しており細部不明だが，外面に叩き成形の痕跡が認められる。

SK203（第11図参照）

調査地東部E11，標高0.91mで確認した土坑である。平面は長軸1.94m，短軸0.78mを測る楕円形を呈し，主軸方位はN-84°-Wを示す。埋土は炭を多量に含む褐灰色シルトで，断面はU字形を呈する。出土遺物は無いが，埋土の特徴がSK202と同様に観察されていることから，同時期の所産と推定される。

SK204（第12図参照）

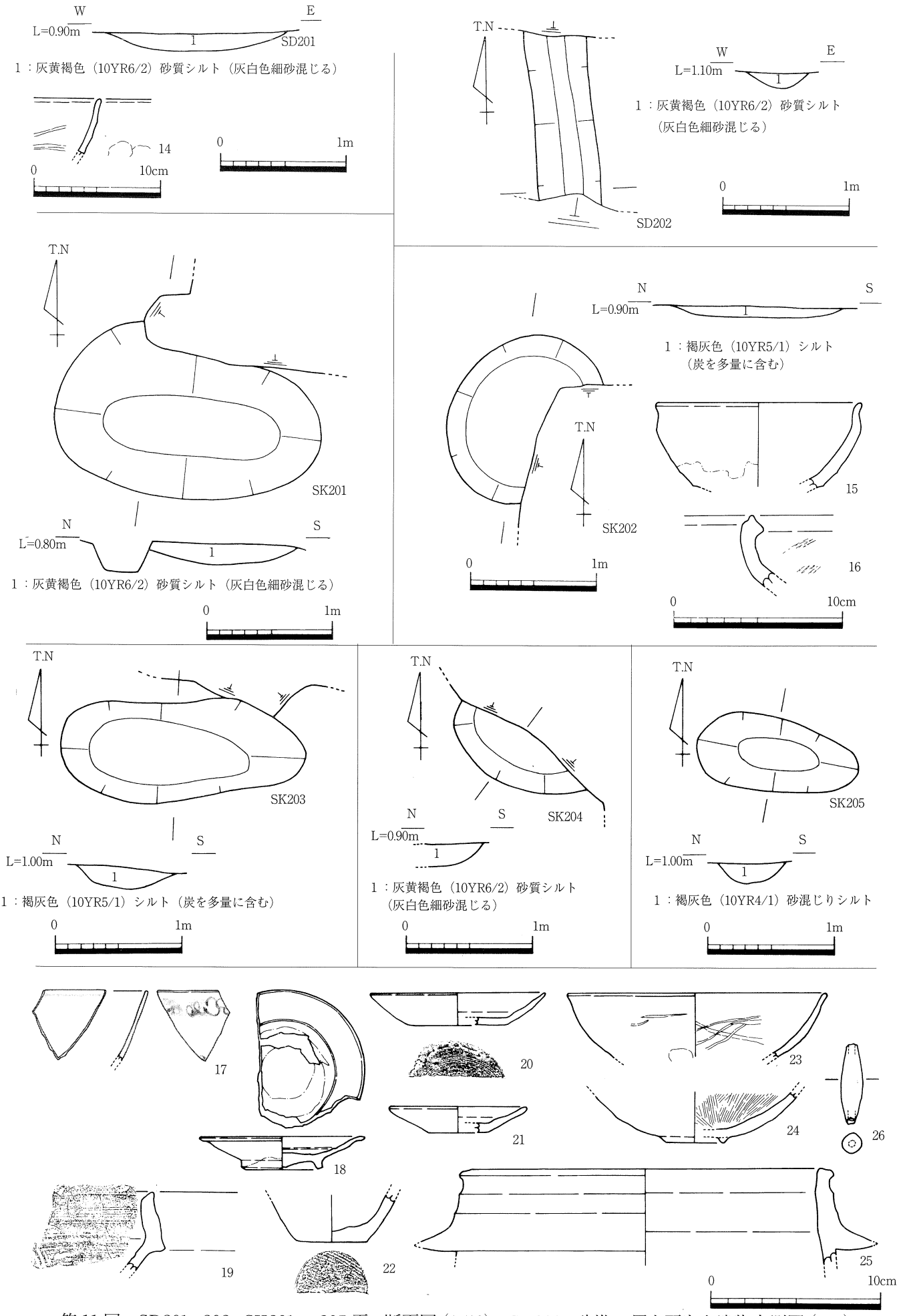
調査地北端部A9，標高0.73mで確認した土坑である。大半部を後出する撹乱により欠いており，詳細は不明。埋土は灰白色細砂の混じる灰黄褐色砂質シルトで，確認された深度は0.14m。出土遺物に少量の土師質土器細片があるが，詳細な時期は不明である。

SK205（第11図参照）

調査地南端部G7，標高0.97mで確認した土坑である。平面は長軸1.32m，短軸0.58mを測る楕円形を呈し，主軸方位はN-80°-Wを示す。埋土は褐灰色砂混じりシルトで，断面は台形を呈する。出土遺物に少量の土師質土器細片があるが，詳細な時期は不明である。

G層上面出土遺物（第11図参照）

17は，漳州窯系青花碗の口縁部である。18は白磁皿で，見込みに沈線と蛇ノ目釉剥ぎが施されており，横田・森田分類のⅢ類に相当する。19は備前擂鉢で，口縁部は断面扁平に拡張され外面に凹線をもたないことから，乗岡編年（乗岡1999）の中世5期に相当する。20・21は土師質土器坏・皿で，口縁部が大きく外傾する。いずれも胎土は橙色を呈し，底部には糸切り痕が認められる。22は土師質土器坏底部で，体部から口縁部へ直立する形態のものとみられる。胎土は浅黄色を呈し，底部には静止糸切り痕が認められる。23は，和泉型瓦器椀である。24は須恵器椀底部で，内面には刷毛目状の板ナデ調整が認められる。25は土師質焼成の羽釜で，口縁部に強い回転ナデを施す。26は，管状の土錘である。



第11図　SD201・202・SK201～205平・断面図（1/40），SK202・砂堆G層上面出土遺物実測図（1/3）

第4節　近世の遺構・遺物

調査地北東部F層上面検出遺構（第12～16図）

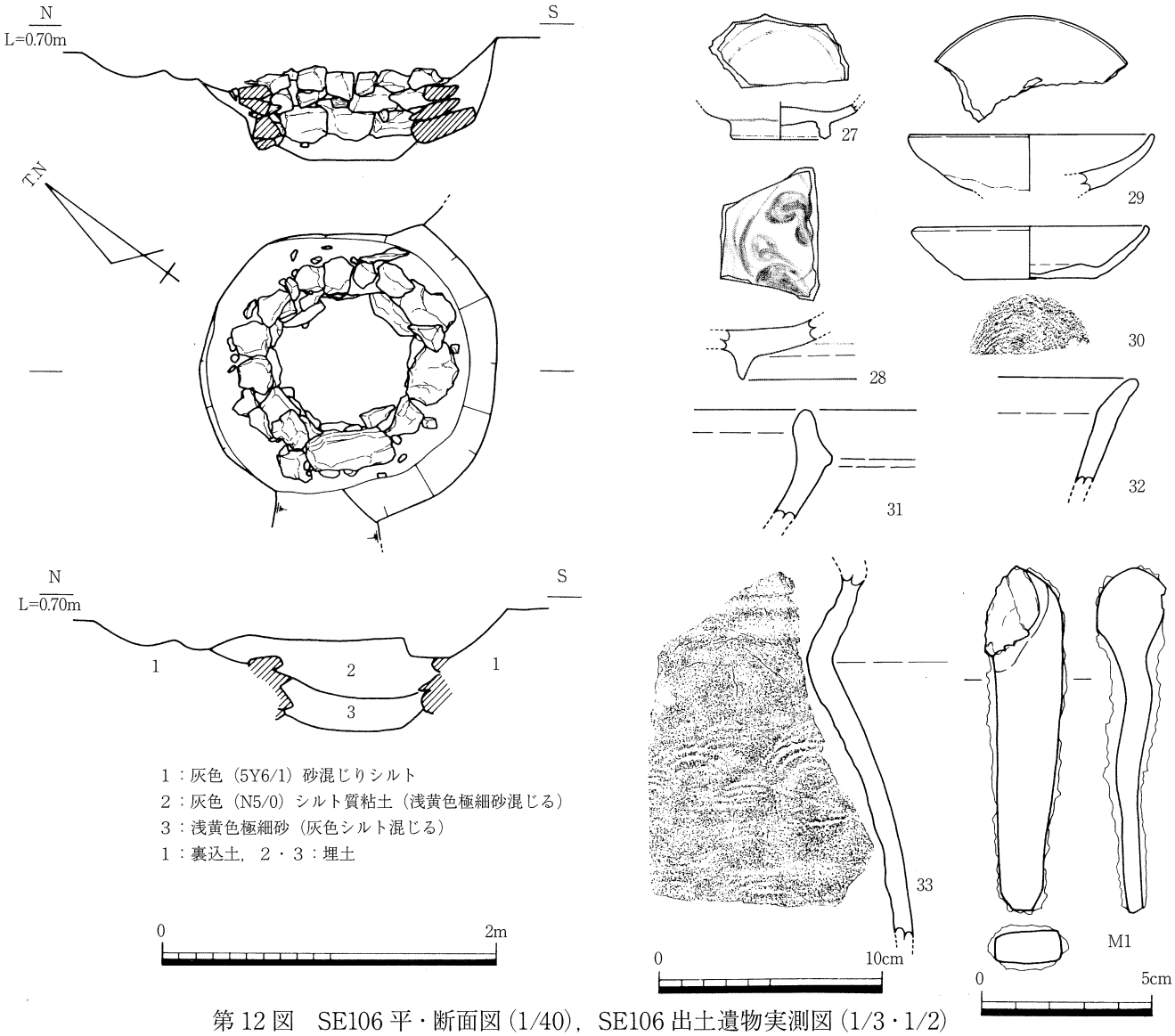
調査地北東部では，F層上面に帰属し一定量の遺物を伴う井戸，溝，土坑等が近接して確認された。何れもE層に被覆されており，同層と近似した埋土をもつことに加え，遺構間で接合する遺物もあることから，整地E層により大半部が埋没したものと推定される。この埋没時期については，出土遺物に肥前系陶器が伴い，同磁器が存在しないことから17世紀前葉と考えられる。

SE106（第12図参照）

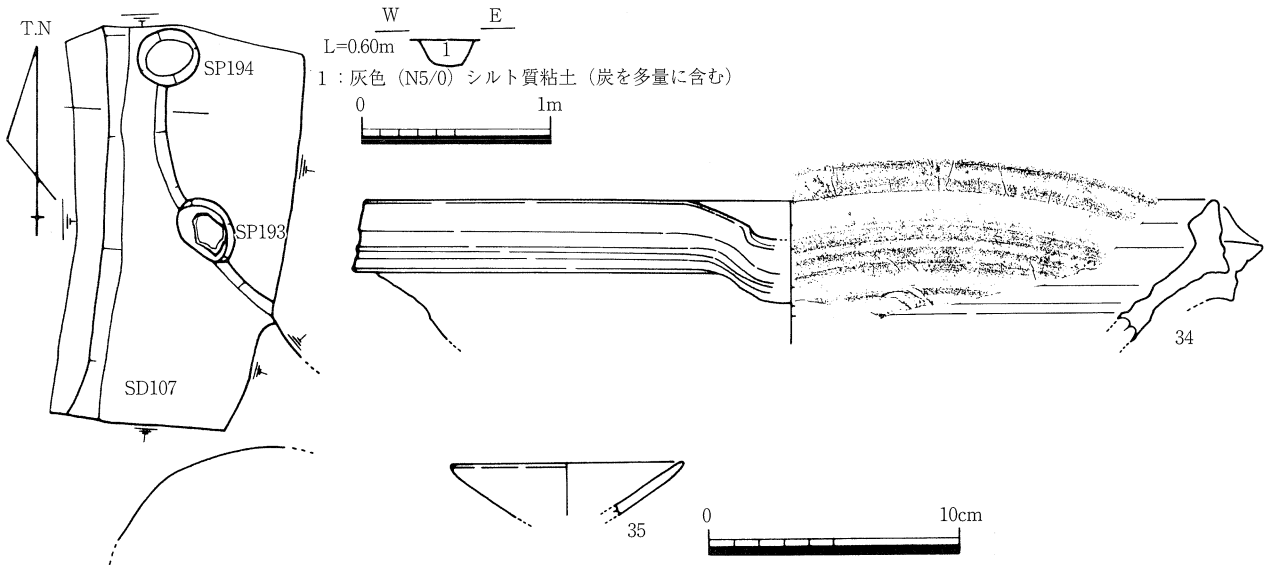
調査地中央部C9，標高0.63 mにおいて確認した石組み井戸である。土層断面でSX103のベース面のE層より下位で，F層上面で観察したもので，平面はコンクリート基礎B9の除去後，SD107と共に検出した。掘り方は平面で1.8 m程の円形を呈し，断面では南壁が垂直方向に立ち上がるが，SD107方向になる北壁は，段が付き開き気味となっている。井側の石組みは平面で内径約0.8 mのほぼ円形を呈しており，3段残る石積は，0.2～0.6 m大の角礫が横方向の目地に揃うように平積され，小型のものに小口積がみられる。石材は安山岩系のもので占められるが，一石のみ西壁上端に最大の石材となる花崗岩が認められる。埋土は上層部が遺物を包含し，グライ化した灰色シルト質粘土層で，下層部には浅黄色細砂層が堆積している。湧水が認められる底面では断面台形状に窪んでいるが，曲物等の井筒は確認できなかった。出土遺物は埋土からコンテナ1/4程度あり，図化したものの他，備前系陶器，須恵器細片，瓦等がある。

SE106出土遺物（第12図参照）

27・28は，漳州窯系青花の碗・皿である。29は肥前系陶器で，胎土目の皿である。30は土師質土器皿で，胎土は橙色を呈し底部に回転糸切り痕が認められる。31・32は土師質土器鍋類の口縁部。33は陶器甕の体部片。胎土は明黄褐・灰色土の交胎で，内面に同心円状の当て具痕が認められる。内外面とも褐色に施釉されたもので，SE103より同一個体とみられる口縁部（46）が出土している。M1は掘り方から出土した鉄製品で，釘あるいは工具の類と考えられる。先端が台形状に先細る扁平なもので，肥厚する頭部が付く。



第12図　SE106平・断面図（1/40），SE106出土遺物実測図（1/3・1/2）



第13図　SD107・SP193・194平・断面図（1/40），SP193・194出土遺物実測図（1/3）

SD107（第13図参照）

調査地北部B9，標高0.55 mで確認した溝である。検出長は2m程だがSE106付近で大きく広がり，北に位置するSK124へと直線的に延びる。北部では幅0.30 m，深度0.14 mを測り，断面はU字形を呈する。埋土はグライ化し，炭を多量に含む灰色シルト粘土である。出土遺物は無いが，検出面より17世紀前葉の埋没時期が考えられる。

SP193（第13図参照）

調査地北部B9，SD107東岸，標高0.54 mで確認したピットである。平面は長軸0.36 m，短軸0.26 mの楕円形を呈する。埋土は炭を含む褐灰色シルトで，人頭大の扁平な根石が認められる。

SP193出土遺物（第13図参照）

34は，備前系陶器擂鉢である。口縁部及び斜め方向の擂目から，乗岡編年の近世Ⅰb，c期に相当する。

SP194（第13図参照）

調査地北部B9，SD107東岸，標高0.58 mで確認したピットである。平面は径0.3 mの円形で，埋土は炭を含む褐灰色シルトである。

SP194出土遺物（第13図参照）

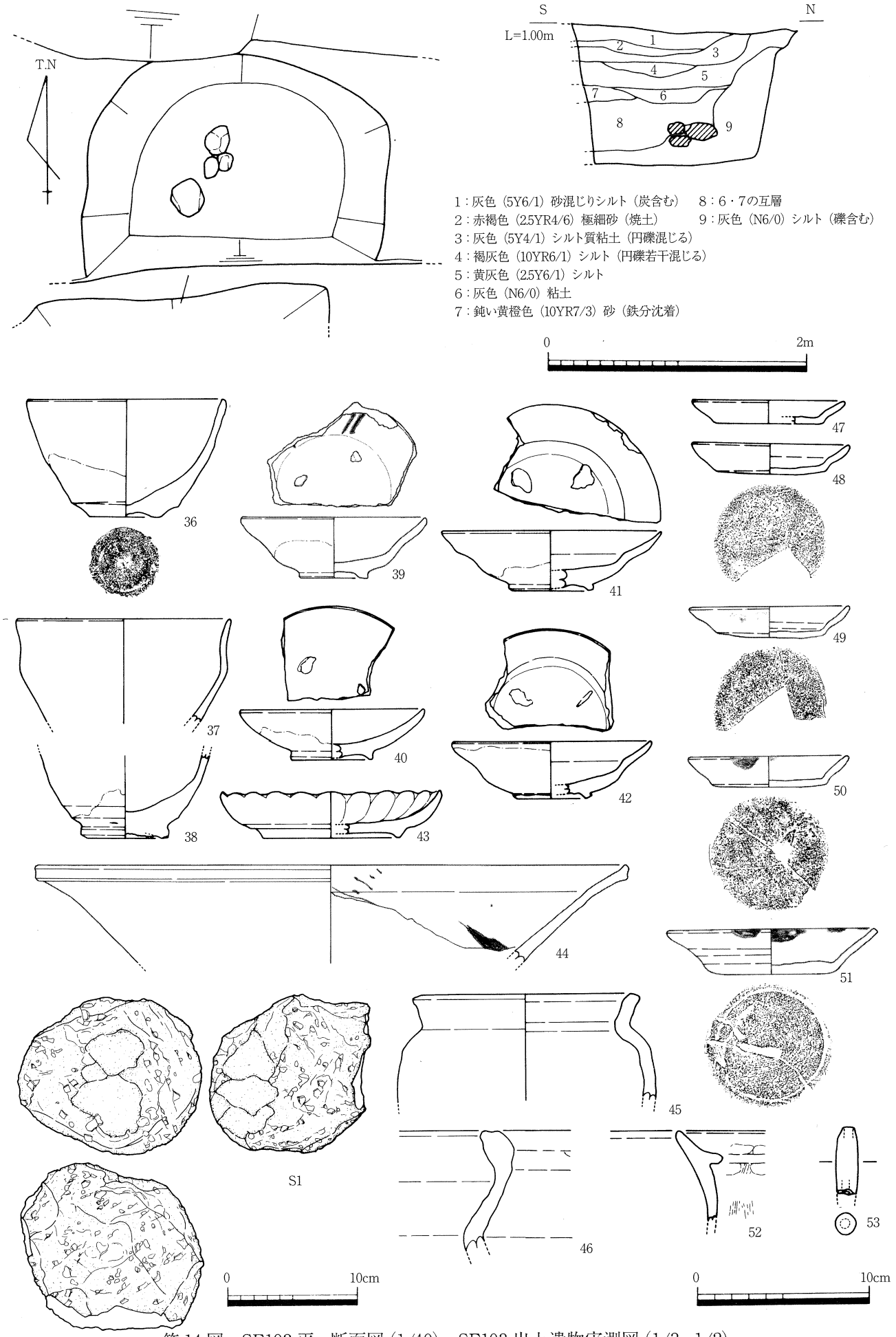
35は土師質土器皿で，胎土は橙色を呈する。

SE103（第14図参照）

調査地東部A10，標高0.85 mで確認した井戸状遺構である。後出のSX105に南半部を壊されており詳細は不明だが，平面は2.3 m程の円形あるいは隅丸方形の形態が推定される。F層をベースに深度0.96 mまで開削されており，断面は台形を呈し，北壁上端部では段が認められる。埋土は上層にE層と近似した炭を含む灰色シルト質土及び焼土，中層に円礫が混じるシルト質土，下層に粘土と砂の互層，最下層にグライ化した灰色シルト層が堆積している。また下層と最下層との境には，転落石とみられる人頭大の安山岩・角礫凝灰岩が確認されており，下層部以下で湧水が認められることを考え合わせると，下層部までが廃棄以後の埋め戻し及び整地に伴う堆積物と推定される。遺物については細分して取り上げていないが，中層付近までで大半のものが認められる。出土遺物はコンテナ1箱分あり，図化したような陶磁器類の他，巻貝や骨片等がある。

SE103出土遺物（第14図参照）

36～38は，肥前系陶器碗である。36はSK124・125との接合資料となっているもので，畳付には糸切り痕が認められる。39～42は肥前系陶器で，胎土目の皿である。39には，鉄絵が施されている。43は瀬戸･美濃系陶器で，菊皿である。高台内部にはトチン痕が認められる。44は肥前系陶器で，鉄絵を描く大皿である。45は，備前系陶器壺である。胎土は灰色を呈し，器面は赤褐色に焼き締まる。46は陶器甕口縁であるが，胎土及び施釉状態から33と同一個体の可能性が考えられる。47～51は土師質土器皿である。胎土は47～49が橙色，50・51が黄褐色を呈する。51は底部に回転糸切り痕を残し，器形より高松城編年（佐藤2003）の皿AⅣ形式に相当する。他の底部調整は，ナデ，あるいは板状圧痕が認められる。また49～51の口縁部には煤が付着しており，灯明に用いられたと考えられる。52は，土師質土器足鍋である。53は，管状の土錘である。S1は角礫凝灰岩で，明瞭な加工痕は残らない。



第14図　SE103平・断面図（1/40），SE103出土遺物実測図（1/3・1/2）

SD105（第15図参照）

調査地北東部A11·12，B12で確認した溝状遺構である。標高1.00 m前後で，約6.1 mにわたり検出した。N-9°-Eの方位に延びるが，南半で次第に浅くなり途切れる。北端で幅2.46 m，深度0.54 mを測り，断面はU字形を呈する。埋土の堆積状況は，中位までは炭・焼土を含むシルト・砂質土の互層でSE103の上層部と似た状況を呈しており，同様の埋め戻し・整地の際による堆積と推定される。これに対して，下位については砂層が観察されていることから，機能時においては水流があったことが窺われる。出土遺物はコンテナ2箱程度あり，図化したものの他，土師質土器皿，内耳付鍋等の細片や羽口がある。

SD105出土遺物（第15図参照）

54は，漳州窯系青花大皿の底部である。55～57は，肥前系陶器皿である。56は胎土目のもので，57は鉄絵を描く大皿である。58は，備前系陶器擂鉢である。口縁部及び斜め方向の擂目から，乗岡編年の近世Ⅰb，c期に相当するものと考えられる。59は軟質施釉陶器で，ひょうそくと考えられる。灯火に用いられたためか，器面の剥離が著しい。60は土師質土器で，体部が大きく開く鉢類とみられるが，内面を中心に煤化が認められる。S2は，砥石である。断面台形で，4側面に磨耗が認められる。M2は，鉄釘である。61は手捻りの犬型土製品で，頭部先端及び左前足が切り落とされている。62～66は下位に存在したと推定されるSR201からの混入品とみられるもので，和泉型瓦器椀（63·64），十瓶山窯産黒色土器椀（65），土師器椀（66）がある。

SK118（第16図参照）

調査地北東部A12，標高0.89 mで確認した土坑である。一部で調査範囲より外れるが，平面は長軸1.36 m，短軸0.97 mを測る楕円形を呈するものとみられる。深度は約0.5 mで，断面は台形を呈する。埋土は上部に炭を含む暗灰黄色シルトで，下層部に砂質土の堆積が認められる。西半が重複関係にあるSD105の埋土と上・下層部において近似しており，明確な前後関係は認められないことから同時期に機能し埋没したものと考えられる。出土遺物は少量で，肥前系陶器，備前系陶器，土師質土器細片がある。

SK124（第16図参照）

調査地北端部A9，標高0.74 mで確認した土坑である。A8～A10においては，E層が大きく窪んでおり（第8図EW4参照），その下端でSK125と共に検出された。南部を欠くが，平面は長軸1.42 m以上で，短軸1.37 mの長方形と推定される。深度は約0.3 mで，断面は台形を呈する。埋土は上部に灰色～褐灰シルト質土層，下層部に浅黄橙色シルト層が認められた。出土遺物はコンテナ1/4程度あり，図化したものの他，土師質土器細片，瓦器椀，須恵器坏，瓦，鉄釘等がある。

SK124出土遺物（第16図参照）

67～70は肥前系陶器で，碗（67），胎土目の皿（68），絵唐津向付（69·70）である。

SK125（第16図参照）

調査地北端部A9，標高0.83 mで確認した土坑である。A8より東へ下る窪地の東肩において検出された。北部が調査範囲より外れるが，平面は1.4 m足らずの円形あるいは隅丸方形と推定される。深度は約0.4 mを測り，断面は台形と推定される。埋土は上部が炭を含む鈍い黄橙色シルトで，下層部に円礫を含んだ灰白色シルト質土層が認められた。出土遺物は少量で，瀬戸・美濃系陶器皿等の細片がある。

SK124·125検出時出土遺物（第16図参照）

71～77は，調査地北端部A8～A10区間で認められた窪地の掘削時のもので，SK124·125検出までの出土遺物である。71·72は，肥前系陶器碗である。71の畳付には，胎土目の熔着が認められる。73·74は，黄橙色の胎土をもつ土師質土器坏・皿である。75は土師質土器の底部で，器面は摩滅しているが外面には平行する叩き痕が認められる。76は土師質土器甕で，内面にハケ調整を行う。77は備前系陶器擂鉢で，口縁は断面三角形になっており顎下端は突出する。斜め方向の擂目が認められることから，乗岡編年の近世Ⅰb，c期に相当する。

SK126（第17図参照）

調査地北東部B12，標高1.02 mで確認した土坑である。平面は大半部を欠くことから全容は不明であるが，L字形のコーナーをもつことから，長軸1.6 m以上の方形もしくは長方形で，N-12°-E前後の主軸方位が推定される。また南西隅部においては，径0.4 m程の円坑が遺構掘削に伴い確認されている。深度は約0.5 m，断面は台形と推定され，炭·焼土を含む埋土には大型の骨片が多数認められた。出土遺物はコンテナ1/3程度あり，図化したものの他，土師質土器皿の細片，骨片等がある。

SK126出土遺物（第17図参照）

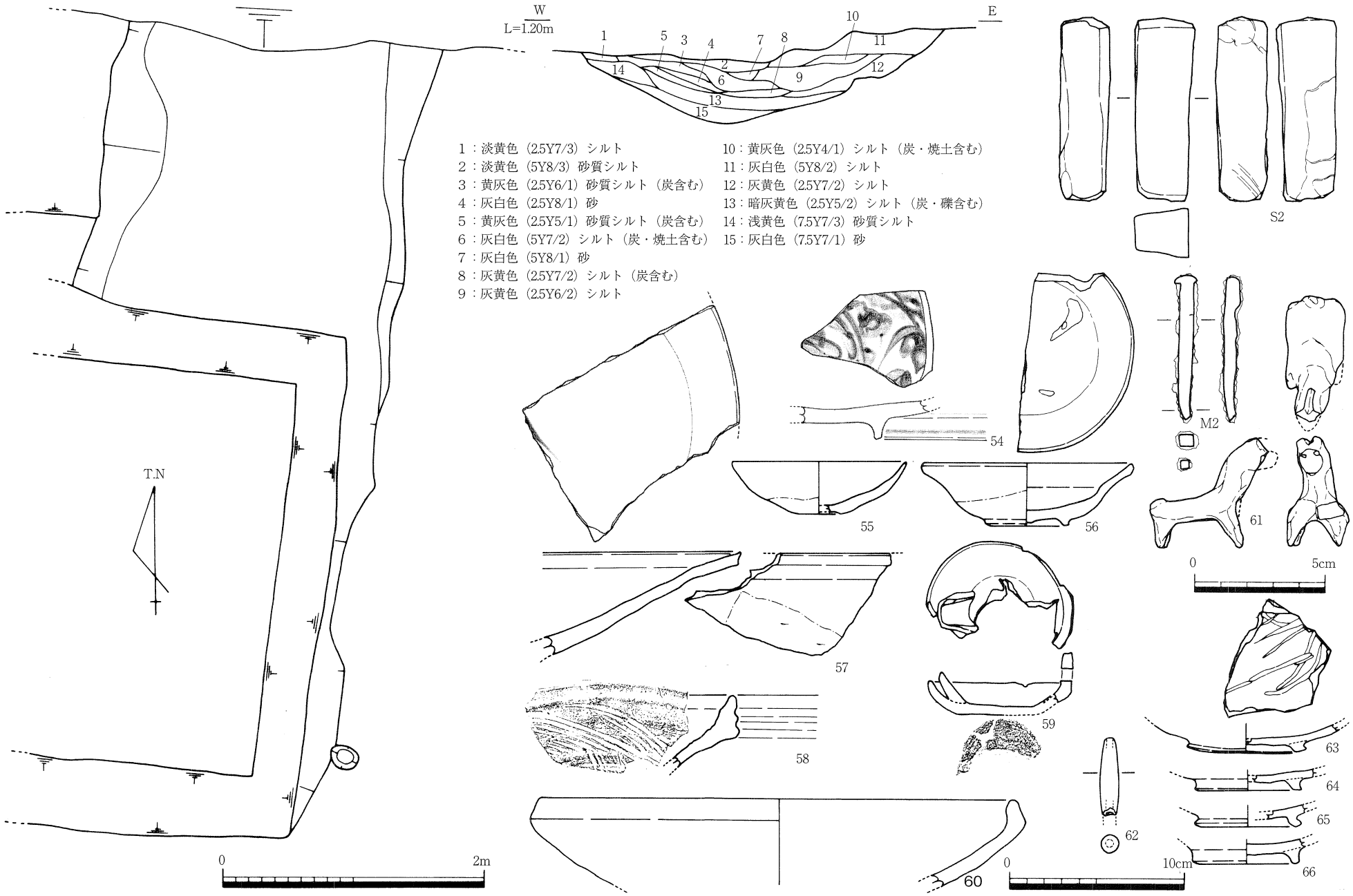
78·79は肥前系陶器で，78は鉄絵を描く皿である。80は，土師質土器擂鉢の底部である。M3は鉄製品で，先端部が台形に先細る扁平な基部をもつ。頭部付近が折れ曲がっており，釘類と推定される。

SK127（第17図参照）

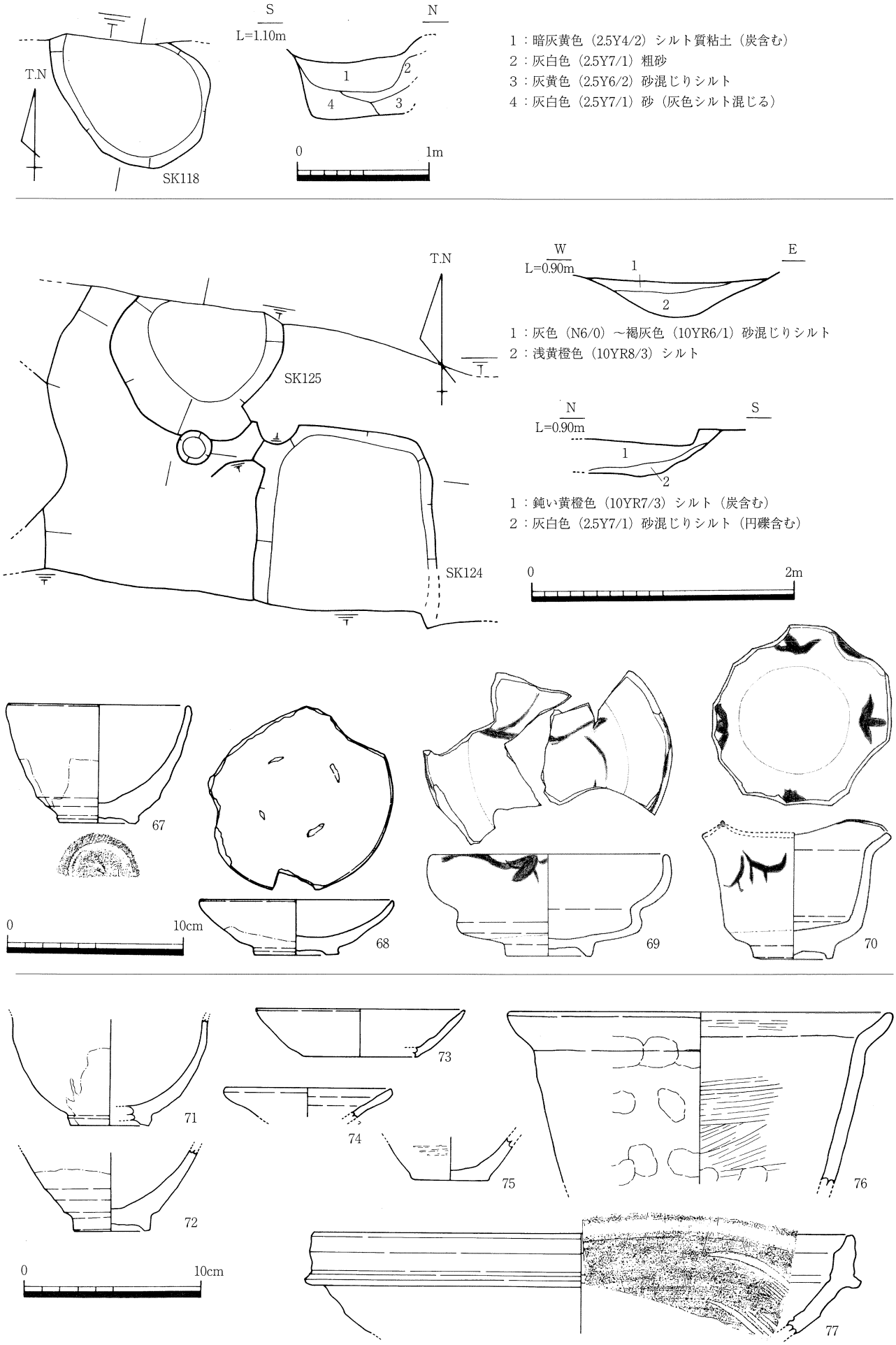
調査地北東部B12，標高0.94 mで確認した土坑である。平面は，長軸0.6 m，短軸0.4 mを測る楕円形を呈する。深度は0.36 m，断面は台形を呈するが，北東方向に段が付いており遺構の規模から柱穴の可能性も考えられる。埋土は砂混じり黄灰色シルト質土の単層である。出土遺物は少量で，図化したものの他，土師質土器，瓦器細片，鉄釘等がある。

SK127出土遺物（第17図参照）

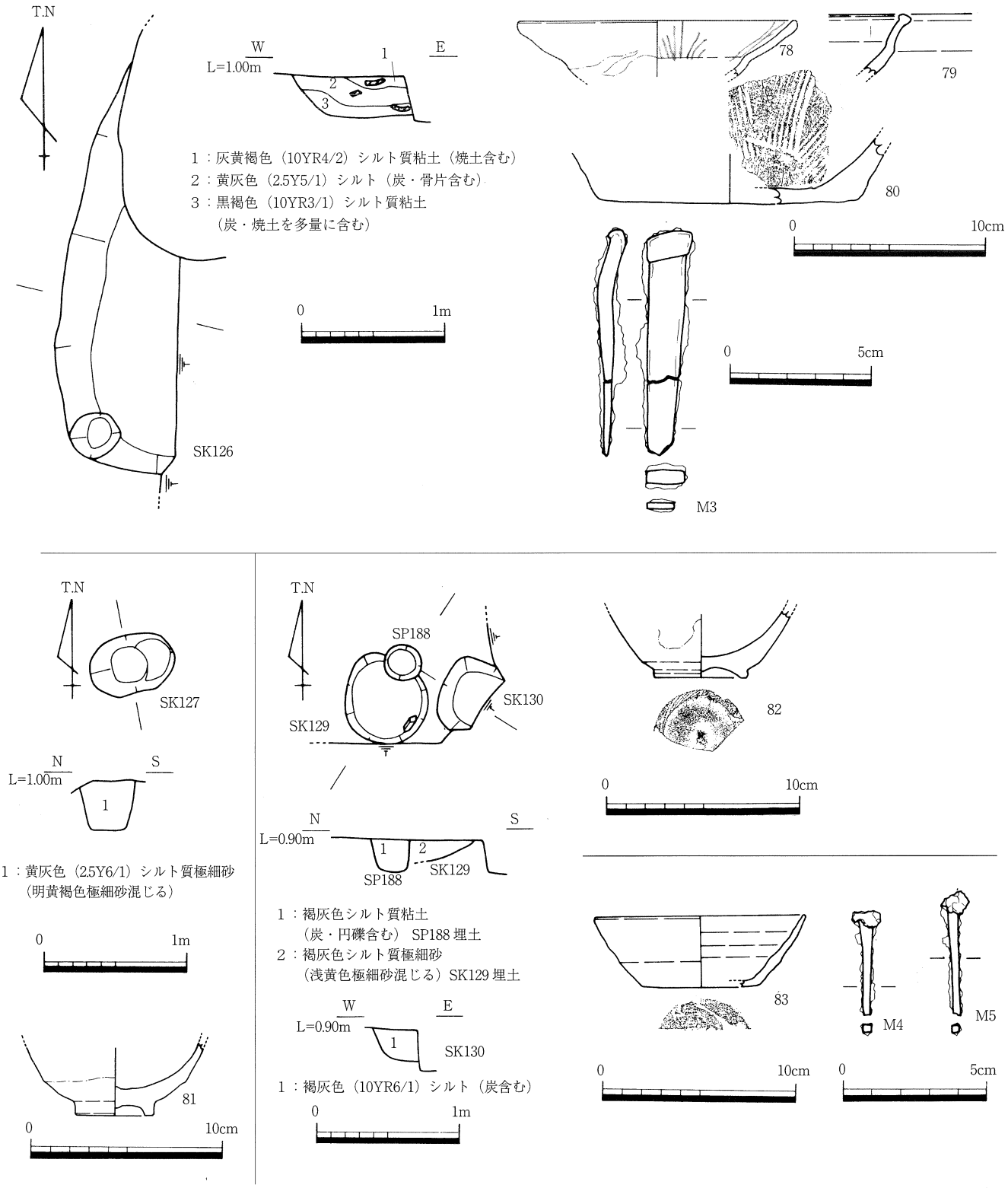
81は肥前系陶器で，鉄釉を施す碗である。



第15図　SD105平・断面図（1/40），SD105出土遺物実測図（1/3・1/2）



第16図　SK118・124・125平・断面図（1/40），SK124，SK124・125検出時出土遺物実測図（1/3）



第 17 図　SK126・127・129・130 平・断面図（1/40），SK126・129・130 出土遺物実測図（1/3・1/2）

SK129（第 17 図参照）

調査地東端部 C13, 標高 0.84 mで確認した土坑である。平面は，0.6 m程の円形を呈する。深度は 0.16 m，断面は舟底形で，埋土は砂混じり褐灰色シルト質土の単層である。出土遺物は少量で，図化したものの他，土師質土器細片，鉄釘等がある。

SK129 出土遺物（第 17 図参照）

82 は肥前系陶器碗の底部で，畳付に糸切り痕が残る。

SK130（第 17 図参照）

調査地東端部 C13, 標高 0.82 mで確認した土坑である。東部を欠くが，平面は0.5m 程の円形と推定される。深度は 0.24 m，断面は台形を呈し，埋土は炭を含む褐灰色シルト質土の単層である。出土遺物は少量である。

SK130 出土遺物（第 17 図参照）

83 は土師質土器坏。胎土は鈍い橙色を呈し，底部に回転糸切り痕が残る。M 4・5 は，鉄釘である。

調査地北東部E層上面検出遺構（第18～36図参照）

以下（第18～36図）はE層上面で認められ，且つI層に被覆あるいはそれと同系の埋土をもつ遺構である。SX103以東を中心に認められ，下位面及びSX103の出土遺物から17世紀前葉以降で，17世紀後半までの所産と推定される。

SX103（第18～21図参照）

調査地中央部で確認された地下遺構で，精緻な石積をもつ地下空間とこれに付随する半地下の昇降部で構成される。石積された地下空間は，豊富な湧水により大型の井戸状を呈し，南西隅の底には半地下部分から降りる階段石とみられる扁平な石が置かれている。半地下部分の床面は礫敷を行うもので，この周囲を取り囲むように石列と石積に伴う裏込石が認められる。地下室と井戸，双方の性格が想定されるが，ここでは石積された地下空間を石室，これに付随する半地下部分を踊場と呼称し，以下，確認状況を報告する。

掘り方（第18・21図）：検出された標高は，北部で最も高く1.17mを測り，続いて西，南部が1.00～1.10m，破壊の大きい東部では0.8～0.9m前後を測る。平面の規模・形態は，南北方向10.74m，東西方向6.8m前後を測り長方形を呈するが，この内，踊場部分は東西方向に広く，約7.35mを測り，南端部がやや東西方向に突出している。

断面は踊場の基底で段が付き，更に石室の石積の2段目上端に相当する高さでも段状を呈する。また後述するように2段目までとそれ以上の石積との石材質に違いが認められ，段付の掘り方となる点は石積の工程に関連するものと推定される。石積の裏込め（14層）の背面は，砂質土・粘質土（15～20層）の互層で，版築状の堆積となり上端の砂層（15層）は硬化が認められる。背面での版築層や裏込め石が認められる高さからは，石積の良く残る北・西壁においても，天端まで少なくとも更に一段相当の石積が存在したものと推定される。一方，踊場部分は南端の石列と石室南壁を基底とし砂層を敷き詰め，その上面に礫敷きが認められる。

石積（第18～21図）：石室部分は，布積を基調に最も遺存する箇所で4段相当が認められる。北壁上段では鏡積を行っており，昇降部との位置関係からも奥壁に相当するとみられる。東壁では昇降部の東半部と同様に破壊が激しく，北端部を除き2段相当しか残らない。南壁は踊場部分が取り付く箇所で，礫敷きの高さから南壁の西端に積まれたものと同じ高さまで石積されていたと推定される。西壁は石積の遺存状況が最も良好だが，北部では谷状に落ち込む箇所が認められ，調査時にはこの下端に位置する根石の一石が崩落している。このため，石室の使用期間において積直しが行われたことが推察される。なお石積の解体調査の結果，根石は砂堆上で直に据えられており，以下での胴木等の設置は確認できなかった。

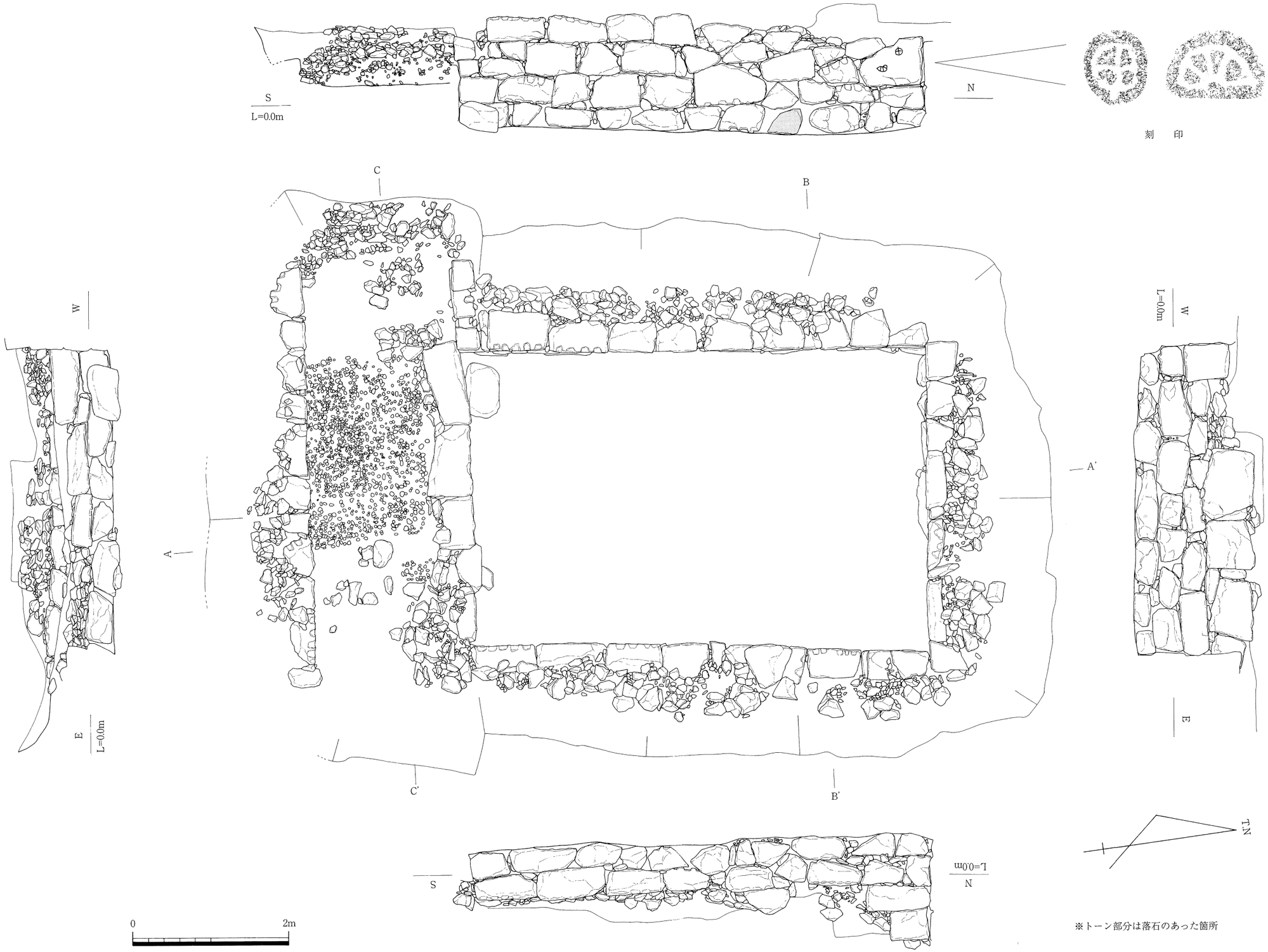
石積の工程については，上述のような掘り方の形状から2段目までを先行して行った可能性が考えられるが，石室壁面の立・平面で観察される前後関係では北壁西端から時計回りに北→東→南→西壁の順序を考えることができる。また南西角では，石室の南と西壁，隅石を介し袖状に延びる踊場の北壁とに前後関係が見られ，石室の南壁→西壁2段目まで→踊場の北壁基底(隅石)→石室西壁3段目の順で，これ以降に踊場の北壁を石積しながら石室の西壁を積上げたと考えられる。以上をまとめると，石室部分の2段目までを概ね時計回りに積上げ，3段目以降も北壁西端から時計回りに行い，2段相当の南壁に際し，踊場の石積を行ったと推定される。また工程の最終段階にあたる西壁端の3段目の石材には，⊕及び生駒家の家紋と推定される扇形の刻印（波切車紋）が認められる。

石材質（第20図）：石積部分には全て花崗岩系のものを用いるが，更に目視により3種類に大別された。最も特徴的な石材はG1類としたもので，雲母・金雲母を多量に含み，石英質の粒子が粗く成形が容易な石材である。主に3段目以上と踊場部分南端の石列に用いられ，根石及び2段目との使用状況に差が認められる。矢穴は，これらの種別に関連せず，幅・長さとも10cm程度に確認されたが，根石は荒割に近いのに対し，上段部のものはハツリ痕を留める等，表面を整えたものが多い。これらの点については，石積の工程，石材質とともに湧水面の上下にも対応するようである。一方，間詰め・裏込め石については，安山岩系が主体を占め，砂岩，花崗岩系のものもあるが，上段部の間詰めには成形時に多量に発生したとみられるG1類の使用が目立つ。

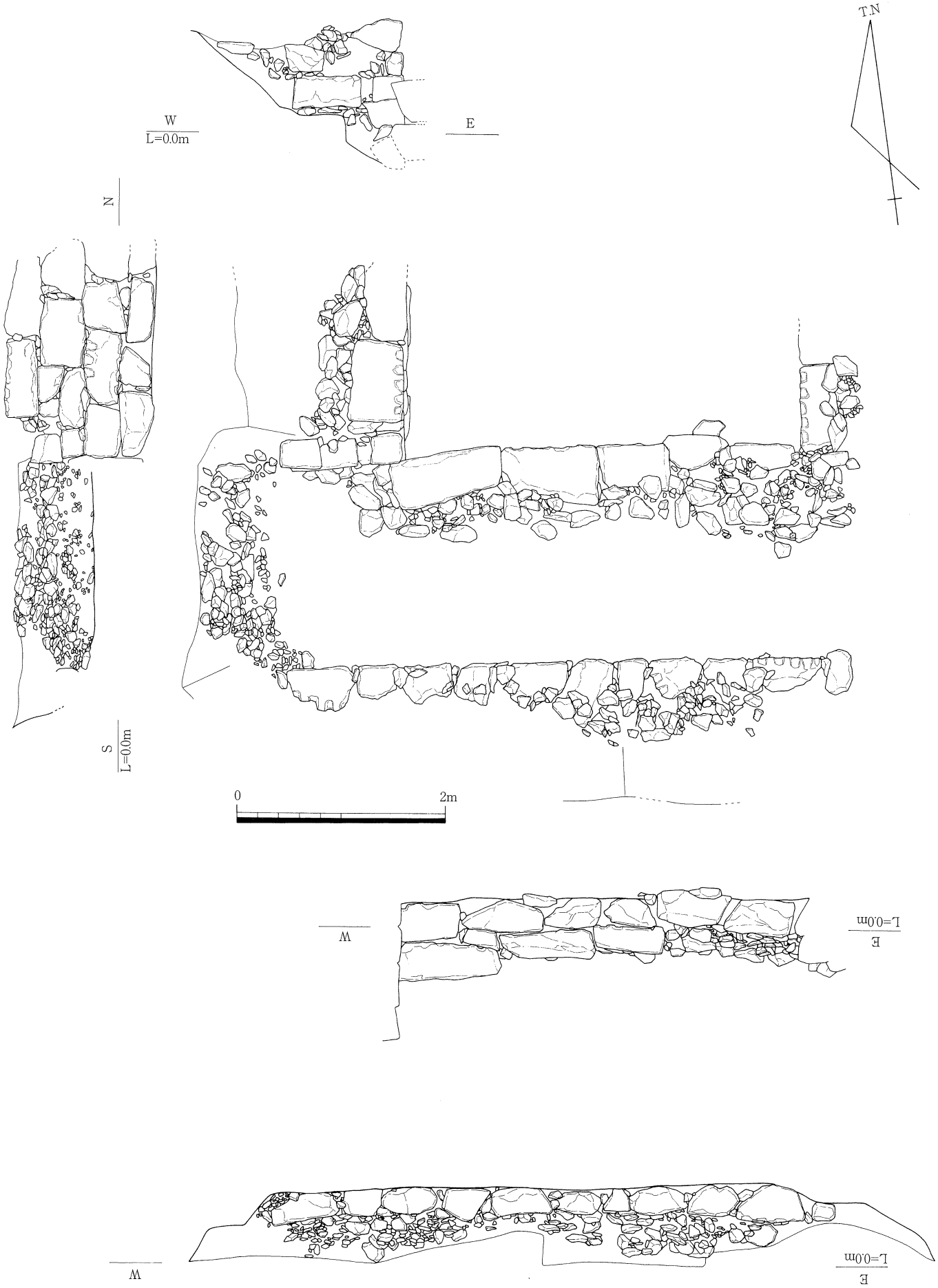
石室（第20図）：石室内は南北約5.9m，東西約3.8mを測り，広さは22.4㎡を測り，石積された壁面は最も遺存する箇所で1.6m前後を測る地下空間となる。底面は北へと緩やかに下り，北半中央部付近で最深の標高−0.57mを測る。中世の埋没流路（SR201）上に位置する可能性が高く，南・西壁の根石付近からは多量の伏流水が認められる。ほぼ海抜高まで湧水が及び，水深0.3～0.5mの水溜となっている。また南西隅には南壁に接して，0.4×0.7m大の扁平な円礫が認められるが，石材質の明瞭な違いから石積の転落石ではなく，踊場から石室内へと降りる階段石として設置されたと考えられる。

踊場（第20図）：石室に付随した半地下の空間で，中央部の床面には礫敷きが認められる。階段石との位置関係では東方より礫敷部分を経て石室内へ降りるL字の導線となっている。礫敷には光沢をもち黒色を呈する所謂，那智黒石が用いられ，5cm大のものが敷き詰められている。またこの空間の西部では，隅石をもち石室西壁から連続する石積が認められる，更に西端の掘り方及び南端部の石列上の傾斜部分に裏込め石が散乱しており，検出時において石室で用いられた石材より一回り小振りの転落石が多数あったことを考え合わせると，周囲を石室と同様の高さまで石積していたと考えられる。東部については破壊が著しいため，開口部分を示すものか，西部と同じ構造となるか判然としない。

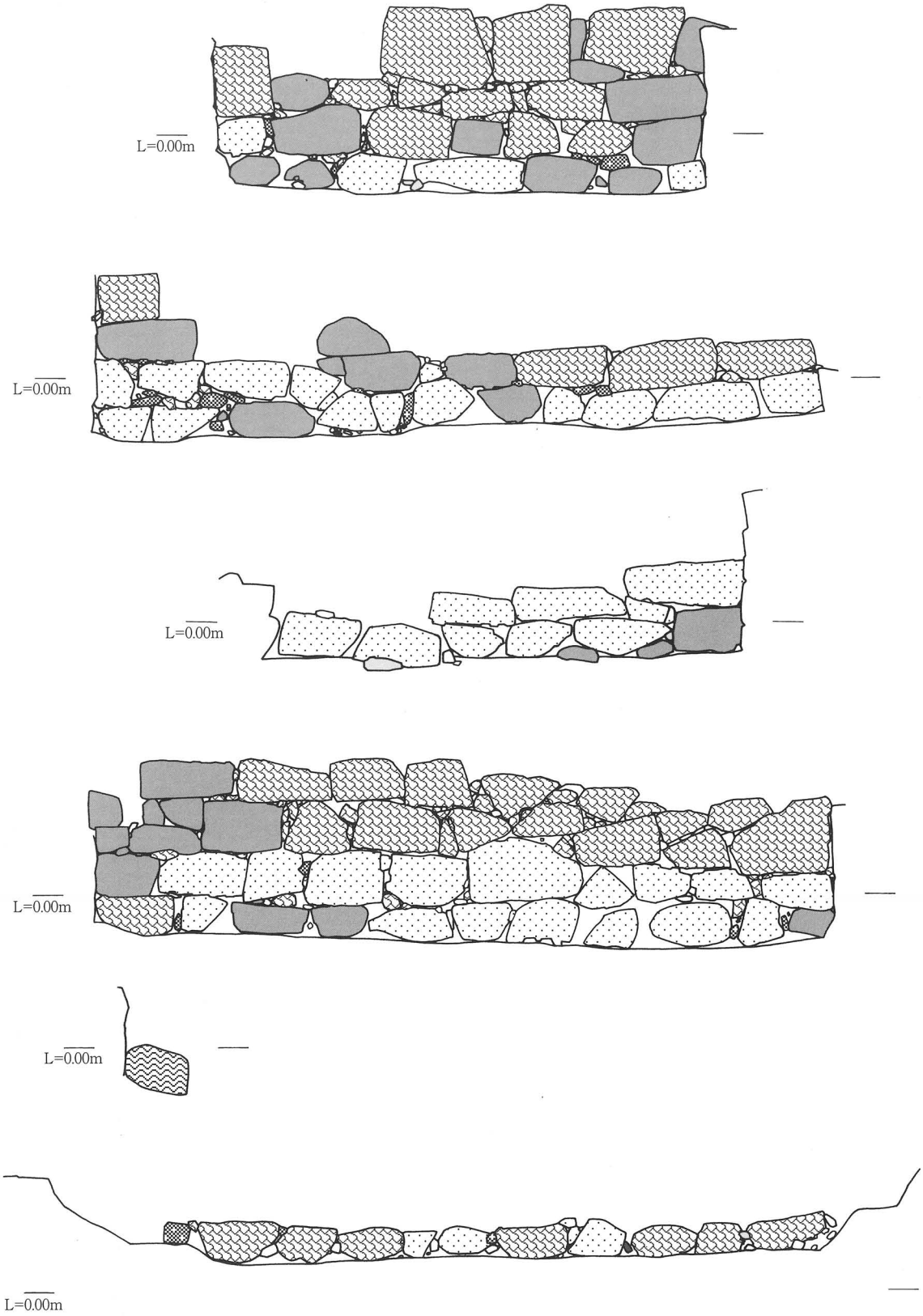
上部構造（第6・18図）：礫敷の状態や一定量ある出土瓦から上屋の存在が想定されたが，その規模・構造を示すものは確認できない。石積の天端を土台とするものやSA101・SD104を廂・雨落ちといった付随部分とする可能性



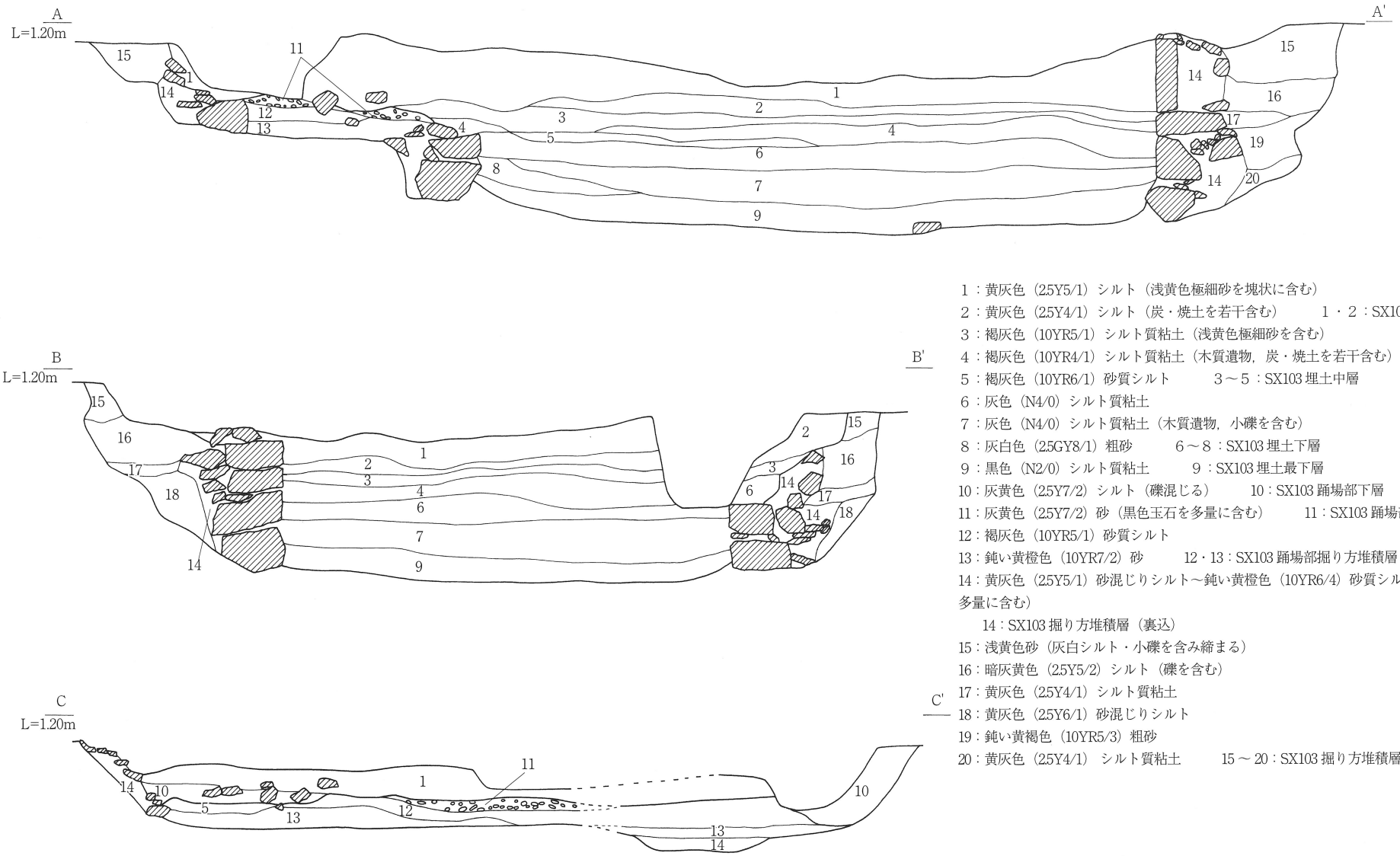
第18図　SX103 平・立面図①（1/50）・刻印拓本（1/8）



第19図　SX103平・立面図②（1/50）



第 20 図　SX103 石材分類図 (1/50)



1：黄灰色（2.5Y5/1）シルト（浅黄色極細砂を塊状に含む）
2：黄灰色（2.5Y4/1）シルト（炭・焼土を若干含む）　　1・2：SX103 埋土上層
3：褐灰色（10YR5/1）シルト質粘土（浅黄色極細砂を含む）
4：褐灰色（10YR4/1）シルト質粘土（木質遺物，炭・焼土を若干含む）
5：褐灰色（10YR6/1）砂質シルト　　3～5：SX103 埋土中層
6：灰色（N4/0）シルト質粘土
7：灰色（N4/0）シルト質粘土（木質遺物，小礫を含む）
8：灰白色（2.5GY8/1）粗砂　　6～8：SX103 埋土下層
9：黒色（N2/0）シルト質粘土　　9：SX103 埋土最下層
10：灰黄色（2.5Y7/2）シルト（礫混じる）　　10：SX103 踊場部下層
11：灰黄色（2.5Y7/2）砂（黒色玉石を多量に含む）　　11：SX103 踊場部礫敷き層
12：褐灰色（10YR5/1）砂質シルト
13：鈍い黄橙色（10YR7/2）砂　　12・13：SX103 踊場部掘り方堆積層
14：黄灰色（2.5Y5/1）砂混じりシルト～鈍い黄橙色（10YR6/4）砂質シルト（拳～人頭大の礫を多量に含む）
14：SX103 掘り方堆積層（裏込）
15：浅黄色砂（灰白シルト・小礫を含み締まる）
16：暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト（礫を含む）
17：黄灰色（2.5Y4/1）シルト質粘土
18：黄灰色（2.5Y6/1）砂混じりシルト
19：鈍い黄褐色（10YR5/3）粗砂
20：黄灰色（2.5Y4/1）シルト質粘土　　15～20：SX103 掘り方堆積層（版築）

0　2m

第 21 図　SX103 断面土層図（1/50）

も考えたが明確にできるものではない。

埋土（第21図）：石室・踊場の埋土は，10層に分割された。石室内上層部には，基本層序Ⅰ層に相当する砂質土をブロック状に含んだ黄灰色シルト（1層），中層部には褐色シルト質土（3～5層），下層部にはグライ化し木質遺物を含んだ灰色粘質土及び砂（6～8層）で，最下層に木質遺物を多量に含む黒色粘質土（9層）に大別される。一方，踊場部分には，1層の下位に石積・裏込めの石材を含む灰黄色シルト層（10層）が認められる。また中層に焼土粒・炭が認められる点については，少量であるうえ，先行する遺構に焼土が確認されることから，埋め戻し時の二次堆積である可能性がある。埋土中の転落石については，石積に要した規模のものはなく，踊場部分とは対象的に廃棄時に抜き取られ，他に転用された可能性が考えられる。最下層については板材が多量に認められたが，腐敗が著しく大半が取り上げ不能であった。また底面にかけて踊場部分と同様の黒色の円礫も一定量認められたが，礫敷きを行ったものかどうかの判断はできなかった。最下層より上方部では湧水は無く，井戸としての使用期間が窺えるものであったが，掘り方と同様に中世土器を除けば所属時期を示す遺物はほぼ皆無に等しい。出土遺物については1～8層中のものでほぼ全量で，上～下層の出土品には明確な時期差は認められず，また多数の接合関係が認められることから最下層の堆積後は短期間で埋没・廃絶したものと考えられる。

所属時期：検出面から17世紀前葉以降の所産となる。遺構の掘り方・底面の出土遺物により，構築・機能した時期は明確にはならないが，生駒家紋とみられる刻印を記す石積や，出土瓦が17世紀前半期を示すことから，先行する遺構面の廃絶後，間もなく構築されたと考えられる。廃絶時期は，出土した陶磁器類から17世紀後半で，木簡等の内容から1660年代を中心に考えられる。なお，基本層序（第7・8図）に示すように本遺構上面を覆う整地が存在し，同整地を埋土とするSX101から本遺構の石積に用いられていたとみられる石材が確認されていることから，最終的に本遺構が姿を消すのは19世紀後半頃と考えられる。この現象については，『東讃高松絵図』（弘化年間1844～48年）に記された「井戸址」の表現と相応するものとなっている。

SX103出土遺物（第22～32図参照）

出土遺物はコンテナ約50箱分で図化したような陶磁器類，土師質土器，瓦，木，金属製品等の他，貝殻や骨片がある。

84～100は，磁器の碗類。84は，景徳鎮窯系白磁碗。大振りで，高台内に放射状のカンナ痕がみられる。85は白磁で，体部が直線的に開く。貫入が著しい。86は，漳州窯系青花碗。87は肥前系磁器で，体部に段をもつ筒形碗。88・89・92は，肥前系白磁碗。90・91は肥前系磁器で，色絵を描く。93～100は，肥前系染付碗。94は，一重網目文に魚を描く。98は，区画内に変形文字の連続文を描く。99は薄手で，大きく開く体部に竹を描く。100は，高台内に「誉」の銘款をもつ。

101～117は，磁器の皿類。101は，白磁底部。礫敷きの基底より出土した。102は，肥前系青磁小皿。端反口縁で，見込みに蛇ノ目釉剥ぎを行う。103は肥前系白磁皿で，口縁は小さな鍔状の折縁である。104は肥前系磁器皿で，鉄釉を施す。105は肥前系青磁皿で，内面に片切り彫りによる施文を行う。106～113は，肥前系磁器の染付皿。106の縁文様は，釉下の線彫りによる。107の高台内に，ハリ支え痕と二重方形枠に「福」の銘款が認められる。108は，型打成形による輪花の小皿。114～116は肥前系磁器で，型打の変形皿。

117～124は，肥前系磁器小坏。119は，高台内に一重枠に変形字銘を施す。123は高台無釉で，ヘラ彫りの鎬文と「寿」の染付をもつ。129は肥前系磁器で，角形の鉢類とみられる。130は，獅子形の肥前系白磁水滴で，前頭部は切り落されている。型合わせによる成形で，底部は無釉である。

131～148は，陶器の碗類。131は高い高台部と外反する体部をもつ呉器手で，見込みに胎土目が4箇所認められる。132は瀬戸・美濃系陶器で，鉄釉を施す天目茶碗。133～140は，肥前系陶器。134は，丸碗。鉄釉に白色の釉を流すもので，見込みに重ね焼きによる粒状の無釉部分が見られる。底部は橙色を呈する露胎で，高台内は兎巾。135は呉器手状の高台で，外反する体部に端反気味の口縁をもつ。胎土は赤色を呈し，全面に銅緑釉を施す。137～140は丸碗。淡黄色を呈する精良な胎土で，全面に透明釉を施す。直立する口縁で，高台は饅頭心，もしくは撥状に開く。141は，沓形の茶碗。底部露胎で，漆黒色に施釉し，高台内も釉を施す。142は，外傾する体部をもつ刷毛目碗。灰釉を掛け，白土を刷毛塗りする。143～146は，肥前系陶器碗の底部。144は，鮫肌状の白色釉を施す。148は，京焼系と推定される底部。無釉の底部で，高台内の中心から外れた位置に，方形に丸の二重枠をもつ「靖」の刻印が認められる。

149～158は，陶器の皿類。149・150は肥前系陶器で，胎土目の皿。151・152・155は，砂目の皿。156も肥前系陶器皿で，簡略な鉄絵を描く。見込みに同心円状のカキ目を施し，蛇ノ目釉剥ぎと釉剥ぎ部に砂粒を塗布する。153は薄手で，平碗状の器形をもつ。胎土は灰白色で精良なもので透明釉を施す。器面の貫入は著しい。154は灰釉の皿で，端反の口縁と小径の高台をもつ。高台内は施釉され，砂粒の付着が認められる。157・158は肥前系の大皿・鉢で，二彩手のもの。157は淡黄色の胎土で，透明色の釉を施す。内面は，茶褐色・緑色の釉で松を描く。158は灰釉に白土を掛け，波状に白土を掻き落し刷毛目模様とし，緑釉の絵付けを行う。

159～162は，肥前系陶器の火入れ類。159は，柿色の釉を施す。底部露胎で橙色を呈し，畳付は砂粒が付着する。口縁部には，敲打痕が認められる。160は外面に白土を施し，底部は露胎で蛇ノ目高台となっている。162は，高台に3方に抉りをもつ。底部露胎で，外面に鉄釉が流される。見込みの中央部には，円形を呈する重ね焼きの痕跡が残る。163は二彩手の瓶体部で，白土に緑釉を流し透明色の釉を掛ける。164は底部露胎で，灰色を呈する。165は，鉢類の底部。外面は茶褐色の釉を施し，底部無釉。内面は白土に鉄釉を流し掛け，器面の凹凸により斑状の文様を呈している。166は籠形鉢の把手部とみられ，白土に透明色の釉を施す。

167・168は，軟質施釉陶器。167は蓋で，上面に灰釉を施す。底部無釉で，回転糸切り痕を残す。168は型合わせの人形で，全面に透明釉を施すもの。前頭部を欠いている。

169は，壺体部。灰赤・灰色土を縞状に練り込む胎土で，器面は須恵質に焼き締まる。肩部から鉄釉あるいは自然釉が掛かり，内面に格子目状の叩き痕を留める。170は，備前系陶器の急須。171・172は，備前系陶器鉢。172は，口縁部に敲打痕が認められる。173は備前系陶器瓶で，外面に塗土を行っている。174・175は備前系陶器甕。177は，備前系陶器擂鉢。178は，丹波系陶器擂鉢である。

179～220は，土師質土器皿。このうち179～215は法量が異なるが灰白を呈する精良な胎土を用い，見込みにみられる不定方向のナデ，底部は回転糸切り・見込みの調整に対応した板目状圧痕が見られ，高松城編年（佐藤2003）での皿ＡＶ・皿ＡＸ形式に相当する。法量では，大（179～185），中（186～206），小（207～215）に大別され，同タイプで規格が存在したものと考えられる。中型のものに煤が付着したものが多く認められ，灯明にも用いられたと考えられる。

217～220は底部回転糸切りのもので，胎土及び器形から高松城編年（佐藤2003）の皿ＡⅢ形式に相当する。法量では，やや大振りの219・220と，小振りの217・218が認められる。

221～241は，焼塩壷・同蓋。何れも胎土は，橙色を呈した精良なものが用いられる。身は輪積成形で，蓋の形態もこれに対応するものとなっている。身の器形は細身で，口縁部が僅かに外反するほぼ直立した体部をもち，やや大振りな241には刻印が認められる。刻印は一部判読不可の箇所があるものの，二重枠に「天下一堺ミなと／藤左衛門」（1654～1679年）と記したものとみられる。242は精良な胎土を用いた土師質の蓋で，側面部に貫通穴をもつ。

243は土師質土器で，大釜あるいは甕。口縁部に鍔部を有し，体部外面は縦方向の粗いハケ調整，内面には横方向の粗いハケ調整と交差する紐状の押圧痕が認められる，胎土は鈍い橙色を呈し，長石・赤色粒を含む。244～247は，土師質土器焙烙。深手で，大・小2通りの法量が認められる。内耳の穿孔は2箇所で貫通し，外面に指頭圧痕と底部付近に粗いハケ調整，内面に横方向のハケ調整が認められる。248は，瓦質焼成の竈。円筒状の体部をもち，方形の窓とこの下端より突出する引出部が設けられている。

249～280は，瓦類。多量に出土したが，取り上げは特徴的なものに限りコンテナ5箱程度となった。所属時期は，軒文様から高松城編年（佐藤2003）の第6面・新相（1620～1650年代）を中心とし，陶磁器類より古段階に位置付けられる。

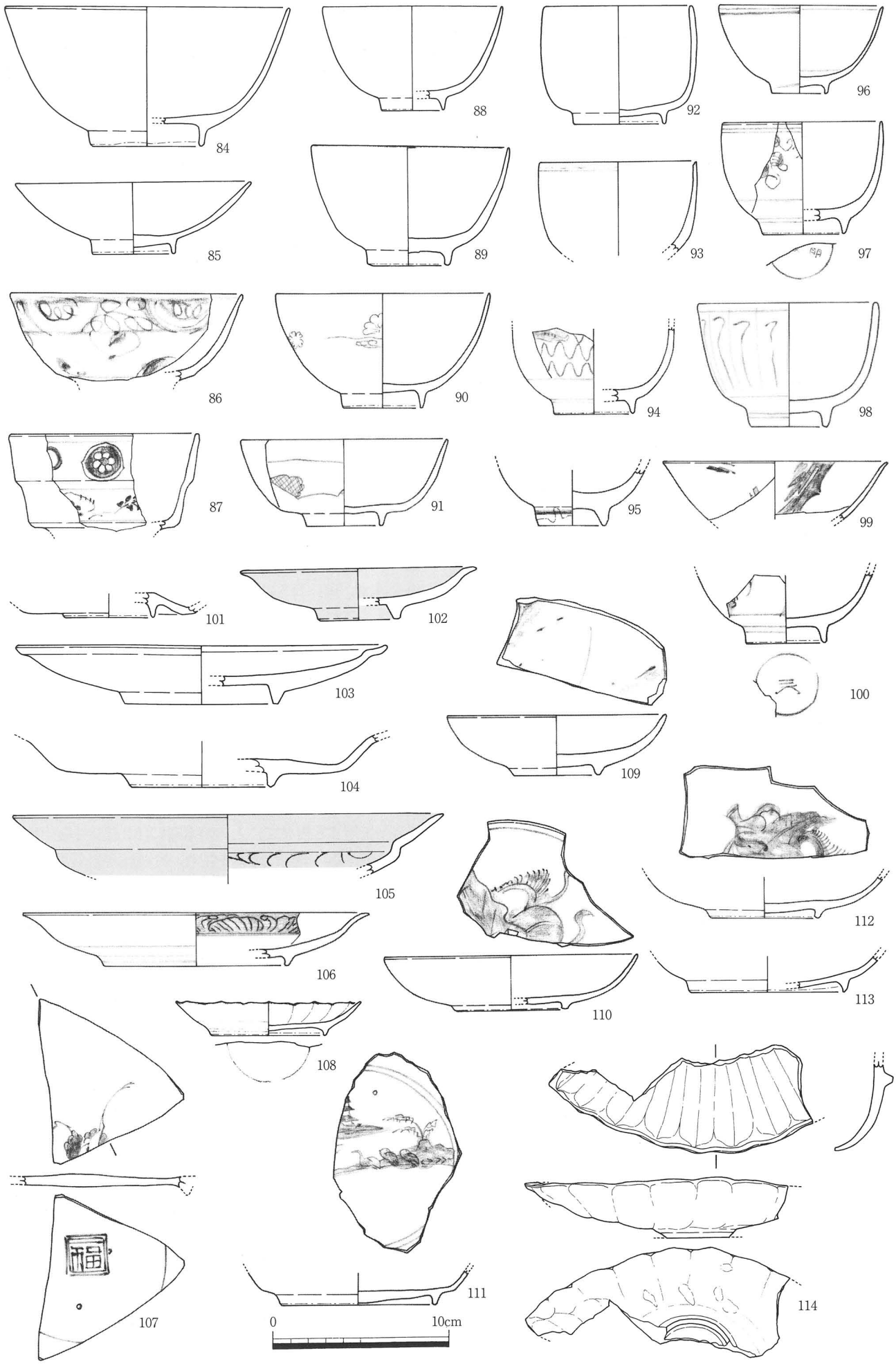
249～255は，軒丸瓦。249～252は三巴文で，珠文数は12～14個と推定される。253～255は，杵を違いに組んだ十字文を中心に配し，20個と推定される珠文を廻らす。256～274は，軒平瓦。256～266は下向きの三葉文を中心飾りとし，三葉の葉脈を陽刻線で表現する。両側に延びた唐草は，1転する。同笵とみられるものに，高松城跡東ノ丸地区歴博地点SD103の出土瓦がある。267・268も下向きの三葉文で，三葉は剣先形の陽刻である。269は中心飾りの三葉を陽刻の輪郭線で表現し，外方向に長く延びた唐草と蕾をもつ子葉を伴う。同笵とみられるものに，高松城跡西の丸地区Ⅱ地点の軒平瓦11等がある。270は中心飾りの四葉を陽刻輪郭線で表現し，蕾状の珠文を伴う。また2転目の唐草はＣ字形に短い。同笵とみられるものに，高松城跡東ノ丸地区歴博地点SD103の出土瓦がある。273・274は折り枝状になる，逆Ｙ字形の陽刻線と斑状珠文を中心飾りにもち，唐草は2転する。同笵とみられるものに，高松城跡西の丸地区Ⅱ地点の軒平瓦56がある。276～278は，道具瓦。276は鬼瓦の鰭部で，羽根を表わすような陽刻が認められる。278も鬼瓦。無紋であるが，中央部に釘穴の穿孔が認められる。内側には，吊り手と考えられる接着の痕跡が認められる。279・280は，塼。各側面に，合釘等による連結が想定できる穿孔をもつ。

W1～W22は，木製品。最下層を中心に多量の木質遺物が認められたが，取り上げたものはコンテナ10箱程度で，その大半は折損した板材で占められる。W1～W5は，漆器碗。W1は，内面が黒地に赤塗りで，外面は黒塗りに赤色の丸文を加飾する。W2は，内面黒地に赤塗り，外面黒塗りの碗。W3は内外黒塗りの碗で，外面に金・赤色の加飾を施す。W4・W5は内面赤塗り，外面黒塗りの碗。W6・W7は，白木箸。W8～W13は，針。W14は，櫛である。

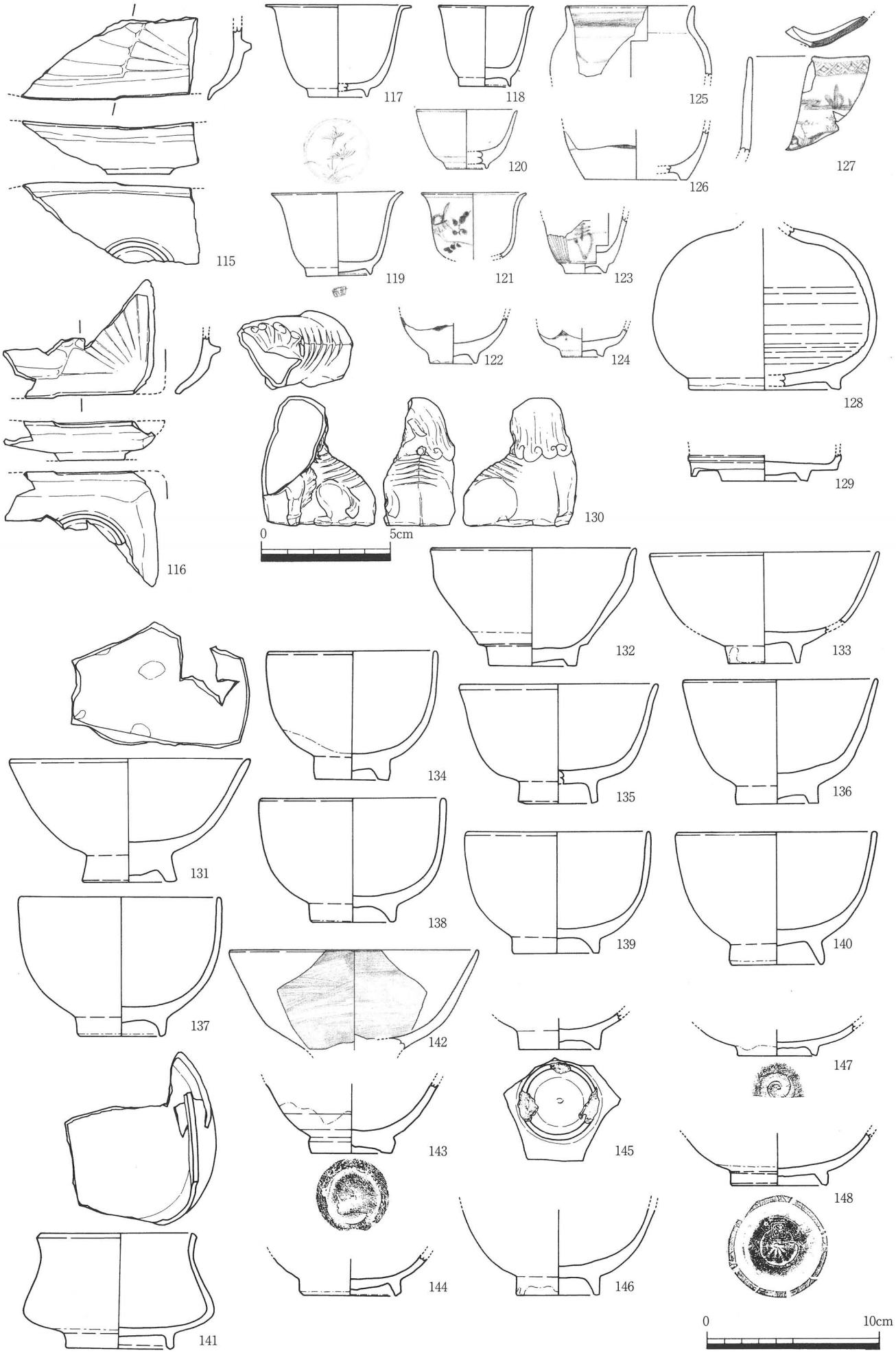
W15～W19は木簡で，何れも荷札と推定される。W15は半切されているが，側縁上端には切り込みが認められる。両面には墨書がみられるものの判読は容易ではなく，片面は「遠藤［　］」，他面は上端の墨書が，「寺」あるいはこれにより構成される字の可能性が推定されるのみである。W16は長方形を呈する板材で，両面に墨書が認められる。片面が「すへノ」，他面は「紅右／左衛門」と判読できる。W17は長方形を呈する板材で，上方の両端に抉り部をもち，下端を尖らせている。両面に墨書を認め，片面は「富松四郎」，他面が「近／遠江原左衛門」と判読できる。W18は短冊形を呈する板材で，上方の両端に抉り部をもつ。両面に墨書を認め，片面は「百瀬□衛門」，他面が「［　］一郎」と判読できる。W19は長方形を呈する板材で，下端を尖らせる。上方部の左右，中央の3箇所に紐あるいは釘穴とみられる穿孔をもつ。墨書は片面にのみ認め，一部欠損箇所があるが「松田庄九郎様　江戸ヤ　新左衛門」の宛名・送り主とみられる文字が明瞭に残る。宛名にある松田庄九郎という人物は，「高松藩士由緒録」の中に見え，これによれば調査地周辺に屋敷地が推定される松田庄左衛門の弟で，寛文4年に庄左衛門三百五十石の所領のうち，百石を相続していたことが分かる。

W20・W21は，露卯下駄。W22は曲物で，内部は石灰質の土壌で固まり，ウリ科の種や魚類の小骨，昆虫の羽根が認められ，便槽に用いられたと考えられる。

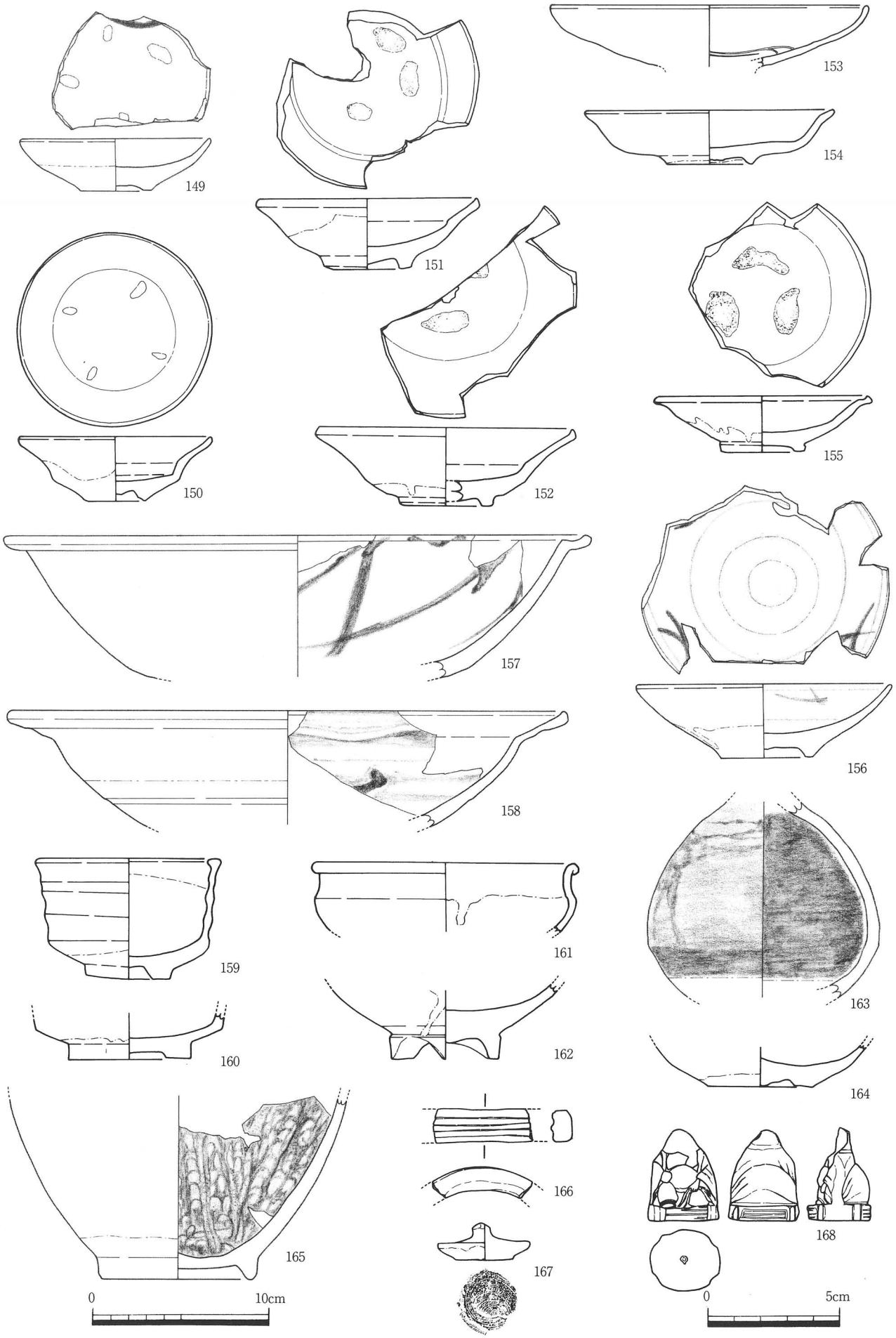
S3～S5は，砥石。S6は，那智黒の碁石。S7の硯は，最下層より出土した。B1は骨角製品で，櫛払い。M6～M16は，鉄釘の類。M17は煙管の吸口部。M18は，錆のため詳細不明の金具類。M19も用途不明。銅あるいは真鍮製のもので，浅いボール状を呈し穿孔が4箇所認められる。



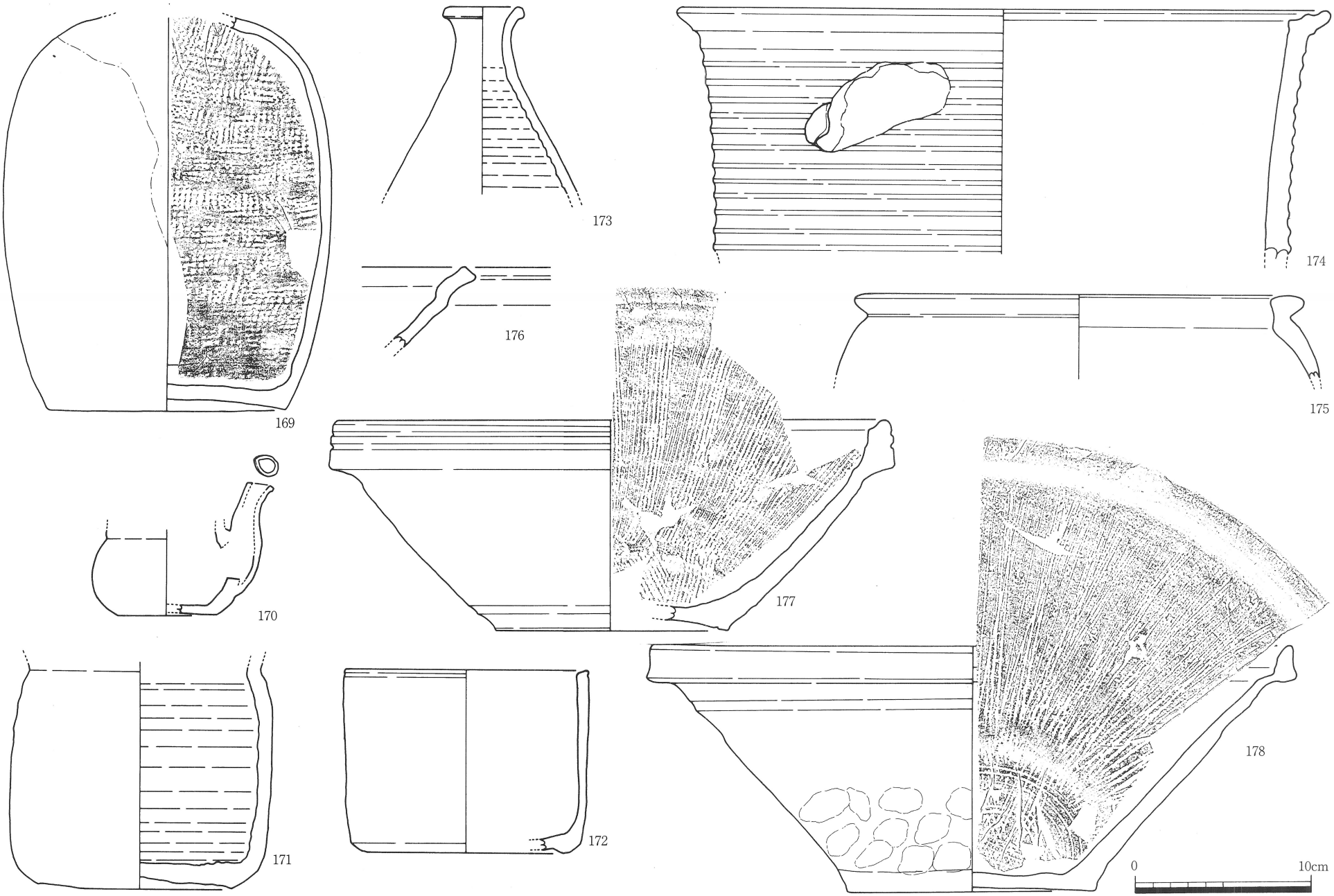
第22図　SX103出土遺物実測図①（1/3）



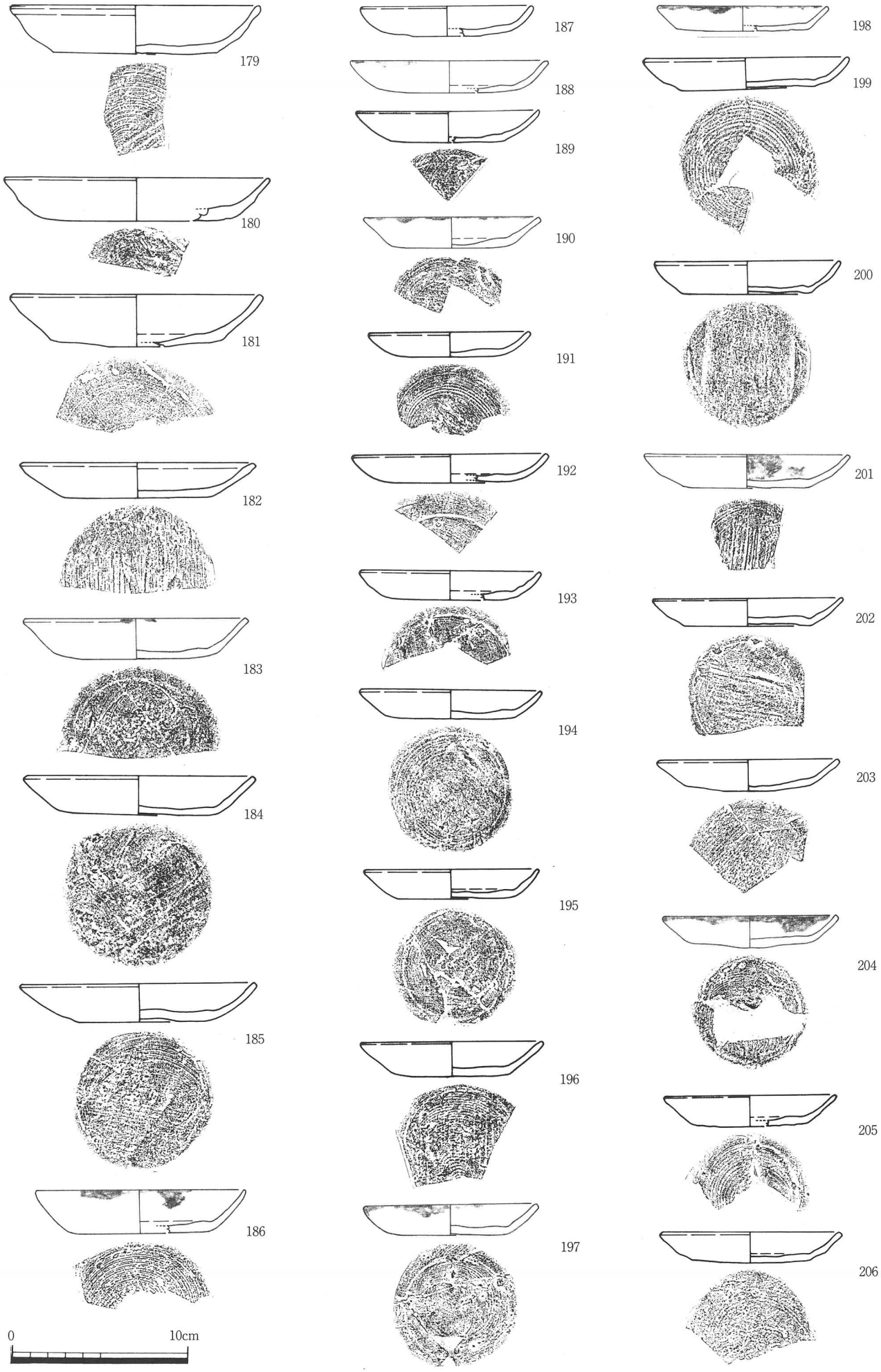
第23図　SX103出土遺物実測図②（1/3・1/2）



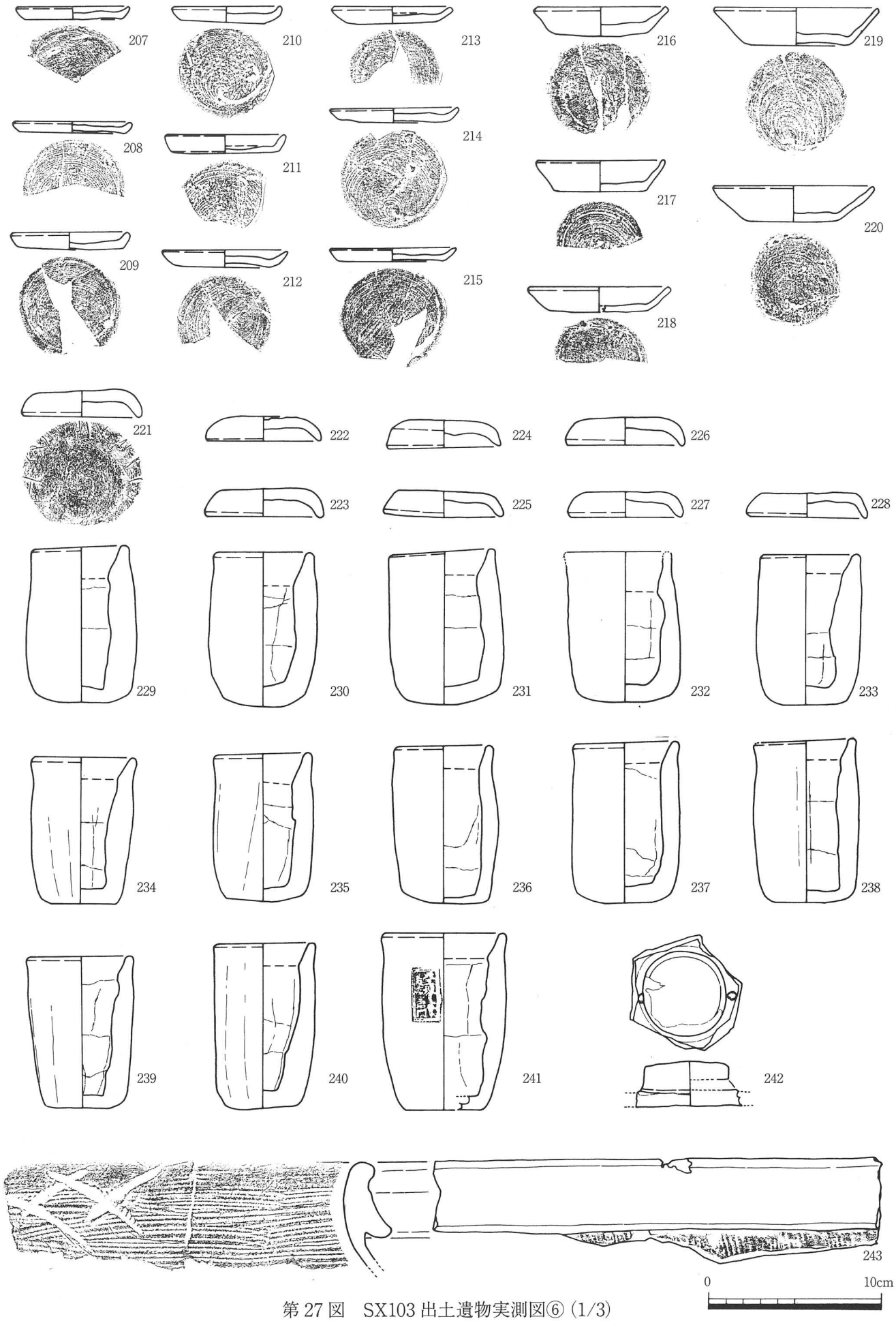
第 24 図　SX103 出土遺物実測図③ (1/3・1/2)



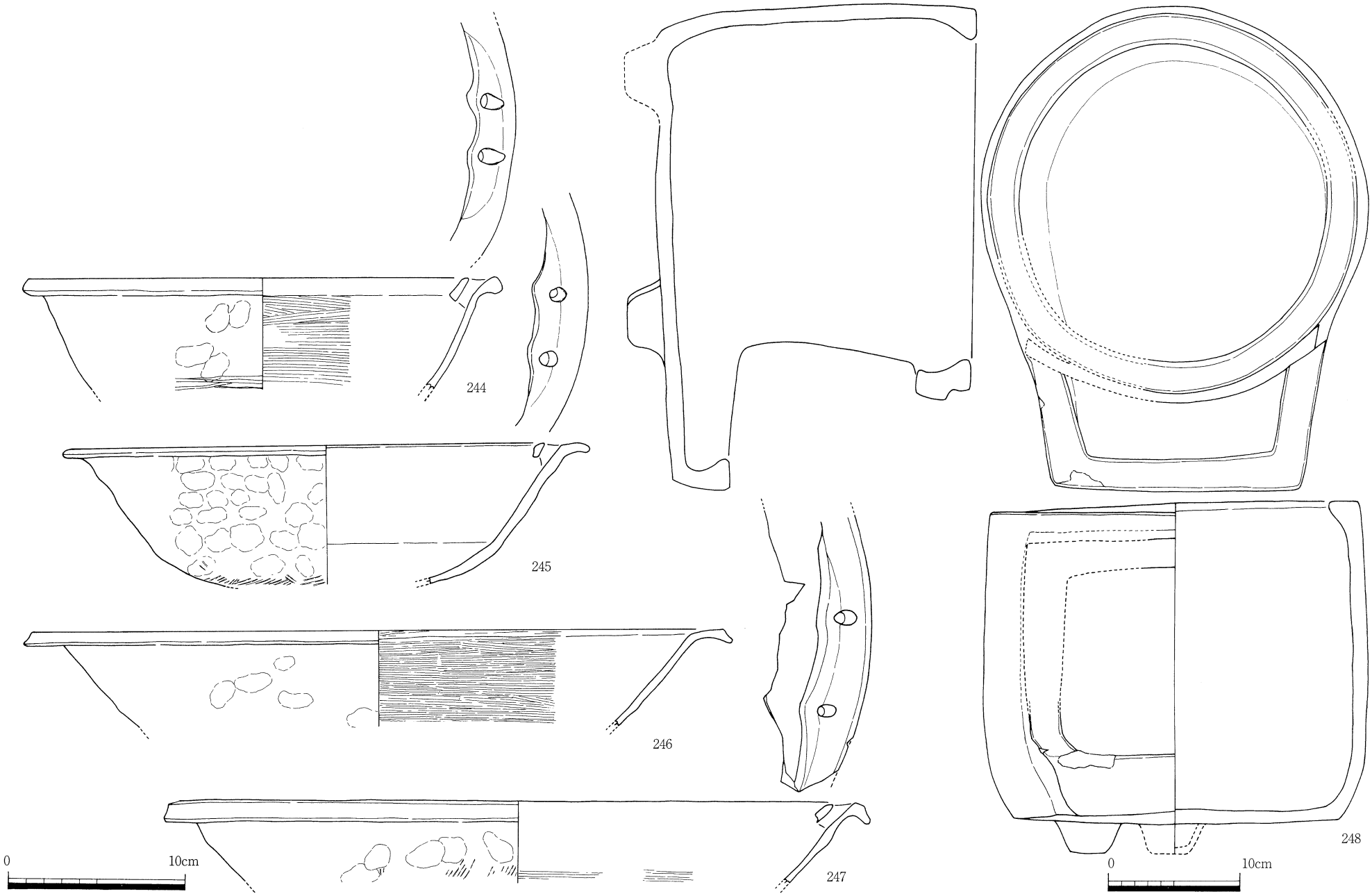
第 25 図　SX103 出土遺物実測図④ (1/3)



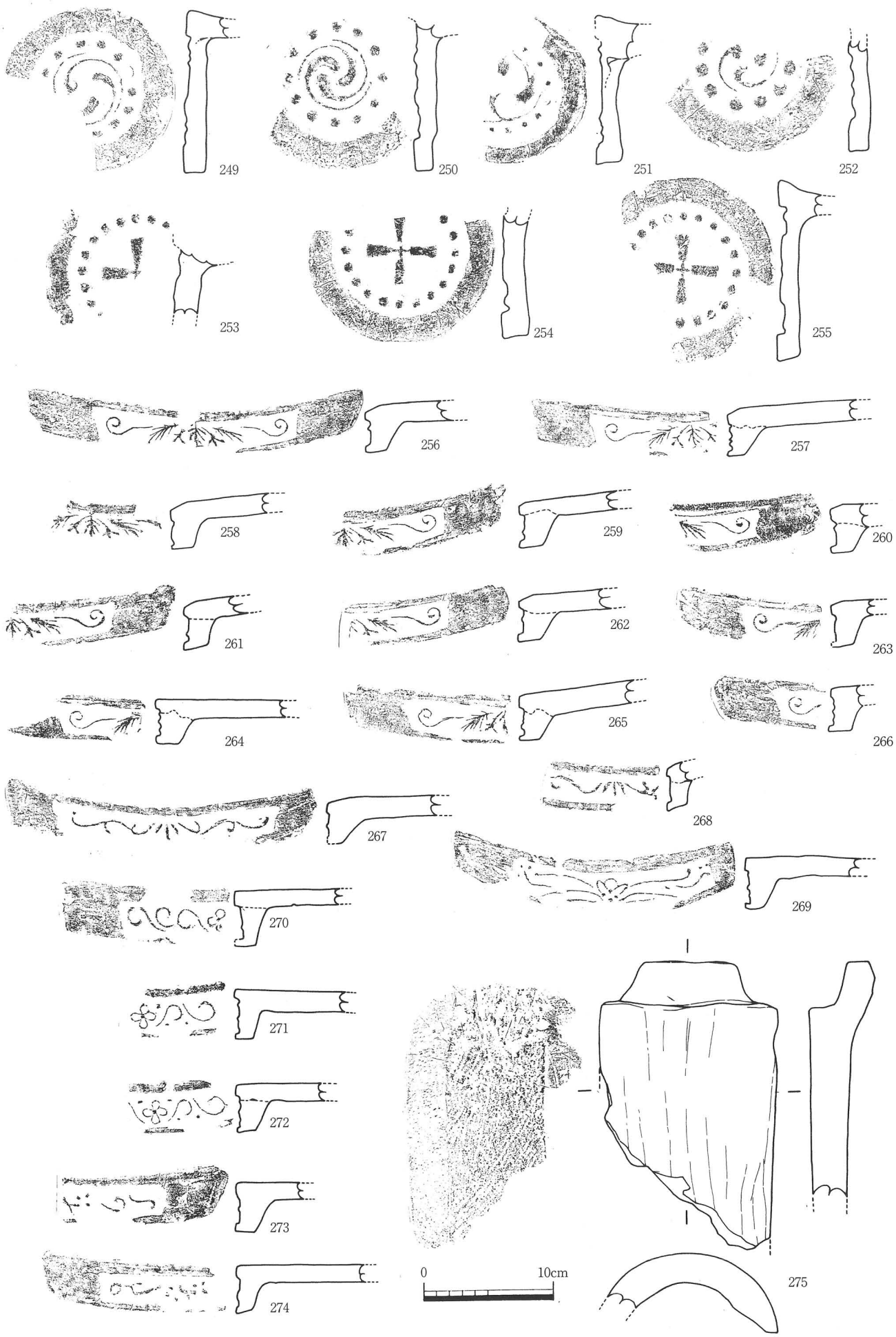
第 26 図　SX103 出土遺物実測図⑤ (1/3)



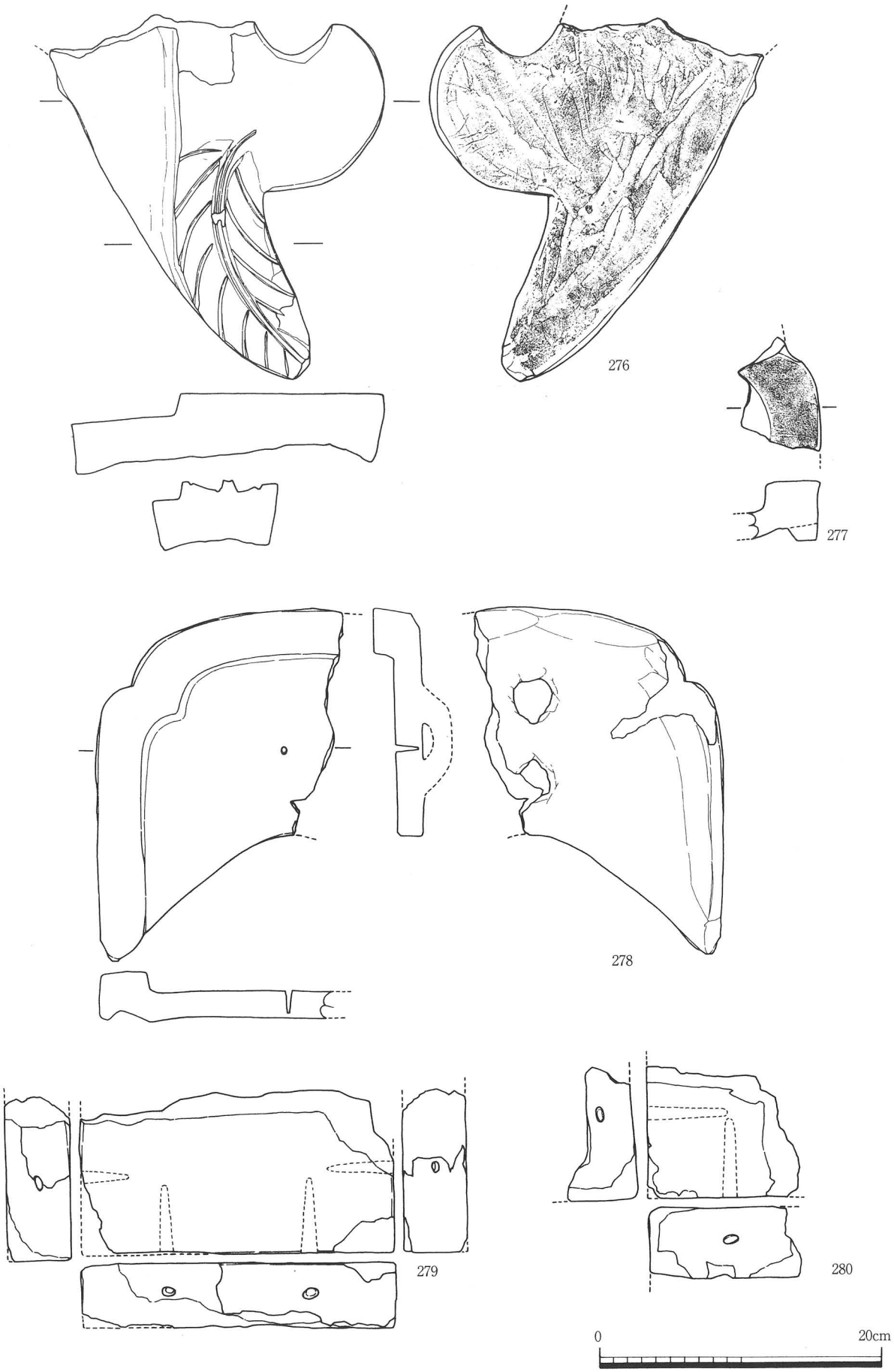
第 27 図　SX103 出土遺物実測図⑥ (1/3)



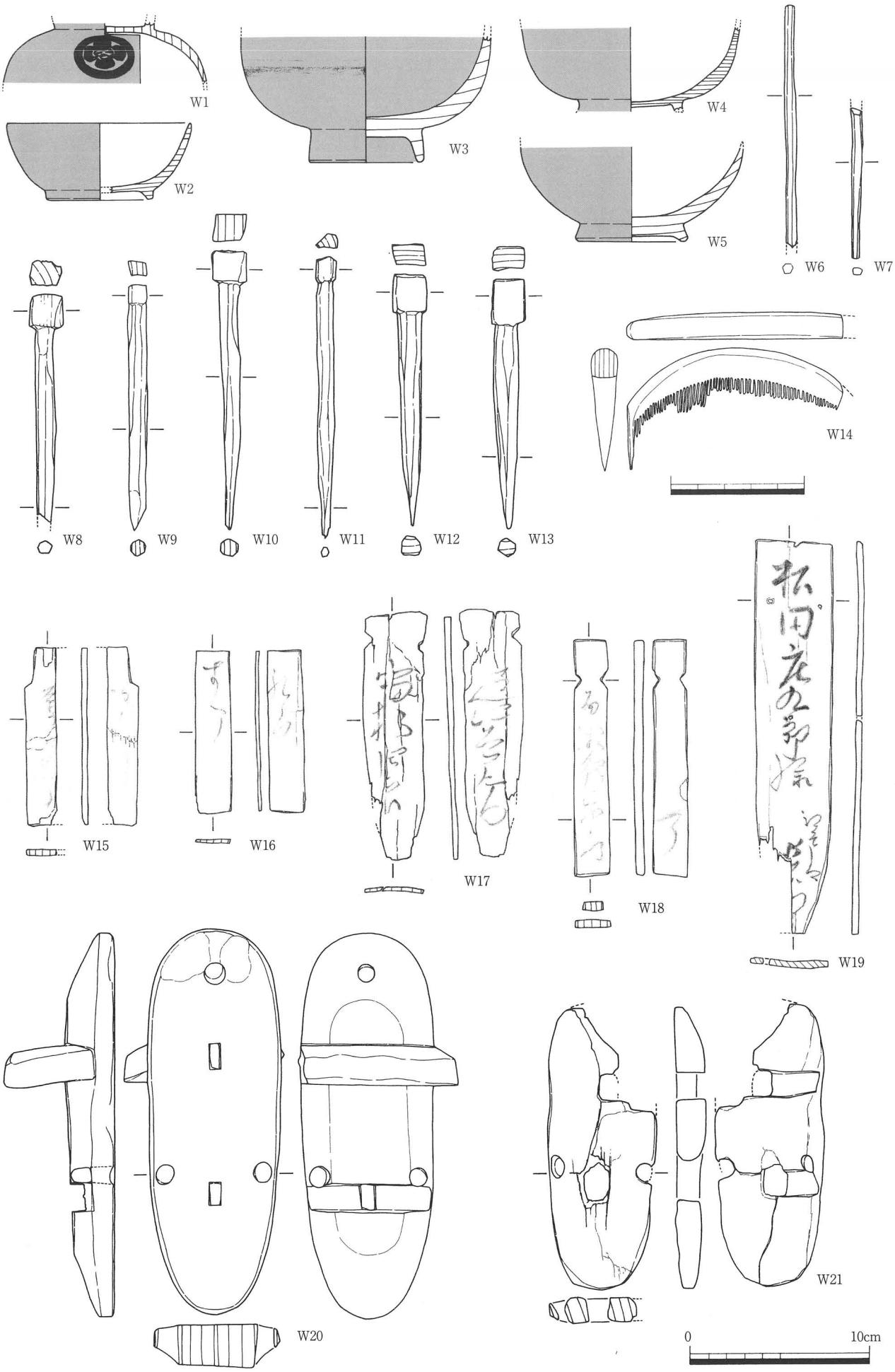
第28図　SX103出土遺物実測図⑦（1/3・1/4）



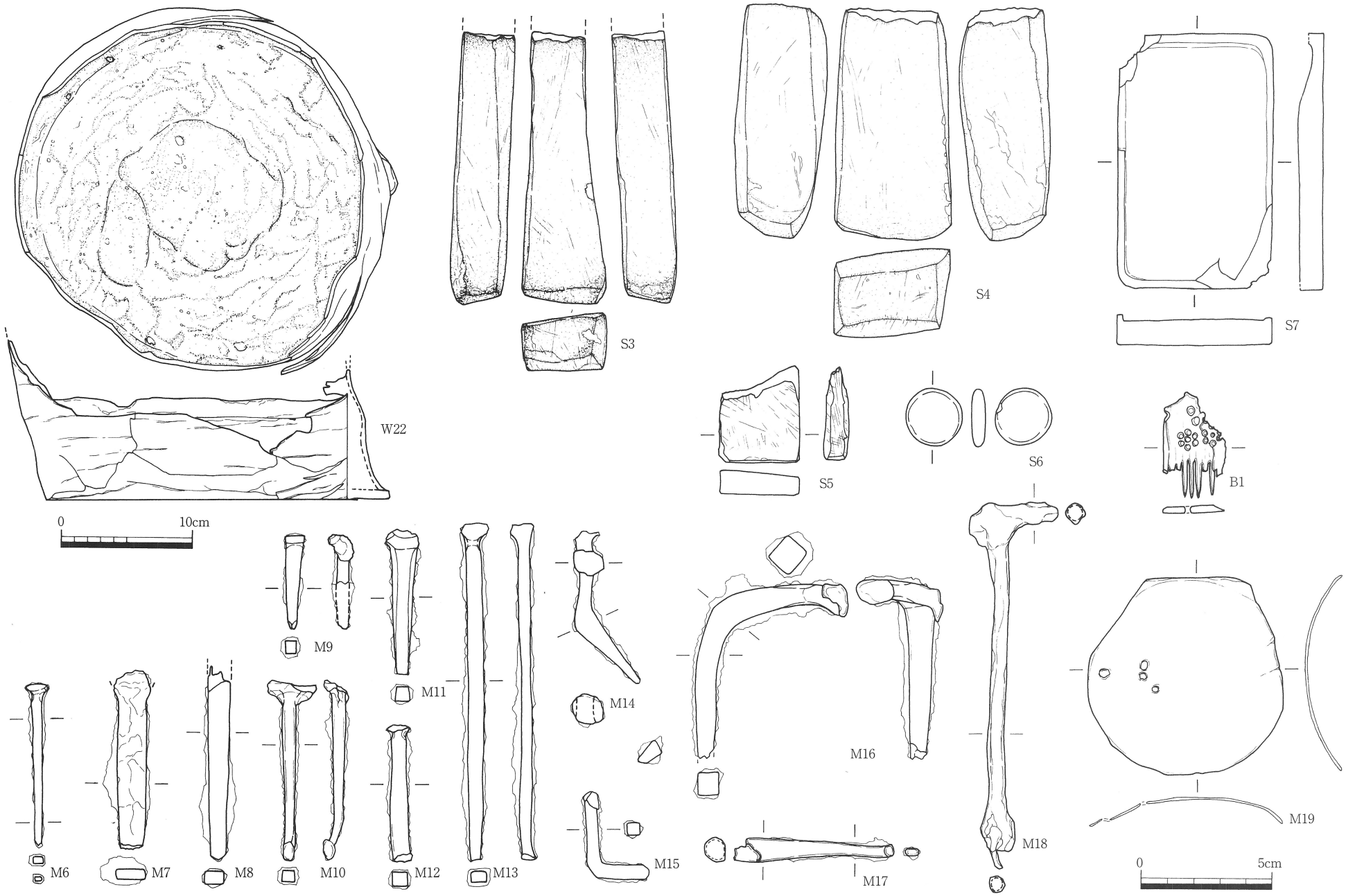
第 29 図　SX103 出土瓦実測図①（1/4）



第 30 図　SX103 出土瓦実測図②（1/4）



第 31 図　SX103 出土木製品実測図 (1/3)



第 32 図　SX103 出土木製品・金属製品実測図 (1/3・1/2)

A8・9地点E層上面検出遺構（第33～36図参照）

E層が大きく窪むA8・9地点ではSK106・108等I層に被覆された遺構が密に見られる。この東側でも，SK119，SX107が認められる他，Aライン上で柵列状遺構SA102を考えることができる。何れも出土遺物は少ないが，確認状況から17世紀前葉以降で，17世紀後半までの所産と推定される。

SK106（第34図参照）

調査地北端部A9，標高0.94 mで確認した土坑である。南部を欠くが，平面は1.5 m程の方形と推定される。深度は0.13 m，断面は船底形で，埋土はオリーブ黄色土を塊状に含む灰色シルト層である。出土遺物は少量で，図化したものの他，土師器椀，須恵器の細片がある。

SK106出土遺物（第34図参照）

281は，手捏ねの土製人形である。

SK108（第34図参照）

調査地北端部A8，標高1.04 mで確認した土坑である。E層の落ち込み東端に存在するもので，平面は1.4 m程のやや不整形な方形を呈する。深度は0.34 m，断面は台形であるが，底面は凹凸をもつ。埋土はオリーブ黄色土を塊状に含む黄灰色砂質シルト層である。出土遺物は少量で，図化したものの他，土師質土器の細片がある。

SK108出土遺物（第34図参照）

282は肥前系陶器で，灰釉の碗である。

SK110（第34図参照）

調査地北端部A7，標高1.04 mで確認した土坑である。北・南端部を欠くが，平面は0.8 m程の方形と推定される。深度は0.21 m，断面はU字形で，埋土は円礫を含む黄灰色シルト層である。出土遺物は無い。

SK119（第34図参照）

調査地北端部A11，標高1.10 mで確認した土坑である。南部を欠くが，平面は0.9 m程の円形と推定される。深度は0.35 m，断面は台形で中位に段が付く。埋土は明黄褐色土を塊状に含む灰黄色シルト質極細砂層である。出土遺物は少量で，図化したものの他，土師器，須恵器細片等がある。

SK119出土遺物（第34図参照）

283は備前系陶器擂鉢で，口縁の形態・斜め方向の擂目から，乗岡編年の近世Ⅰb期に相当する。

SK132（第34図参照）

調査地東部C9，標高0.95 mで確認した土坑である。平面は0.7 m程の円形を呈する。深度は0.32 m，断面は台形で，埋土は灰黄色砂混じりシルト層である。出土遺物は少量で，肥前系の陶磁器，備前系陶器擂鉢等の他，鉄釘がある。

SE105（第34図参照）

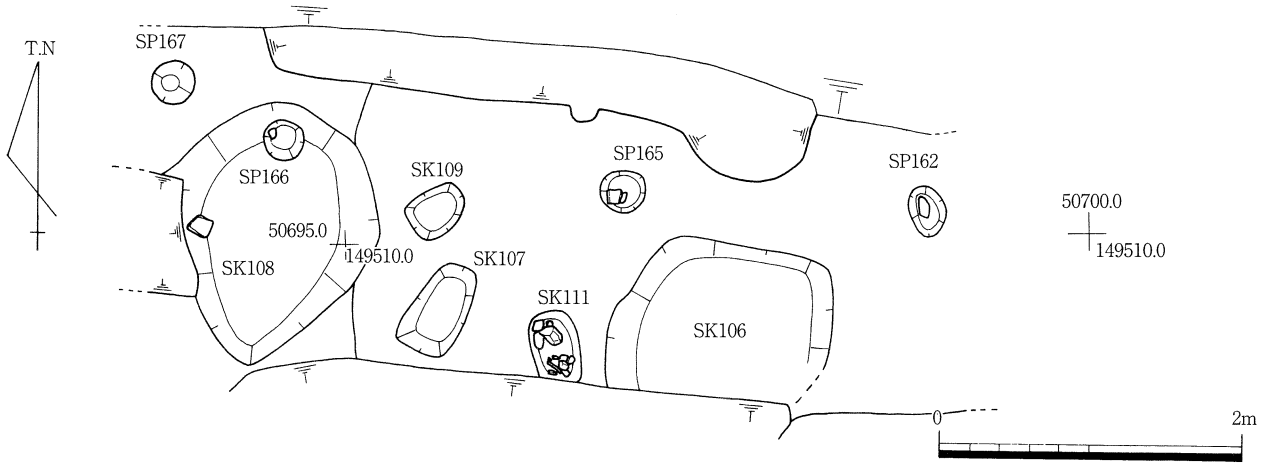
調査地南東部D10，標高0.98 mで確認した二重の円坑で，平面形態より井戸跡として調査したが，開削された深度は湧水層に及ばない。平面は内側が径0.95 m，外縁部は東部を欠くが，径1.9 m程の円形と推定される。深度は0.68mを測るが，断面は外縁部が浅く，中位に段が付く台形を呈する。埋土は外縁部が黄色粘土の混じる褐色粘土で充填されており，内側は上層に黄色粘土を塊状に含む褐色シルト質粘土，中層に砂礫の混じる黄灰色シルト，下層はシルト・砂層の互層となっている。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系陶器，土師質土器の細片がある。

SE105出土遺物（第34図参照）

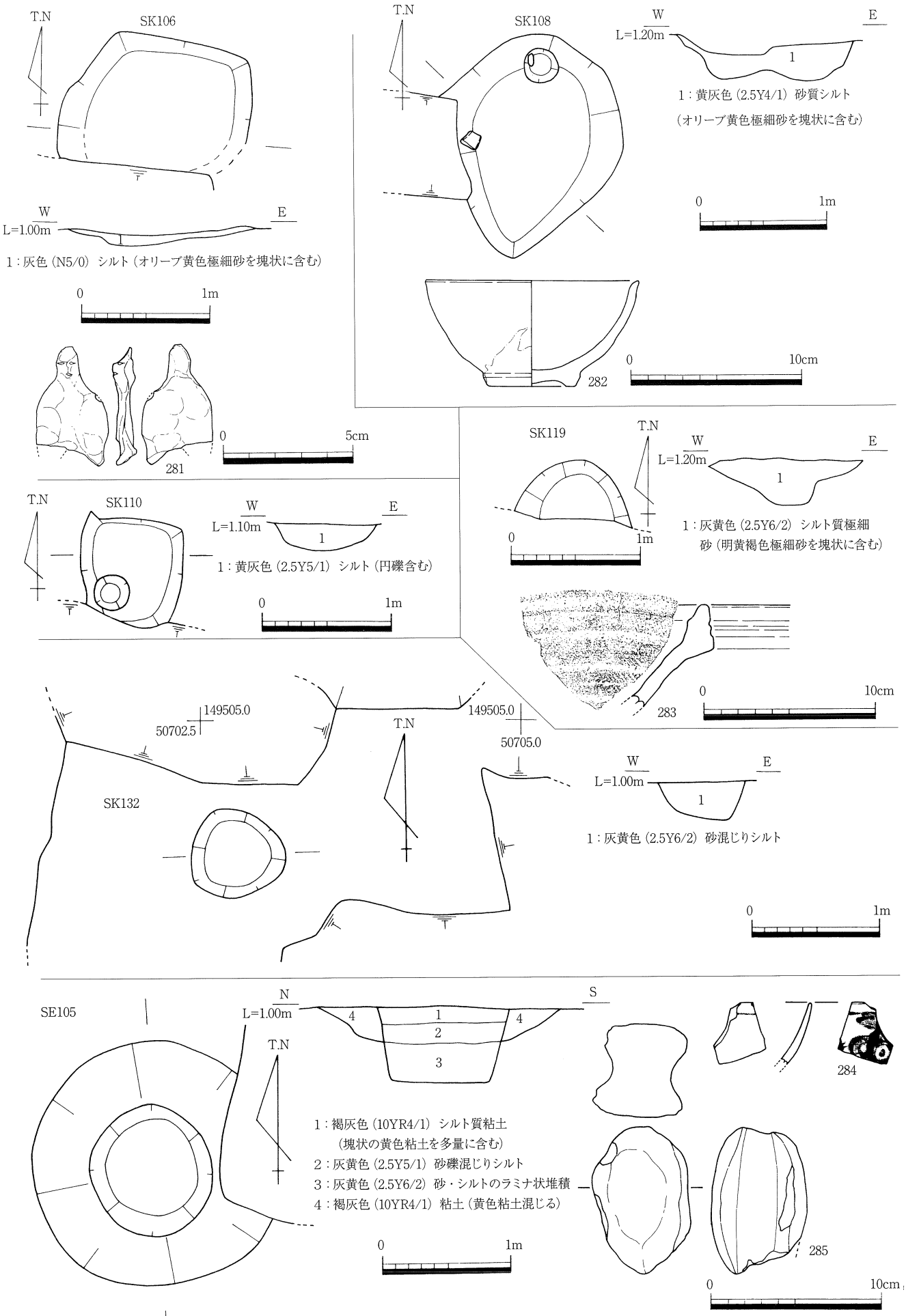
284は，漳州窯系青花碗の口縁部片。外縁部分より出土した。285は，有溝土錘である。

SA102（第35図参照）

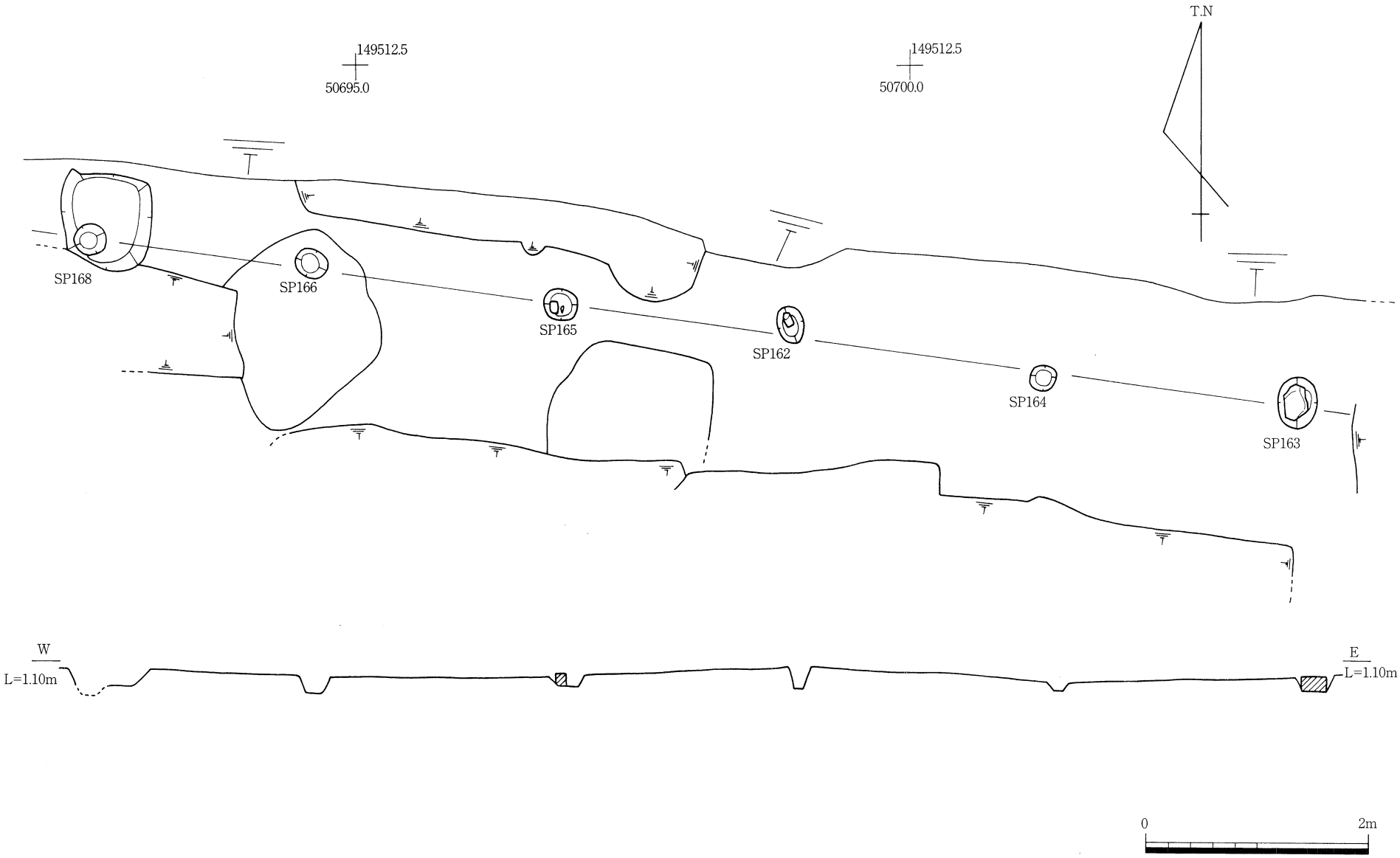
調査地北端部A7～11，標高0.91～1.08 mで確認した柱穴（SP162～166・168）で柵列状に復元できるものである。周囲が撹乱・削平面，調査範囲外に接しており，全容・詳細は不明だが，5間相当，11.27mの規模で認められる。柱穴の深度は0.07～0.21mで，SP162・163・165に根石が確認されている。柱間距離は2m及び2.3m前後となっており，主軸方位はN-82°-Wを測る。出土遺物は，SP162・165・166で少量あり，肥前系陶器，備前系陶器擂鉢，須恵器，土師器椀・鍋，鉄製品の細片が見られる。



第33図　A8・9地点E層上面検出遺構（1/50）



第34図　SK106・108・110・119・132・SE105 平・断面図（1/40），SK106・108・119・SE105 出土遺物実測図（1/3）



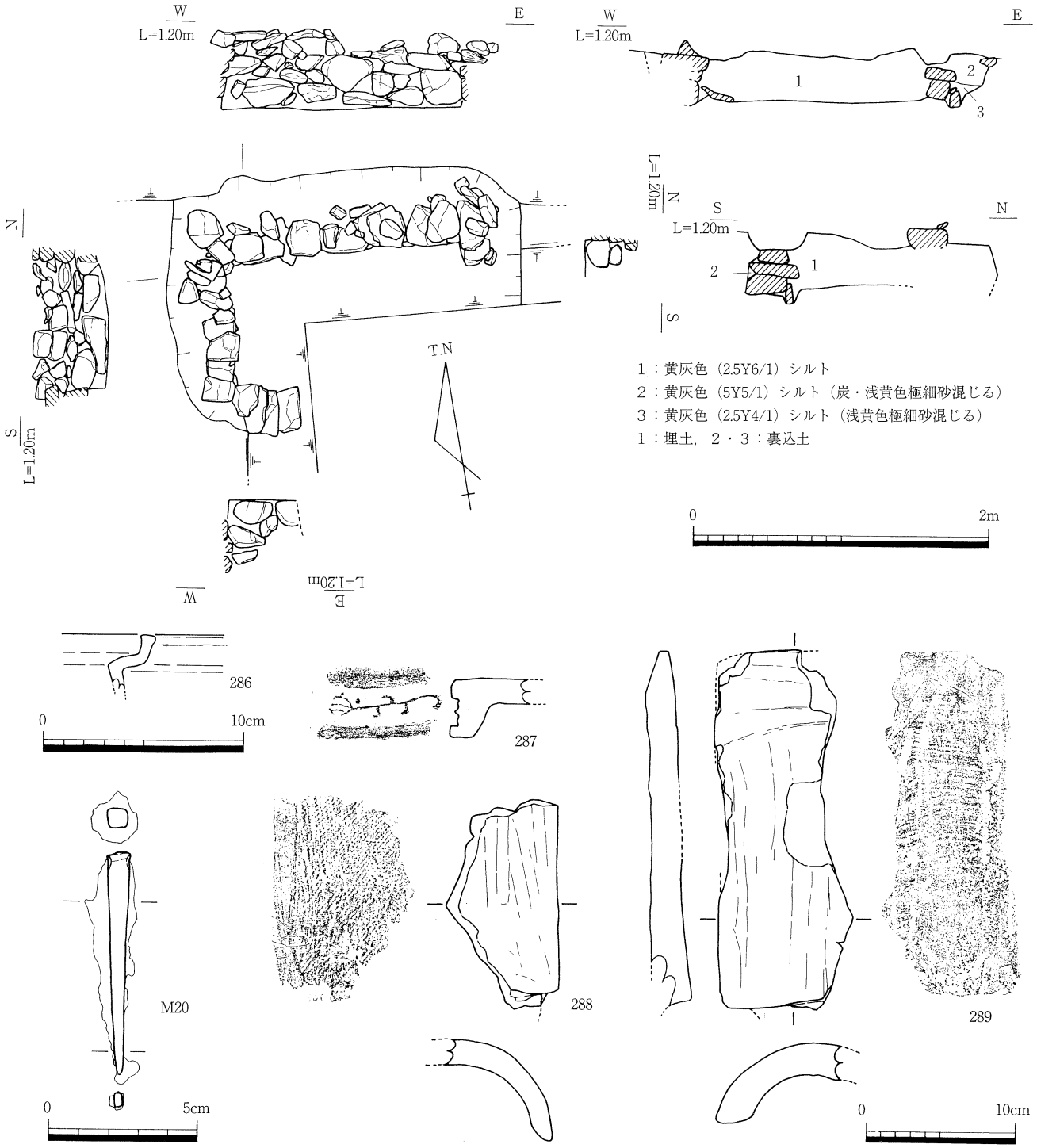
第 35 図　SA102 平・断面図 (1/50)

SX107（第36図参照）

調査地北東端部A12・13，標高1.13mで確認した石積をもつ土坑である。南東部を欠くが，平面は掘り方が東西方向に2.4m，南北方向に1.6m程，石積の内法は東西方向に1.6m，南北方向に0.8m程を各々測る長方形と推定されるもので，主軸方位はN-82°-Wを測る。石積は0.5m程の高さまで見られ，安山岩系を主体とした自然石を用いて，乱積を行っている。裏込め部分には小角礫の他に，瓦片の使用が認められる。石積内の埋土は黄灰色シルト層の単層で，暫時骨片が混じる状態で出土しており，遺構の形態・規模から墓の可能性も考えられたが，明確にできる出土品はない。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系陶器，土師質土器の細片，骨片がある。

SK107出土遺物（第36図参照）

286・M20は，埋土からの出土遺物である。286は，器種不明の瓦質土器細片。M20は，鉄釘である。287～289の瓦は，裏込めに用いられていたものである。287は，軒平瓦。中心飾りに陽刻線で表現した宝珠文を配して，外方向に延びる唐草は釣針状の蔓をもつ。288・289は，丸瓦。凹面にコビキ痕，布目が認められる。



第36図　SX107平・立・断面図（1/40），SX107出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

調査地北端部Ⅰ層上面検出遺構（第37～39図参照）

調査地北端部，A7～9において検出されたⅠ層上面で認められ，且つC層に被覆された遺構である。下位のⅠ層及びSX104等の出土遺物から，17世紀後半以降で18世紀前半頃までの所産と推定される。

A8・9地点Ⅰ層上面検出柱穴群（第37図参照）

調査地北端部A8・9，標高1.17～1.23mで確認した柱穴（SP152～161）である。平面が0.2～0.4mの円あるいは楕円形で，深度は0.09～0.34mを測る。確認範囲が狭く，同地点で先行し確認されたSA102と同様に筋の通るものを想定できないが，調査地内で当時期に該当するものとしては比較的柱穴の密集する地点となっている。

SE104・SX105（第38図参照）

調査地北東部B10，標高1.17mで確認した井戸跡である。調査当初，方形に見られる大型の掘り込みSX105と径1m程の円坑SE104として個別に調査を行っていたが，遺構の半截を行った結果，円坑の底に桶製の井側が確認されたことから，SX105がこの井側設置のために開削された掘り方であると判断した。

遺構断面から2段相当の井側が推定されるが，確認された桶は1段で桶材の腐蝕が著しく上端が欠けていた。湧水は遺存する桶の上端部まで認められたが，南西に近接するSX103の開削後では湧水が涸れる状況であった。井側部となるSE104の断面観察では，径0.8m程の井側を底面から0.2～0.3m程差し込むように設置しており，これより約0.7m上方の両壁面に段が認められることから，この箇所が本来あった1段の上端部に相当するものと推定される。埋土は上層に砂質シルト及び粘土層が堆積し，下層には多量の礫・粘土を含む堆積物が認められ人為的に廃棄されたことが窺われる。

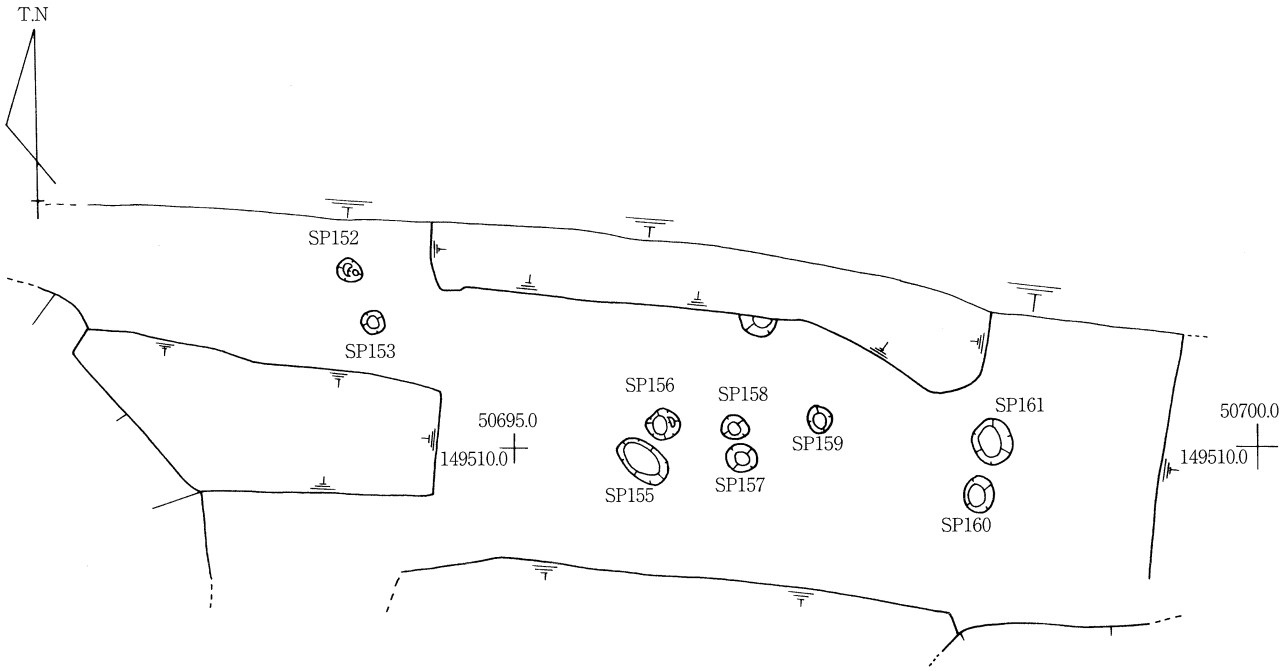
一方の掘り方となるSX105については，東西の肩部分が破壊されているが，平面形態が南北方向に3.7m，東西方向に2.5m程の規模をもつ長方形と推定されるもので，深度は1.13mを測る。断面形態は北壁が直立するのに対して，南壁は上方で直立するが中位で段が付き，底面が井側部分へと下る緩斜面となっている。埋土は下位に軟弱な砂～砂質土，上位に円礫を含んだシルト質土が堆積している。

出土遺物は図化したものの他，SE104についてコンテナ1箱程あり，肥前系陶磁器，土師質土器皿，捏鉢，瓦等が認められる。SX105についてはコンテナ1/2程で，肥前系陶磁器，土師質土器皿，焙烙，瓦等が認められる。

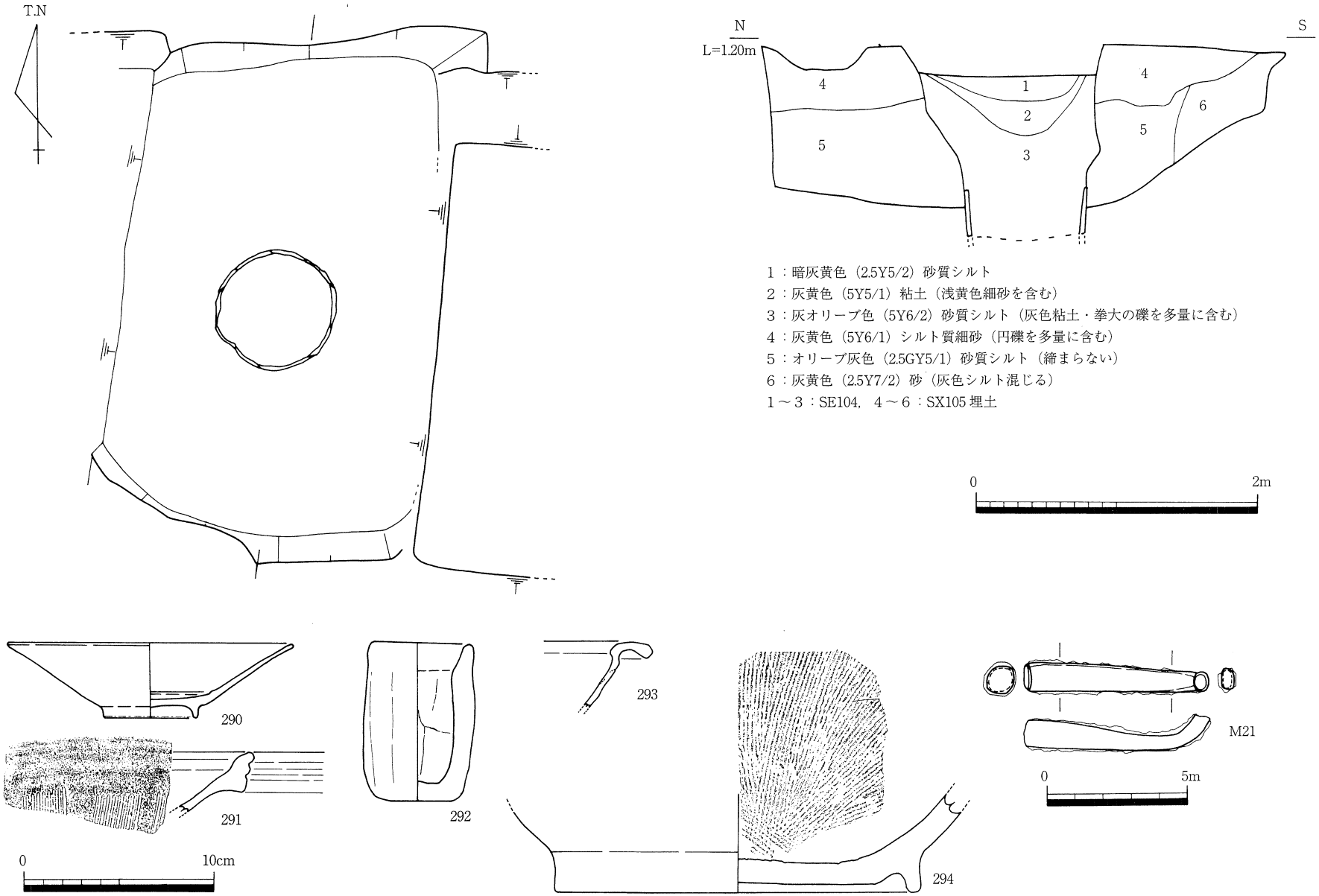
所属時期については，SE104とSX105とで一定の時期差をもつ出土遺物から，17世紀後半に構築され18世紀前半に廃棄されたものと推定される。

SE104・SX105出土遺物（第38図参照）

290～293・M21はSX105，294についてはSE104井側内からの出土遺物である。290は，白磁碗である。体部が大きく外反し，口縁部へとハの字に開く。見込には沈線状の段をもつ。291は，備前系陶器擂鉢の口縁部である。口縁部及び擂目の特徴から，乗岡編年の近世2b期に相当するものとみられる。292は，輪積成形の焼塩壷である。橙色を呈する精良な胎土を用い，細身で直立した体部をもち口縁部は僅かに外反する。293は，土師質土器焙烙の口縁部片である。294は，備前系陶器擂鉢である。高台部及び擂目の特徴から，乗岡編年の近世3期に相当するものとみられる。M21は金属製品で，煙管である。



第37図　A8・9地点Ⅰ層上面検出柱穴群（1/50）



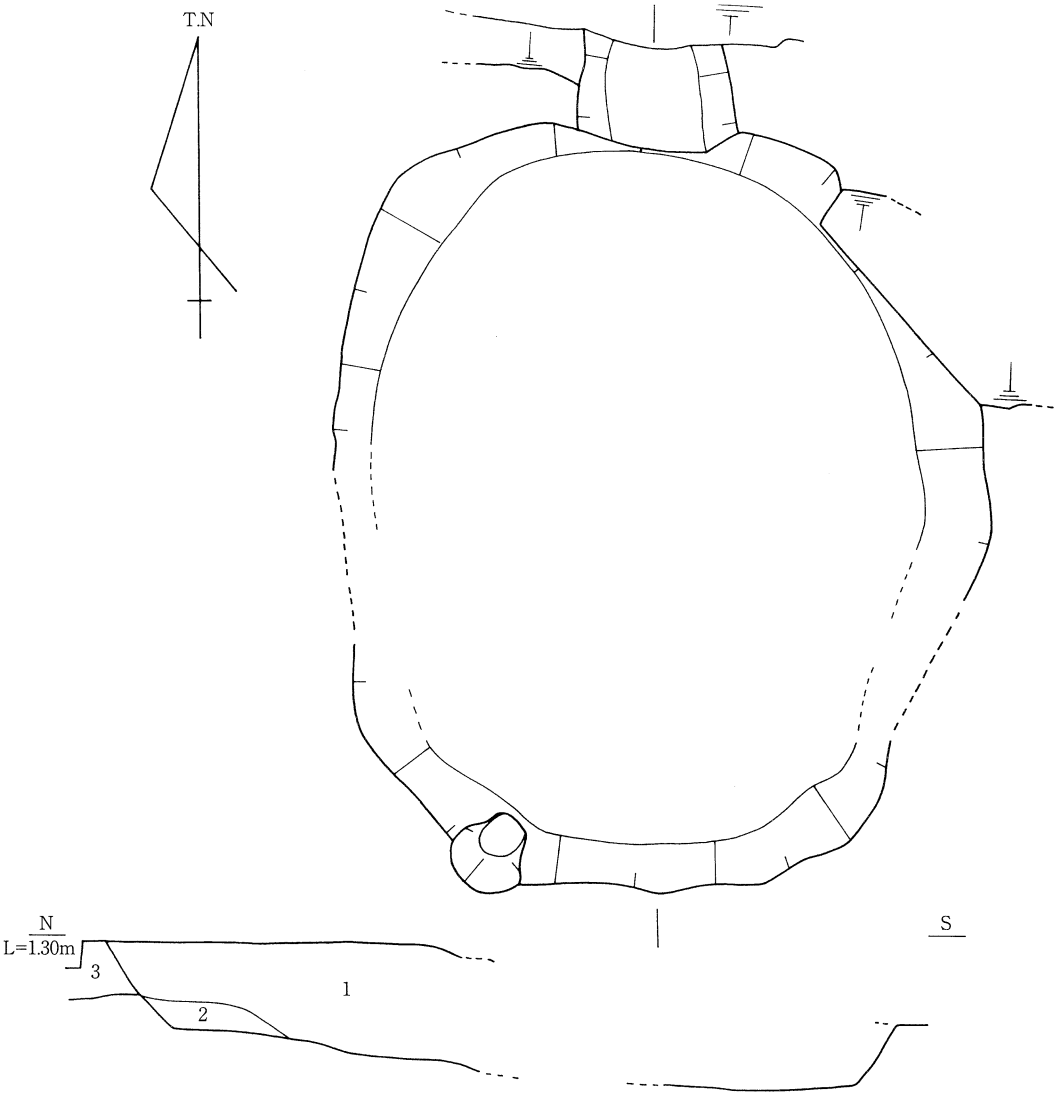
第 38 図　SE104・SX105 平・断面図（1/40），SE104・SX105 出土遺物実測図（1/3，1/2）

SX104（第39図参照）

調査地北端部A7，標高1.22mで遺構の北半を確認したが，B7地点のコンクリート基礎除去を行った結果，南半部の遺存が確認できSX103に後出するものとして検出した。平面は南北方向に4.03m，東西方向に3.45mを測る楕円もしくは隅丸方形状に認められる。深度は0.83m，断面は台形状を呈する。底面は南端部へと緩やかに下り，また北端部には付随して幅0.85mを測る溝状遺構SD103が認められることから，本来，水溜施設であった可能性も考えられる。また埋土は，瓦・炭・貝殻を多量に含む鈍い灰黄～暗灰黄色シルトで，廃棄土坑として埋没するようである。出土遺物はコンテナ23箱あり，図化したような陶磁器，金属製品，瓦等の他，貝殻，骨片等がある。

SX104出土遺物（第40～44図参照）

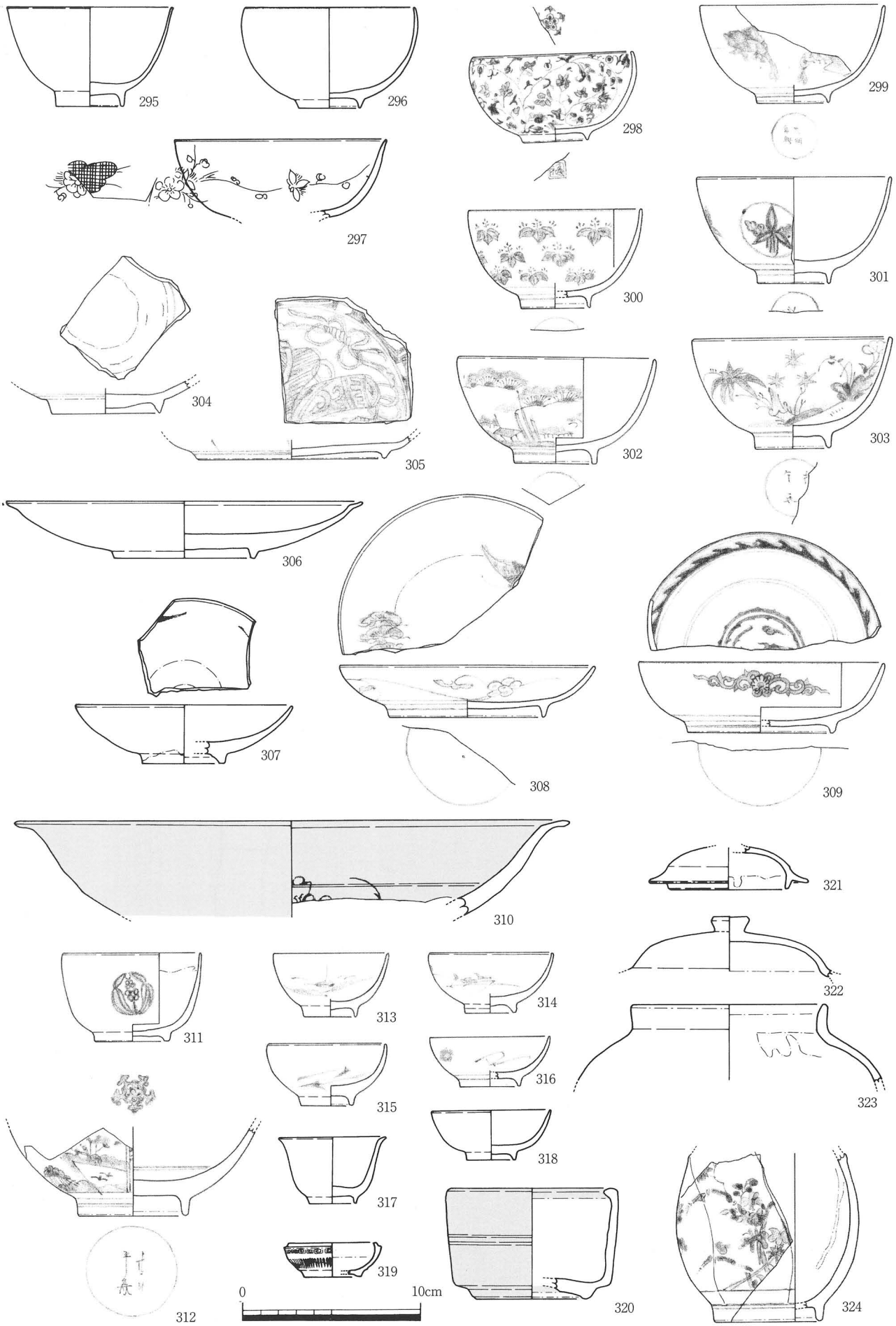
295～324は，磁器。295～303は，肥前系磁器碗。295・296は，白磁。296は薄手の半球形を呈し，口錆を施す。297は，赤・金とみられる上絵の痕跡が認められる。298～303は，染付碗。298は薄手の半球形を呈し，見込みに手書きの五弁花，高台内には二重方形枠に渦「福」の銘款をもつ。299は，小径のU字高台をもち，高台内に「大明年製」の銘款をもつ。301も小径のU字高台で，印判手のもの。303はくらわんか手で，高台内に「大明年製」の銘款をもつ。304は高台無釉で，見込みに蛇ノ目釉剥ぎを行う。305は，景徳鎮窯系青花の兜鉢。306～309は，肥前系磁器皿。306は白磁，307～309は，染付文様を施す。307は高台無釉，見込みに蛇ノ目釉剥ぎを行う。308は裏文様に花唐草，高台内にハリ支え痕が残る。309の縁文様は墨弾き，裏文様はコンニャク印判による。310は肥前系青磁鉢で，内面の施文は片切り彫りと染付による。311は肥前系磁器で，印判手の蓋物。312は肥前系磁器鉢で，見込みに印判の五弁花，高台内に「太明年製」の銘款をもつ。313～317は，肥前系磁器小坏。319は肥前系の白磁で，型押し成形の合子。320は肥前系青磁で，蛇ノ目凹形高台をもつ香炉類。321～323は肥前系白磁蓋（321～322），壺（323）。324は肥前系磁器瓶で，体部には陽刻の捻り文が認められる。



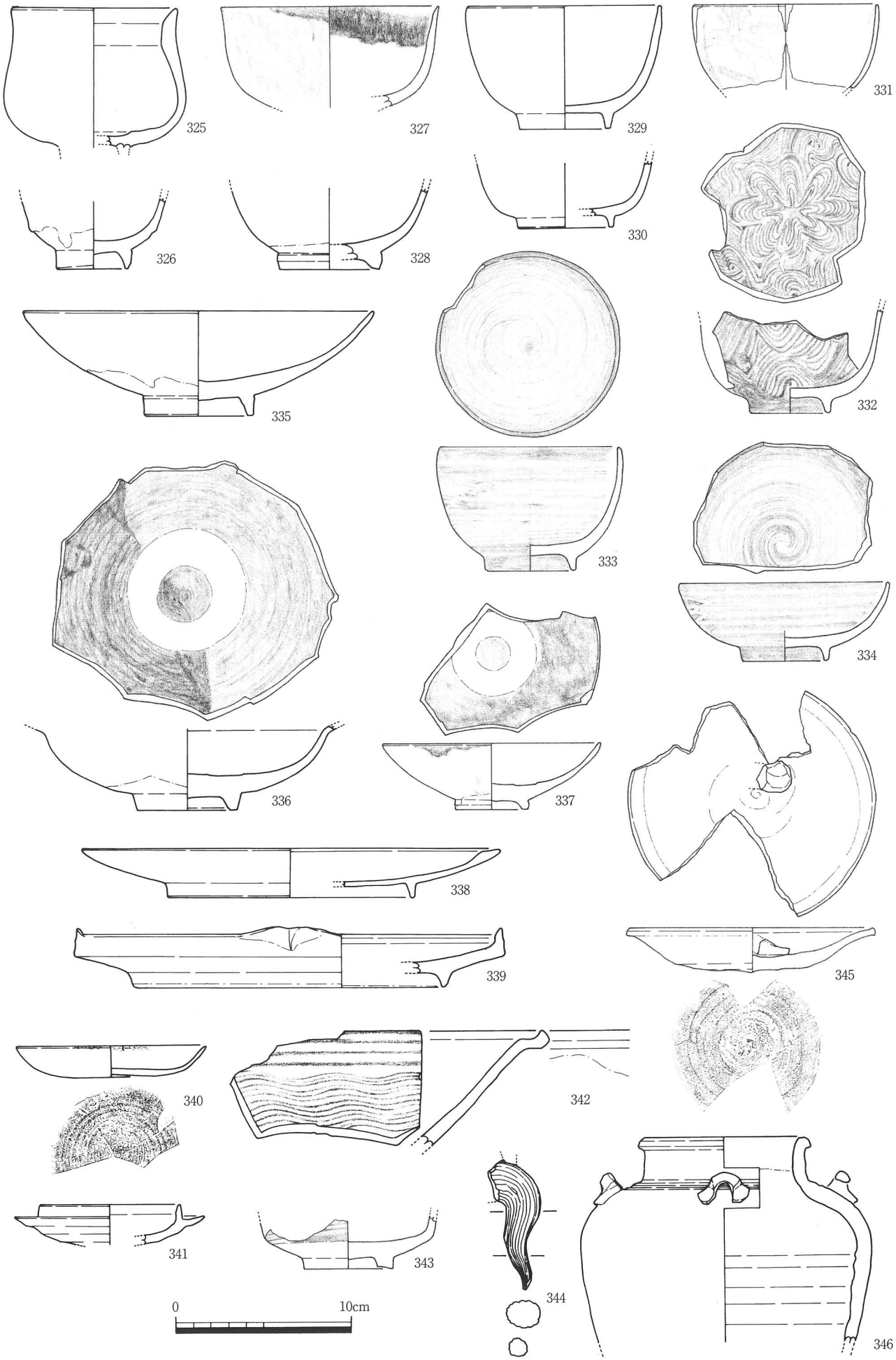
1：暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト（炭・貝殻・瓦を多量に含む）　3：暗灰黄色（やや締まる，炭を多量に含むシルト）
2：鈍い灰黄色（7.5YR5/3）シルト（炭・瓦を多量に含む）　1・2：SX104埋土，3：SD103埋土

0　2m

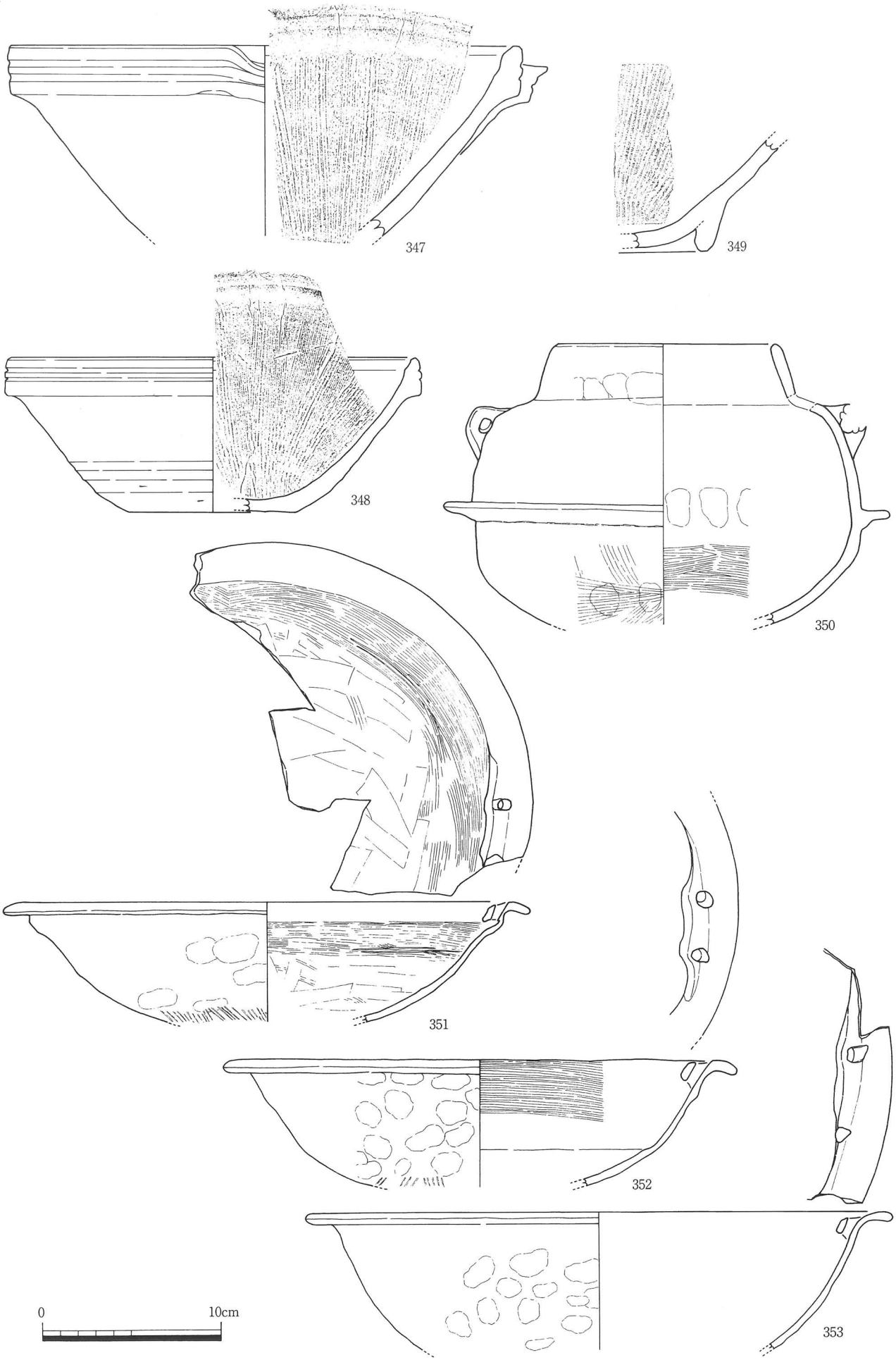
第39図　SX104・SD103平・断面図（1/40）



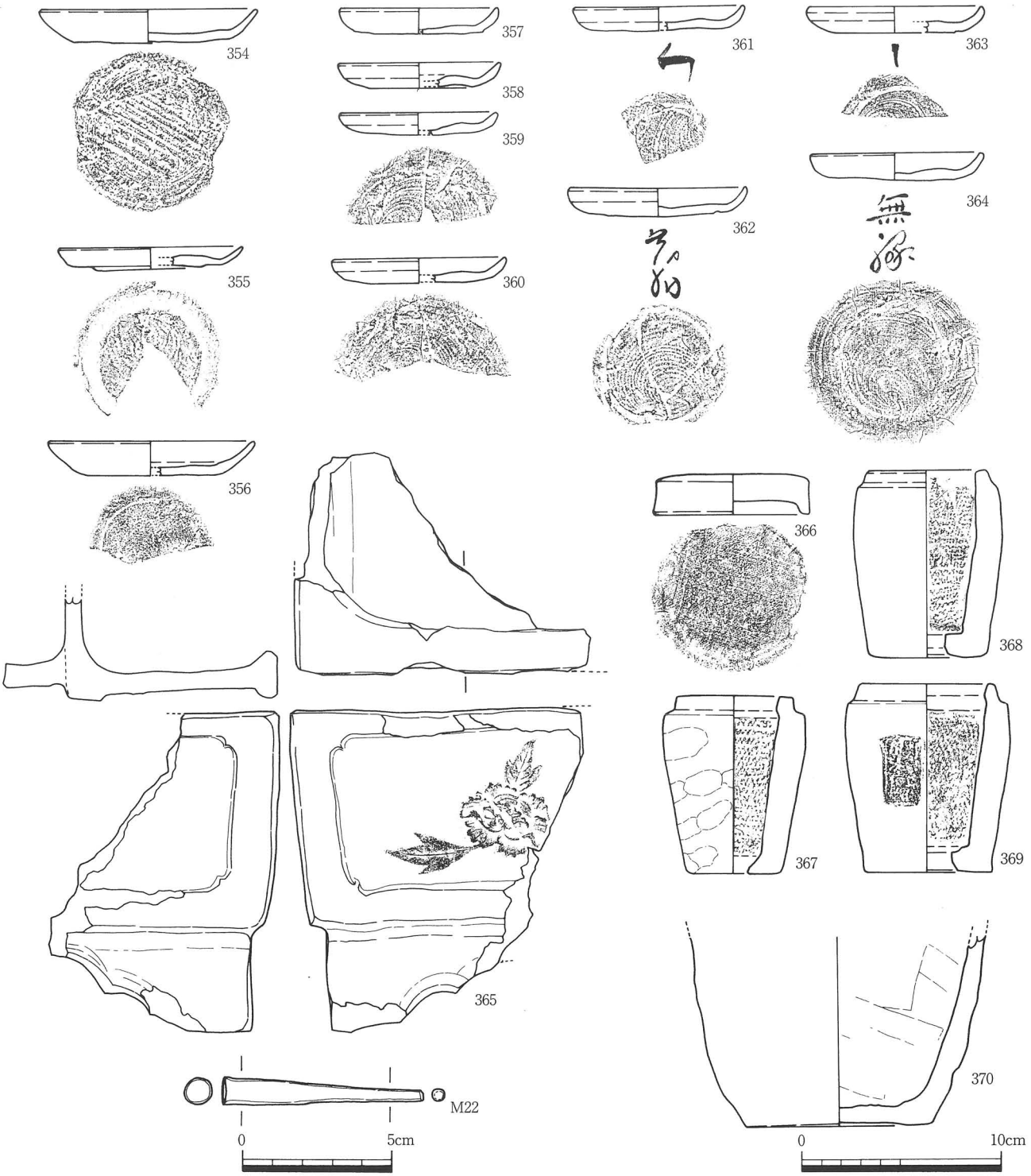
第 40 図　SX104 出土遺物実測図① (1/3)



第 41 図　SX104 出土遺物実測図② (1/3)

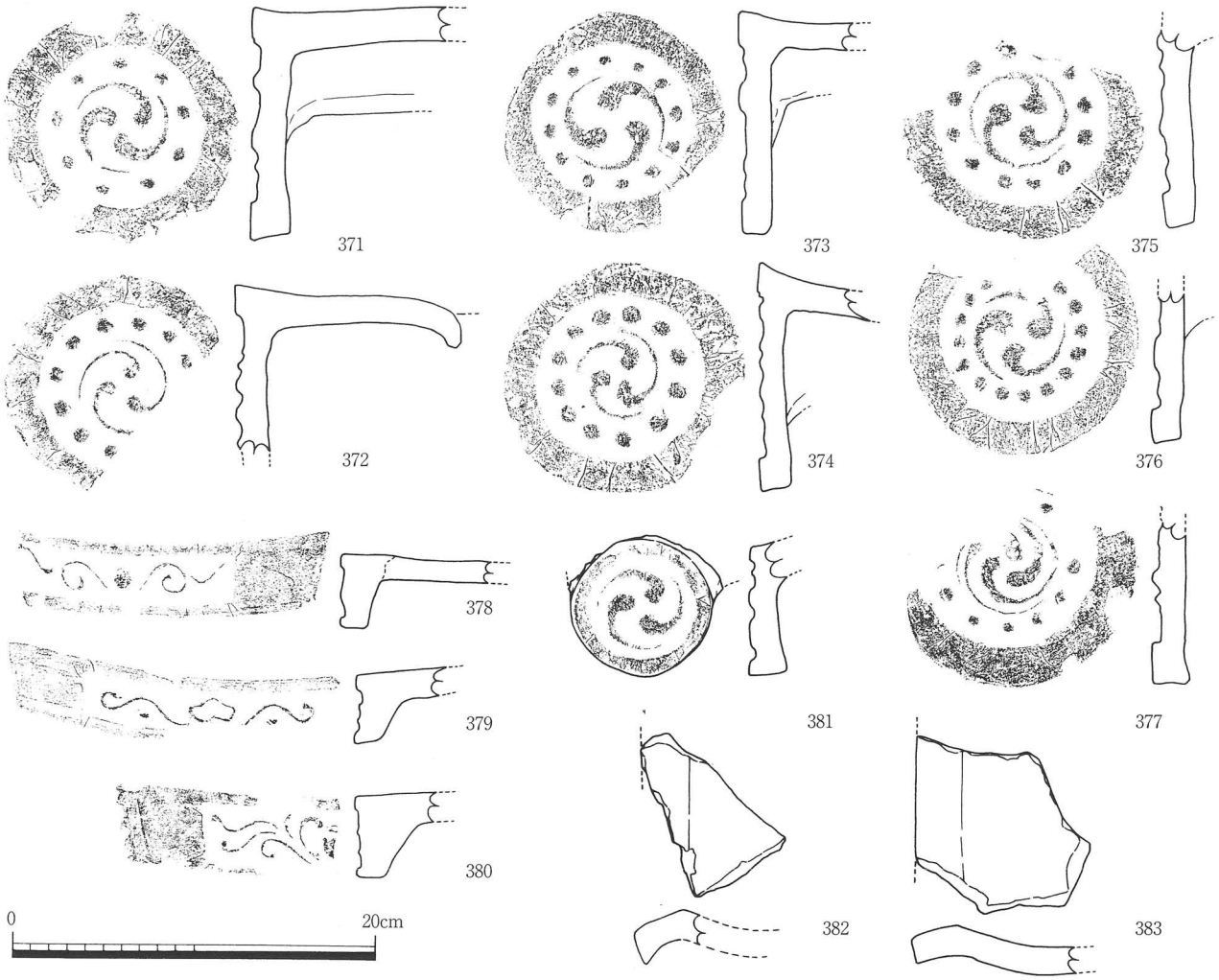


第 42 図　SX104 出土遺物実測図③ (1/3)



第 43 図　SX104 出土遺物実測図④（1/2・1/3）

325～349 は，陶器。325 は，内外に漆黒色の釉を施す茶碗。326～330 は，肥前系陶器碗。326 は底部無釉で，鉄釉を施す。釉内には，金の板状結晶が混じる。327 は，内外面で鉄釉，透明釉を掛け分ける。329・330 は，京焼風陶器碗。全面に施釉し，器面は浅黄色(329)，褐色(330)を呈する。331 は京・信楽系陶器で色絵碗。金・緑色の上絵付けが見られる。332～334 は肥前系陶器で，刷毛目碗。332 は黒色釉の地に，白土による波状の装飾を施す。333・334 は丸碗と平碗で，何れも褐色釉の地に白土による直線(渦巻き)状の装飾を施す。335～337 は肥前系陶器皿で，何れも底部無釉。336 は外面に透明釉を施し，内面は銅緑釉・鉄釉を掛け分けるもので，見込みには蛇ノ目釉剥ぎを行う。337 は内面に銅緑釉を施し，見込みに蛇ノ目釉剥ぎを行う。338 の皿は高台径が大きく，直線的に開く体部からやや内弯し口縁に至るもので，口縁部は内側に肥厚する。全面に施釉を行い，器面は黄色を呈している。339 も高台径が大きく，折縁の口縁をもつ。口縁端部は内側に窪み，ヒダ状口縁，もしくは隅入角になるものとみられる。施釉は全面に及び，褐色を呈する。340・341 は備前系陶器で，灯明皿。340 は口縁外面から内面にかけて塗土を行い，体部外面の回転ヘラケズリは底部に及んでいる。口縁には煤の付着が認められる。341 は



第 44 図　SX104 出土瓦実測図 (1/4)

受皿で，かえりは口縁より高く立ち上がる。内外面に塗土を行う。342 は肥前系陶器鉢で，内面は褐色釉の地に白土による波状の装飾を施す。343 は肥前系陶器火入れで，底部無釉。体部外面は褐色の釉を掛け，白土による装飾を施す。344 は陶製の脚，もしくは飾り部。胎土は緻密で，灰白色を呈する。線彫りにより施文し，透明釉を施す。345 は蓋で，口縁外面から内面にかけ鉄釉を掛ける。体部外面にはケズリ調整，底部に回転ヘラ切り痕が認められる。346 は壺で，肩部に紐状の耳が付く。胎土は緻密で灰白色を呈し，褐色の釉が掛けられる。347 ～ 349 は備前系陶器擂鉢で，何れも口縁，擂目等から乗岡編年の近世3期に相当するものとみられる。347 は口縁部上端・顎部に熔着痕，体部に火襷痕が認められる。小形の 348 は体部下半にケズリ調整を行い，底部に熔着痕が残る。349 は高台をもつもので，畳付には熔着痕が残る。

350 は，土師質土器茶釜。肩部に付く耳の一方が欠損しており，この直近の頸部にこれを補完すると考えられる焼成後の穿孔が認められる。351 ～ 353 は，土師質土器焙烙。先行する SX103 の出土品に比べ，やや器壁が薄く器高も減じるように思われるが，依然深手で，器面に残る調整痕も大差ない。354 ～ 364 は，土師質土器皿。354 は灰白系の胎土で，見込み及び底部の調整痕から高松城編年（佐藤 2003）の皿 AV 形式に相当する。355 は，円盤状の底部に回転糸切り痕が残る。胎土は精良で灰白色を呈する。357 ～ 364 は橙～浅黄橙色を呈する胎土で，底部に回転糸切り痕が認められる。内弯する短い口縁や見込みが窪む等の特徴から，高松城編年（佐藤 2003）の皿 AVI 形式に相当する。361 ～ 364 は底部に墨書を記し，完存する 362・364 については「無縁」と判読できる。365 は，瓦質焼成の火鉢。型押しによる窓枠と花卉の陽刻が認められる。366 ～ 369 は，焼塩壷と同蓋。何れも板作りで，内面にやや粗い布目状圧痕が残る。369 は，方形枠の刻印をもつ。摩滅により判読は難しいが「御[　]湊伊□」と見えることから，「御壺塩師 / 堺湊伊織」を示す刻印の可能性が考えられる。370 は土師質土器の底部で，壺もしくは鉢とみられる。M22 は金属製品で，煙管の吸口部。

371 ～ 383 は，瓦。多量に出土したが，取り上げについては軒を有する等，特徴的なものに限り，コンテナ5箱程度とした。所属時期は，桟瓦の存在や瓦当剥離材にキラコを用いたものが若干量認められることから，高松城編年（佐藤 2003）の様相5（18 世紀第2四半期）に相当する。371 ～ 377 は，軒丸瓦。何れも三巴文で，珠文数は，9 ～ 16 である。376 の瓦当には，キラコの付着が認められる。378 ～ 380 は軒平瓦で，何れも宝珠文系の中心飾りをもつ。381 は小丸瓦で，桟瓦の軒部分とみられる。382・383 は，桟瓦である。

調査地北東部E層上面検出遺構（第45～47図参照）

調査地北東部に位置するB12・C12・D12地点のE層上面で検出した遺構である。上述の調査地北端で認められたI層は南方につれ希薄になり，当地点ではC層直下，E層上面を遺構検出面とした。各遺構の埋没時期については，概ね調査地北端部の結果と同様，I層の上・下面に相当する17世紀後半及び18世紀前半の2時期に大別できるが，18世紀前半に属する遺構の埋土には炭・焼土が認められ，その特徴となっている。

SK112（第46図参照）

調査地北東部B12，標高1.06 mで確認した土坑である。東・西端部を欠き全容は不明だが，平面は1.6 m程の不整形を呈する円形に推定される。深度は0.24 m，断面は台形を呈する。埋土は上位に炭・焼土を含む灰黄色シルト質土，下位は褐灰色シルトである。出土遺物はコンテナ1/2程で，図化したもの他，瓦，貝殻，魚骨等がある。出土遺物から，18世紀前半の埋没時期が考えられる。

SK112出土遺物（第46図参照）

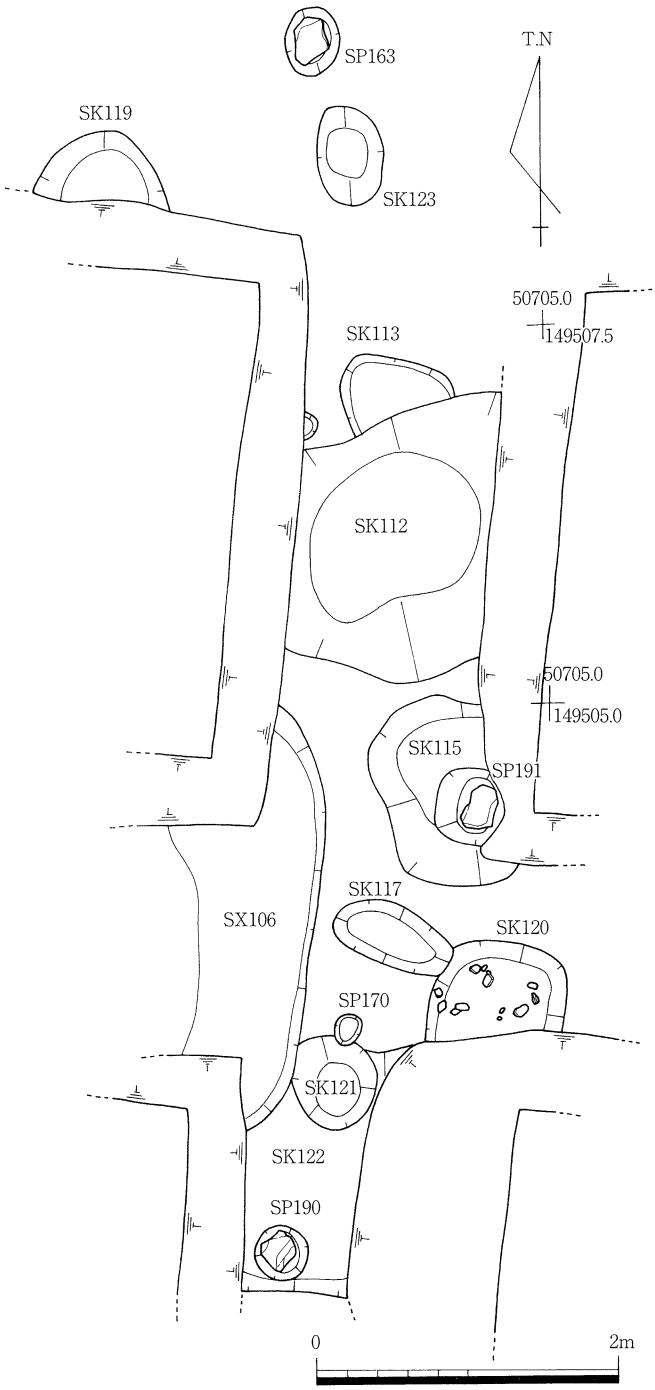
384～386は，肥前系青磁皿及び香炉。蛇ノ目凹形高台で，釉剥ぎ部に鉄銹を塗布する。皿の見込には，彫り文様が見られる。387は京焼風陶器碗の底部で，高台内に「木下弥」の刻印が認められる。388は，土師質土器焙烙。389は，千手観音の土師質土器人形。中実の型成形で，表面にキラコ塗布が認められる。390は軒平瓦で，下向きの三葉文を中心飾りにもつ。SX103の出土瓦に，同笵のものがある。

SK113（第46図参照）

調査地北東部B12，標高1.06 mで確認した土坑である。南部をSK112に壊され全容は不明だが，0.7 m程の規模と推定される。深度は0.20 m，埋土は礫を含む暗灰黄色シルトで，骨片が混じる。出土遺物は少量で，図化したものの他，白磁碗，肥前系陶器，土師質土器皿，瓦等がある。出土遺物から，17世紀後半の埋没時期が考えられる。

SK113出土遺物（第46図参照）

391は備前系陶器擂鉢。乗岡編年の近世2期に相当するものとみられ，擂目の状態から未使用品と推定される。



第45図　B12・C12・D12地点E層上面検出遺構（1/50）

SK115（第47図参照）

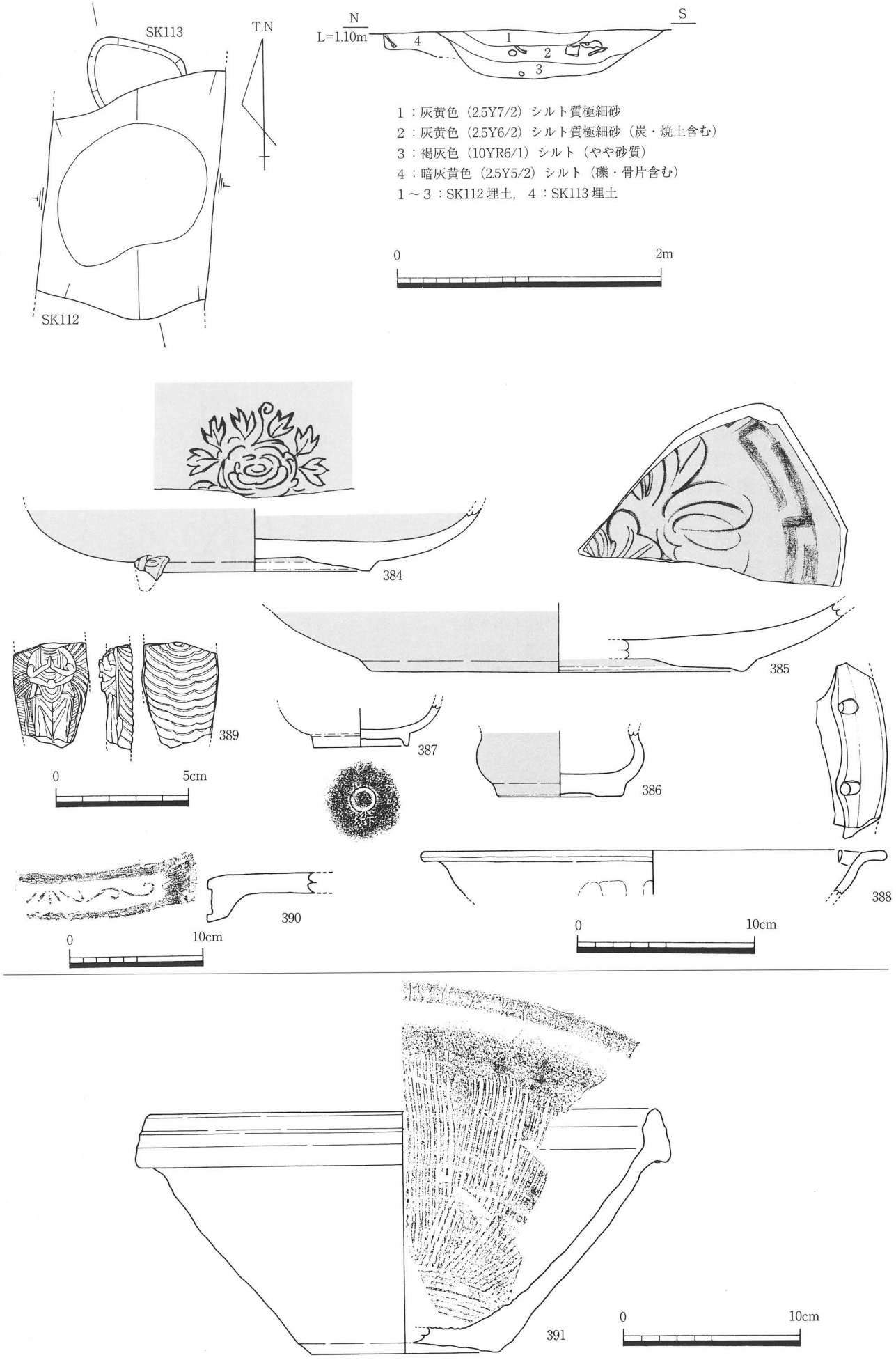
調査地北東部B12・C12，標高1.06 mで確認した土坑である。東半部を欠くが，平面は1.2 m程の方形と推定される。深度は0.29 m，断面はU字形で，底面に根石を据えたSP191が認められる。埋土は上位に灰黄色シルト質土，下位に褐灰色シルトが堆積し，各々に炭・焼土が認められる。出土遺物は少量で，景徳鎮窯系青花，肥前陶磁器の細片等がある。埋土がSK112と酷似し，明瞭な前後関係を示さないことから，18世紀前半の埋没時期が考えられる。

SK120（第47図参照）

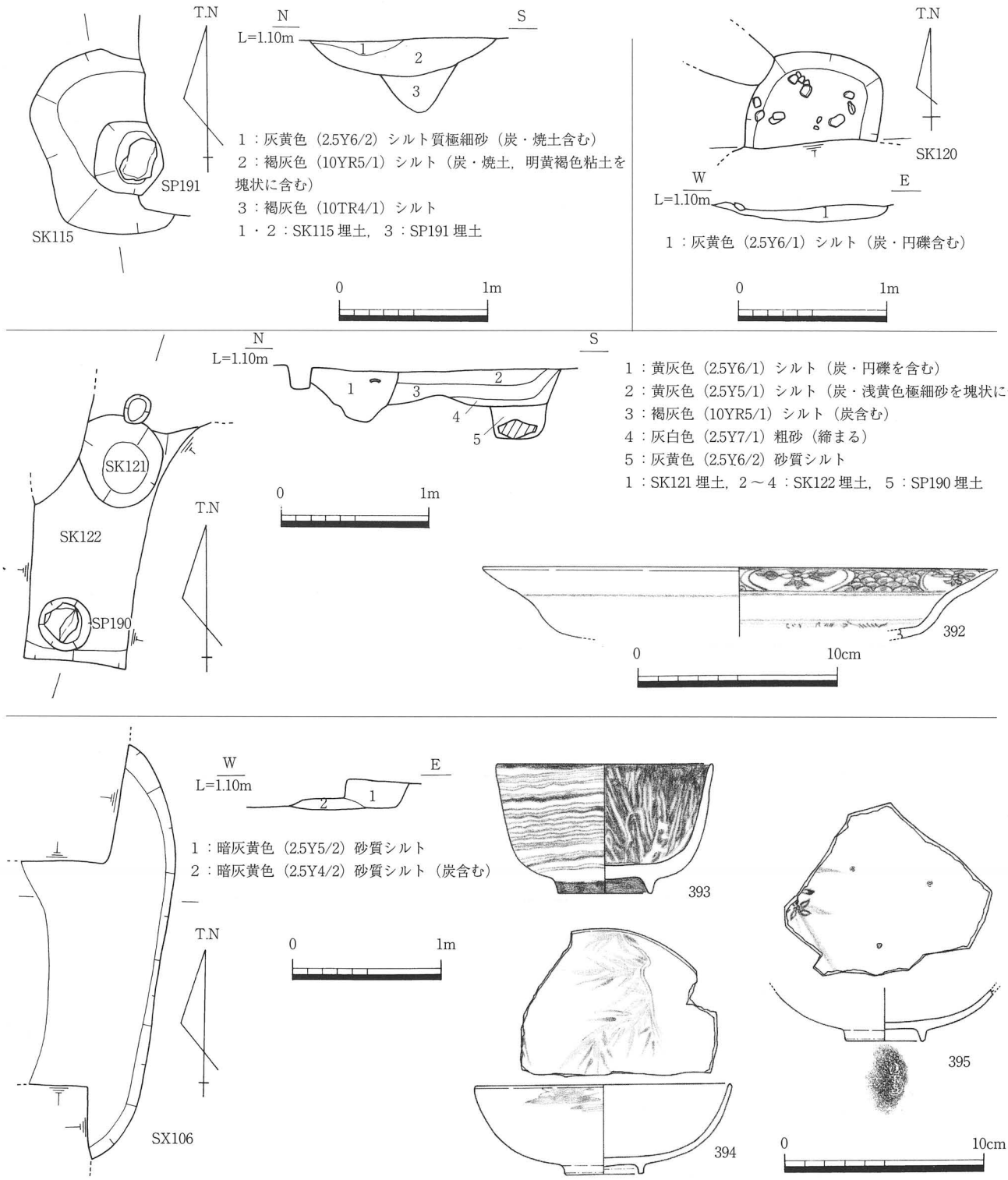
調査地北東部C12・C13，標高0.98 mで確認した土坑である。南半部を欠くが，平面は0.9 m程の方形と推定される。深度は0.11 m，断面は船底形を呈し，埋土は炭・小礫を含む黄灰色シルトである。出土遺物は少量で，土師質土器等の細片がある。詳細な時期は不明だが，SK121と同系の埋土から18世紀前半の埋没時期が想定される。

SK121（第47図参照）

調査地北東部D12，標高1.00 mで確認した土坑。平面は，0.6 m程の円形を呈する。深度0.38 m，断面U字形，埋土は炭・小礫を含む黄灰色シルトである。出土遺物は少量で，漳州窯系青花，土師質土器焙烙，骨片がある。詳細は不明だが，SK122に後出し18世紀前半の埋没時期が想定される。



第 46 図　SK112・113 平・断面図（1/40），SK112・113 出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4），刻印拓本（1/2）



第 47 図　SK115･120･121･122･SX106 平･断面図（1/40），SK122･SX106 出土遺物実測図（1/3），刻印拓本（1/2）

SK122（第 47 図参照）

調査地北東部 D12，標高 1.00 mで確認した土坑である。東・西端部を欠き，全容は不明である。深度は 0.26 m，断面は台形で，底面に根石を据えた SP190 が認められる。埋土は上位に I 層と同系の黄灰色シルト，以下は褐灰色シルト，灰白色細砂が認められる。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系陶器の細片がある。埋土の特徴から，17 世紀後半の埋没時期が考えられる。

SK122 出土遺物（第 47 図参照）

392 は，漳州窯系青花皿である。

SX106（第 47 図参照）

調査地北東部 C12，標高 1.05 mで確認した遺構である。西半部を欠くが，長軸は 2.8 m，主軸方位 N-8°-E を測る。深度は 0.18 m，断面は台形で，埋土は暗灰黄色砂質土。出土遺物はコンテナ 1/4 で，図化したものの他，備前系陶器等がある。出土遺物から，18 世紀前半の埋没時期が考えられる。

SX106 出土遺物（第 47 図参照）

393 は，肥前系陶器の刷毛目碗。394・395 は，京・信楽系陶器の平碗。394 は色絵，395 は錆絵を染付けるもので，高台内の隅に「清閑寺」の小判印が認められる。

調査地南端部検出遺構（第48～50図参照）

調査地南端部，G6～G9・D6～F6・F8地点において，E層及びF層上面で検出した遺構である。一定規模の柱穴が密集して確認されたが，上部構造を明確に示すものはなく，SA101を復元したに止まる。出土遺物も皆無に等しく，層序よりF層上面で認められるSP134～140・142が17世紀前葉，その他は17世紀後半を中心とした埋没時期が窺われるのみである。

SA101（第48図参照）

調査地南部D6～F6，標高0.93～1.13mで確認した柱穴（SP006・107・109・113・172・175）で柵列状に復元できるものである。周囲が撹乱・削平面に接しており，全容・詳細は不明だが，5間相当，10.56mの規模で認められる。柱穴の深度は0.16～0.39mで，SP109・175に根石が確認されている。柱間距離は1.4m，2m，2.6m前後，主軸方位はN-11°-Eを測る。出土遺物はSP175からの備前系陶器・土師質土器細片のみであるが，SP107・109・113の埋土がI層と同系に見られることから，17世紀後半の埋没時期が推定される。

G6～G9地点E層出土遺物（第50図参照）

396～398は，G6～G9地点でE層掘り下げ時の出土遺物である。396は，漳州窯系青花碗。397は，土師質土器皿。胎土は砂粒を含み，橙色を呈する。398は土師質土器鍋類。

SE102（第50図参照）

調査地南端部F8，標高1.11mで確認した井戸状遺構である。西端部を欠くが，平面は0.9m程の円形と推定される。深度は1.32mで，断面は台形を呈する。埋土は砂質土を基本としたもので，底面付近で湧水が認められる。出土遺物は少量で，弥生土器・須恵器細片がある。検出面から，17世紀後半を中心とした埋没時期が考えられる。

SD104（第50図参照）

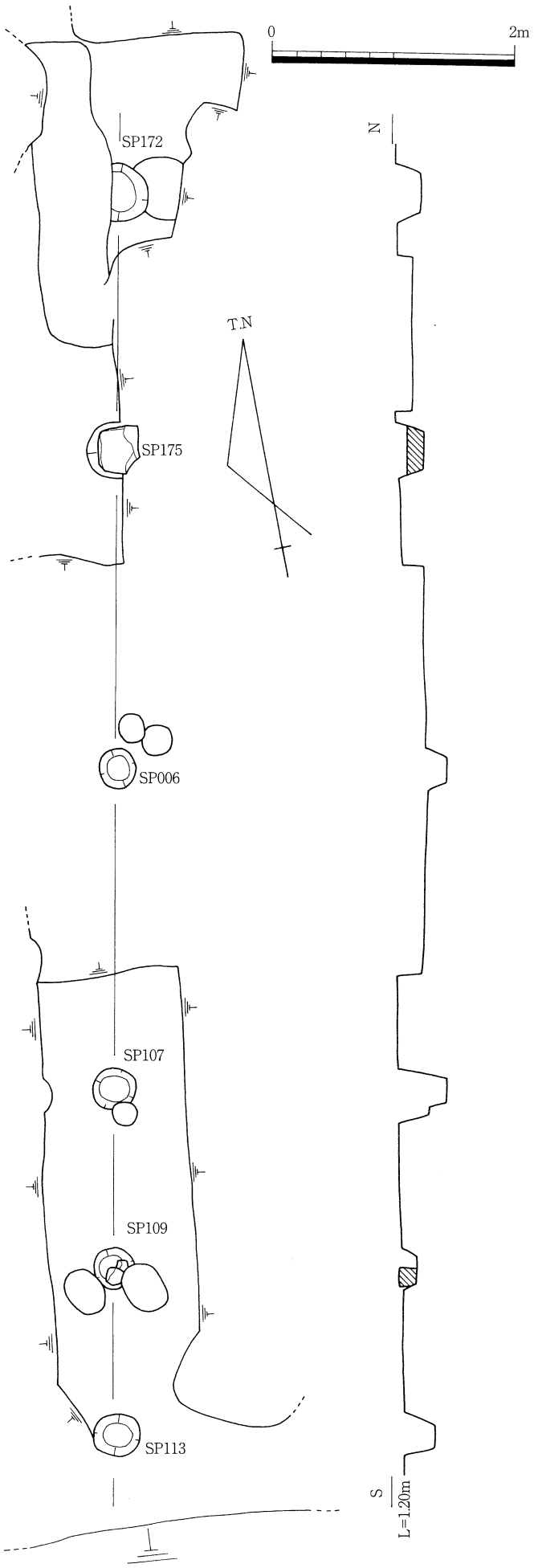
調査地南端部F8，標高1.11mで確認した溝状遺構である。検出長は1.5m程で，N-82°-Wの方位を直線的に延びる。幅0.4m，深度0.07mを測り，断面はU字形を呈する。埋土は浅黄色シルト質土で，底面に拳～人頭大の礫が認められた。出土遺物は無く，検出面から17世紀後半を中心とした埋没時期が考えられるが，重複関係でSE102に後出する。

SX108（第50図参照）

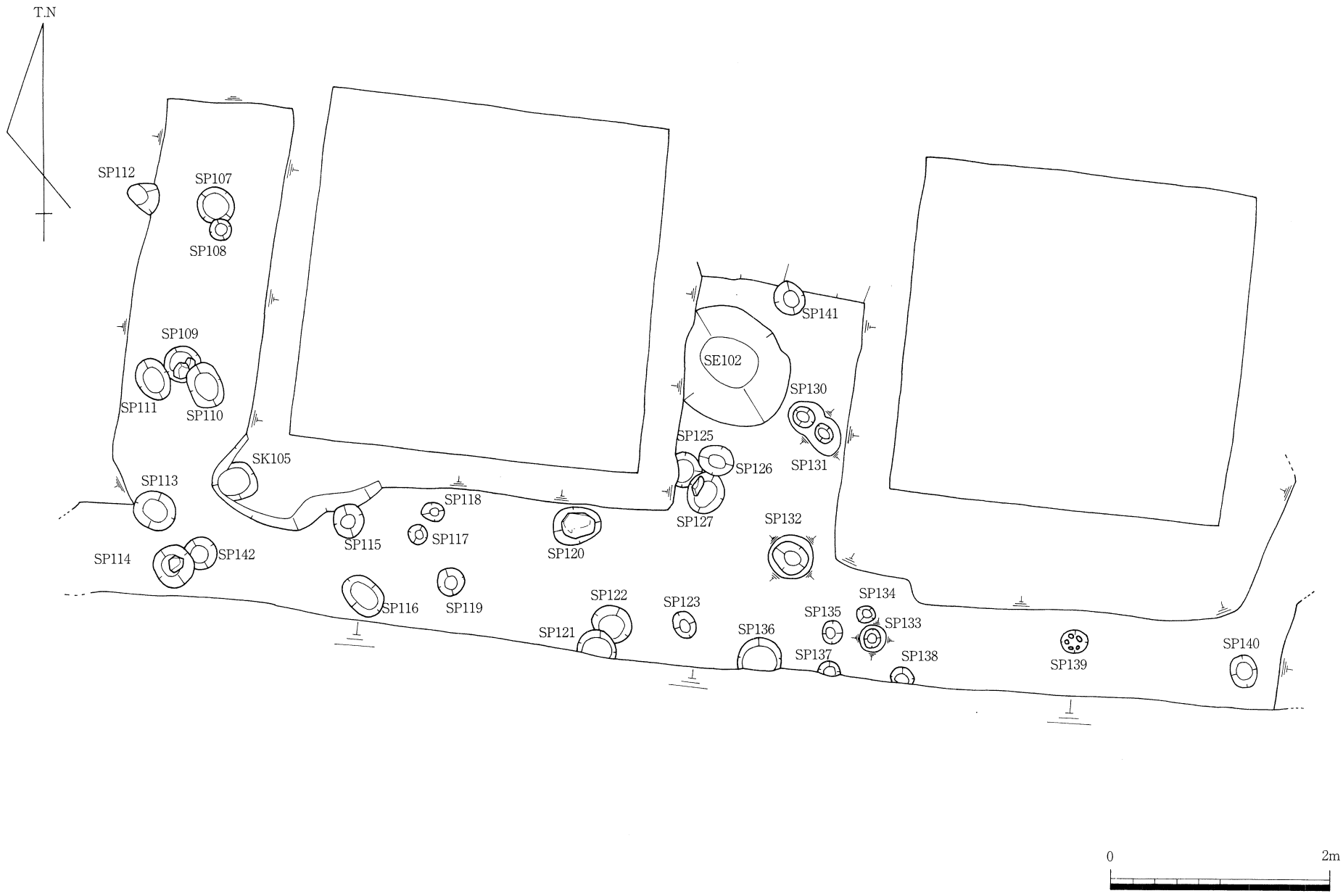
調査地中央部C6・D6，標高1.19mで確認した遺構である。平面は長軸2.30m，短軸0.67mを測る長方形を呈し，N-8°-Eの方位を示す。深度0.24mを測り，断面は台形を呈する。埋土は瓦の細片を多量に用いつき固めており，基礎部分に相当する可能性がある。出土遺物に瀬戸・美濃系陶器腰錆茶碗等，18世紀後半に属する陶磁器細片がある。

SX108遺物（第50図参照）

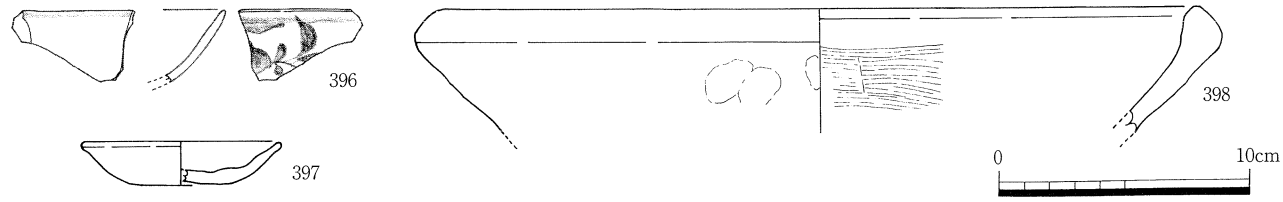
399は肥前系磁器紅猪口で，印判手のものである。

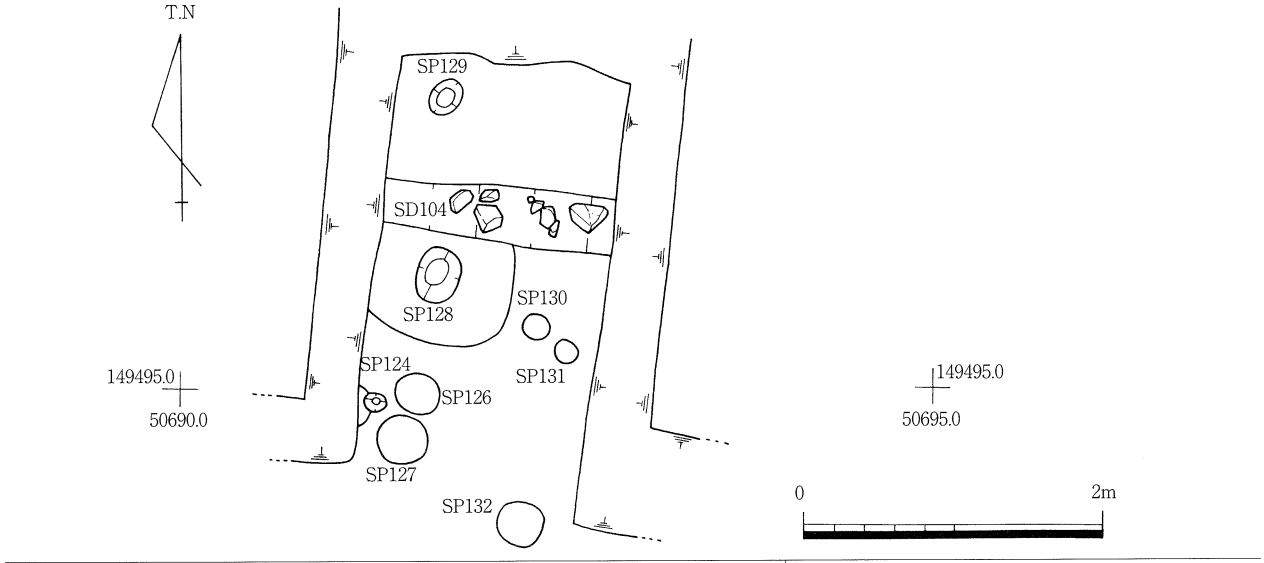


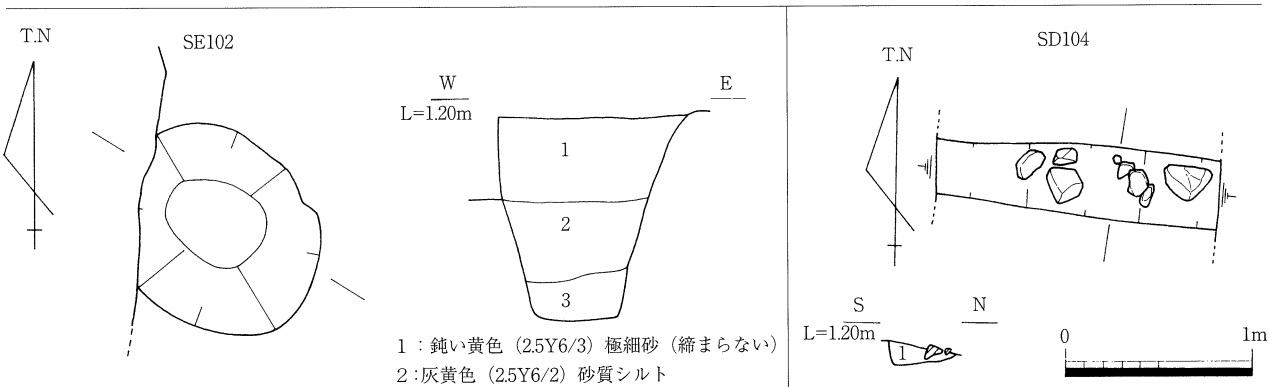
第48図　SA101平・断面図（1/50）

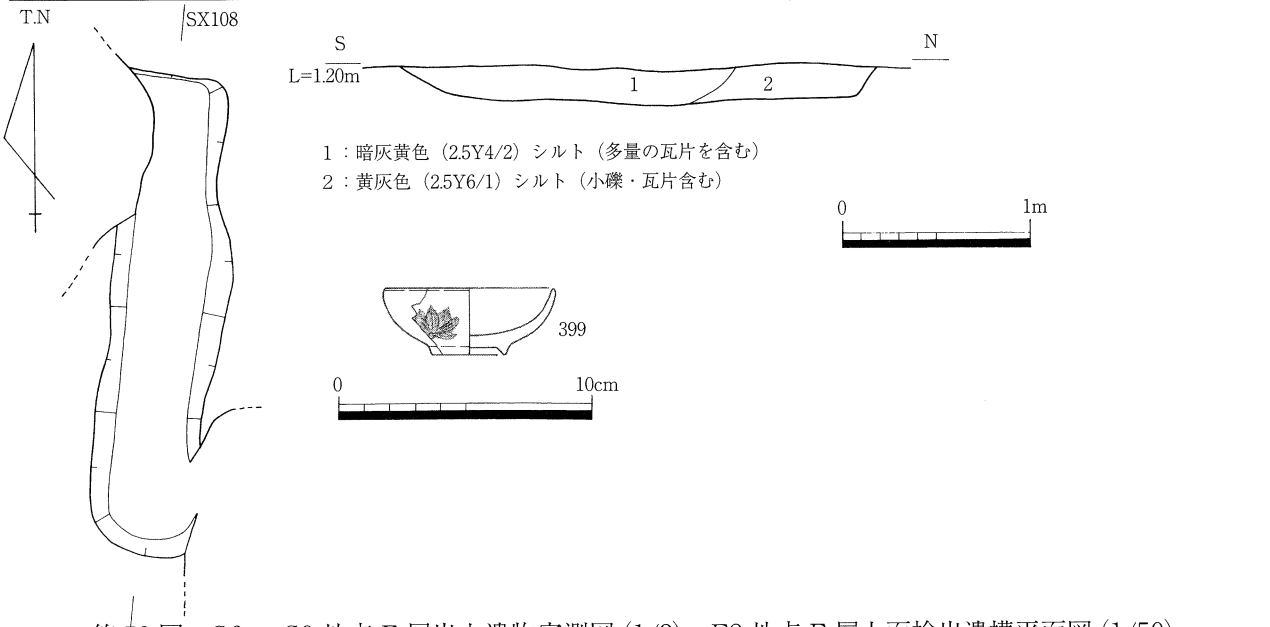


第 49 図　G6 ～ G9・F6・F8 地点 E ～F層上面検出遺構 (1/50)









第50図　G6～G9地点E層出土遺物実測図（1/3），F8地点E層上面検出遺構平面図（1/50），SE102・SD104・SX108平・断面図（1/40），SX108出土遺物実測図（1/3）

調査地西端検出遺構（第51～54図参照）

調査地西端部，E2・E3・F2・G2・G3地点において，焼土を伴って検出された遺構である。当地点ではC層以下，E層の上位で焼土を含む堆積が一定範囲認められたことから，これを前後とする2時期の遺構を検出した。調査時には当地点の焼土を含む堆積層についても，北東部で確認される焼土を含む堆積（D）層と同一層と見做し，I層に後出する基本層序としていたが，当地点ではI層との前後関係を示すものはなく，また焼土層に後出するSX102，SE107の出土遺物からはI層に先行し下位のE層に近似した時期の所産となる可能性が考えられる。

SE101（第51図参照）

調査地西端部G3，標高1.17mで確認した井戸状遺構である。西端及び北端部をSD101，攪乱により欠くが，平面は1.6m程の円形と推定される。深度は1.10mで，断面は台形を呈し，底面付近で湧水が認められる。上位の埋土は焼土を伴うもので，外縁及び下位の埋土には拳大の礫が多量に認められた。出土遺物は少量で，陶磁器細片，土師質土器・須恵器の細片がある。所属時期は，検出面から17世紀前葉頃と推定される。

SK116（第51図参照）

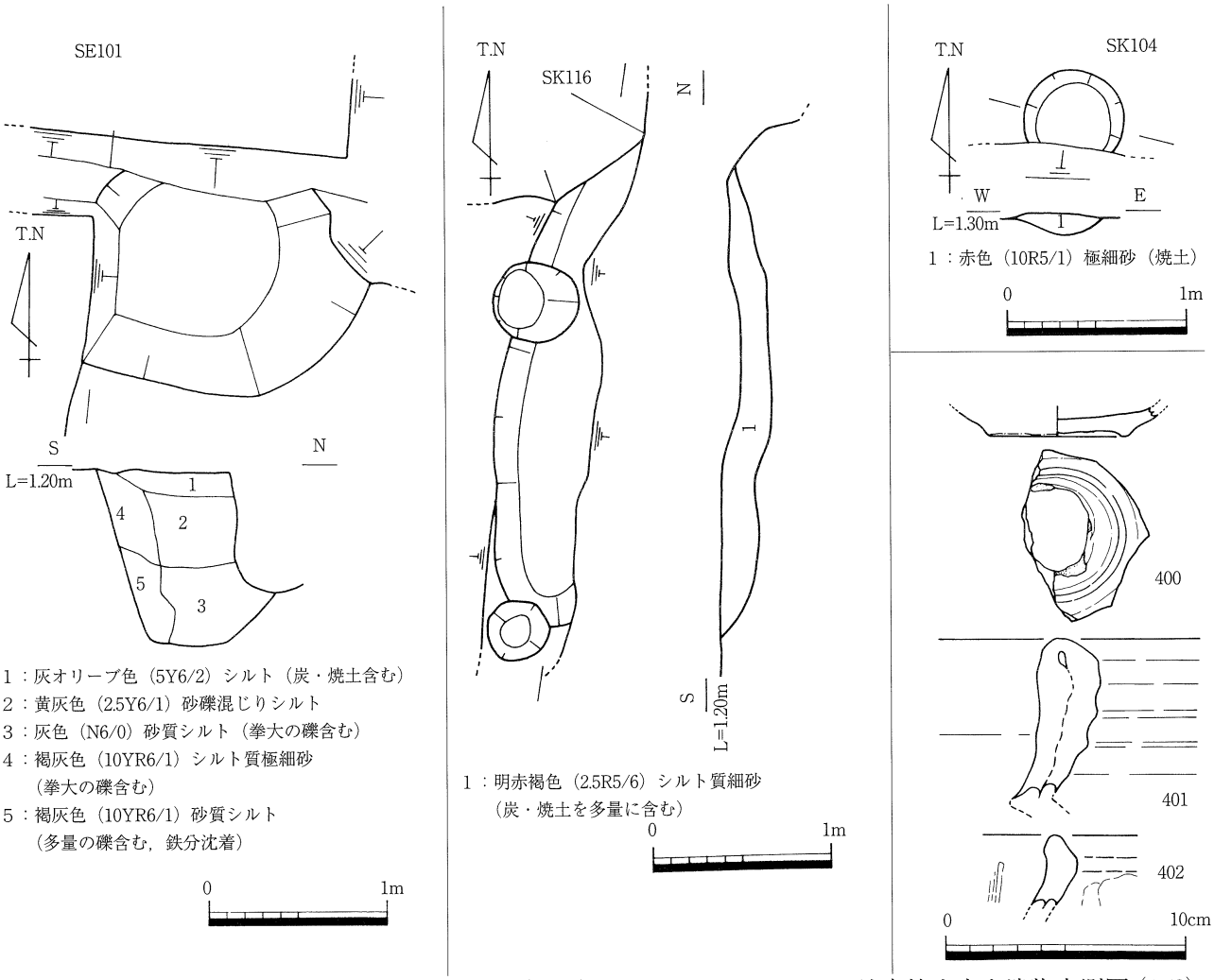
調査地西端部F2，標高1.12mで確認した土坑である。北端及び東半部を欠くが，平面は南北に2.2m，東西に0.6m程の長方形と推定される。深度は0.33m，断面はU字形で，底面は緩やかな凹凸をもつ。埋土は，焼土により充填される。出土遺物は無い。検出面から所属時期は，検出面から17世紀前葉頃と推定される。

SK104（第51図参照）

調査地西端部G2，標高1.25mで確認した土坑である。南端は調査範囲外だが，平面は0.5m程の円形と推定される。深度は0.10m，断面はU字形を呈し，埋土は焼土により充填されている。出土遺物は少量で，土師器，須恵器，瓦器の細片がある。所属時期は，検出面から17世紀前葉頃と推定される。

E2・E3・F2・G2・G3地点焼土層出土遺物（第51図参照）

400～402は焼土層より出土した遺物である。400は瀬戸・美濃系陶器で，灰釉の皿。高台内に，輪ドチ痕が認められる。401は，備前系陶器大甕。402は，土師質土器の擂鉢である。



第51図　SE101・SK116・SK104平・断面図（1/40），E2・E3・F2・G2・G3地点焼土出土遺物実測図（1/3）

調査地西端上層部検出遺構（第52図参照）

調査地西端，焼土上面で検出された遺構である。確認された遺構は，南北方向に延びる石組み溝SD101があり，この南西部を中心に道路の礫床部とみられる集石が認められる。現有の大手筋に相当する道路より10m程東よりとなるが，側溝を伴った道の境部分に相当していた可能性が考えられる。一方SD101の北西部では，井戸跡SE107や石組みSD102，等間隔に並ぶSK101～103が確認された。また溝SD101の東，敷地内に相当する箇所にはSD101に接し，一定の規模をもつSP102他，柱穴が確認されているが，何れも建物，柵列を復元するには至らない。

所属時期については，大半の遺構及び被覆層からの出土遺物がなく詳細不明である。少量だが遺物が認められるSX102，SE107及びこれと同系の埋土をもつSK101～103については，17世紀中葉頃の所産と推定される。他のものについては17世紀中葉以降で，後出するSX101より19世紀後半を下限とするものと考えられる。

SD101（第52・53図参照）

調査地西端部E3・G3，標高1.3m前後で確認した石組み溝である。コンクリート基礎によって南北に分断されるが，N-8°-Eの方位を直線的に延びて認められる。石組みには自然石を用い，横方向に並べて壁面を揃えており，幅の内法は0.35m前後を測るものとなっている。石組みは基本的に一段のみ認められるが，掘り方の高さや裏込めの状態から，更に上段の石組みや蓋石が存在した可能性も考えられる。また掘り方は断面が台形を呈するもので，敷地側に相当するとみられる東岸部の裏込めが入念に認められる。埋土は締りのないシルト質土で充填されており，平坦面の底部は素掘りとなっていた。排水方向については，底面の標高が南・北端部でほぼ同じ高さを測ることから明確なものとならない。出土遺物は少量で，埋土から土師質土器の細片及び瓦が出土している。所属時期は上述のように17世紀中葉頃に遡る可能性があるが，南北を主軸とする方位では18世紀代の所産であるSX108等と合致する点から，当該期を中心とした所産と推定される。

SD102（第52・53図参照）

調査地西端部D2・E2，標高1.38mで確認した石組みである。SD101と直交する位置関係にあり，埋土もこれと同様に認められることから，北方向からL字に折れSD101へと排水される溝を想定したが，撹乱が大きく石組みの遺存状態が悪いため，明確なものではない。石組みは人頭大の河原石を用い，壁面を揃えるように横方向へ一段並べるもので，幅は内法で0.4m前後を測る。深度は0.29mを測り，SD101との底面の高低差は約0.25mである。出土遺物は無い。所属時期については詳細不明だが，埋土の特徴からSD101と同様の埋没時期と考えられる。

SK101～SK103（第52・53図参照）

調査地西端部E2・F2，標高1.30m前後で確認した土坑である。平面は，0.6m前後を測るやや不正形な円形を呈する。深度は0.14～0.25mを測り，SK102がやや浅くなっている他，SK103の底面には，柱穴状の窪みが認められる。何れも断面はU字形を呈し，埋土はSX102，SE107と同様の円礫を多量に含んだ灰黄色シルトより充填されている。出土遺物にはSK101，SK103から少量の備前系陶器，土師質土器，須恵器等の細片や貝殻，魚骨がある。

SP102（第52・53図参照）

調査地西端部E3，標高1.33mで確認した柱穴である。北半を欠くが，平面は，0.4m程の円形と推定される。深度は0.49mを測り，断面はU字形を呈する。埋土は多量の円礫を含み，底部には根石が詰められている。出土遺物は無い。

SX102（第54図参照）

調査地西端部D1・E1，標高0.86mで確認した遺構である。撹乱直下の砂堆面で検出したが，調査地の西壁土層（第7図参照）からC層の下位に存在する焼土層上面からの掘り込みが認められる。北・西部が調査範囲外へと広がっており，全容は不明であるが，南北3.5m，東西2.4m以上の規模をもつ。深度は検出面から0.84mを測り，湧水層に達している。断面は台形を呈し，埋土は円礫を多量に含む灰黄色シルトにより充填されている。出土遺物は少量で，図化したものの他，弥生土器，骨片等がある。

SX102出土遺物（第54図参照）

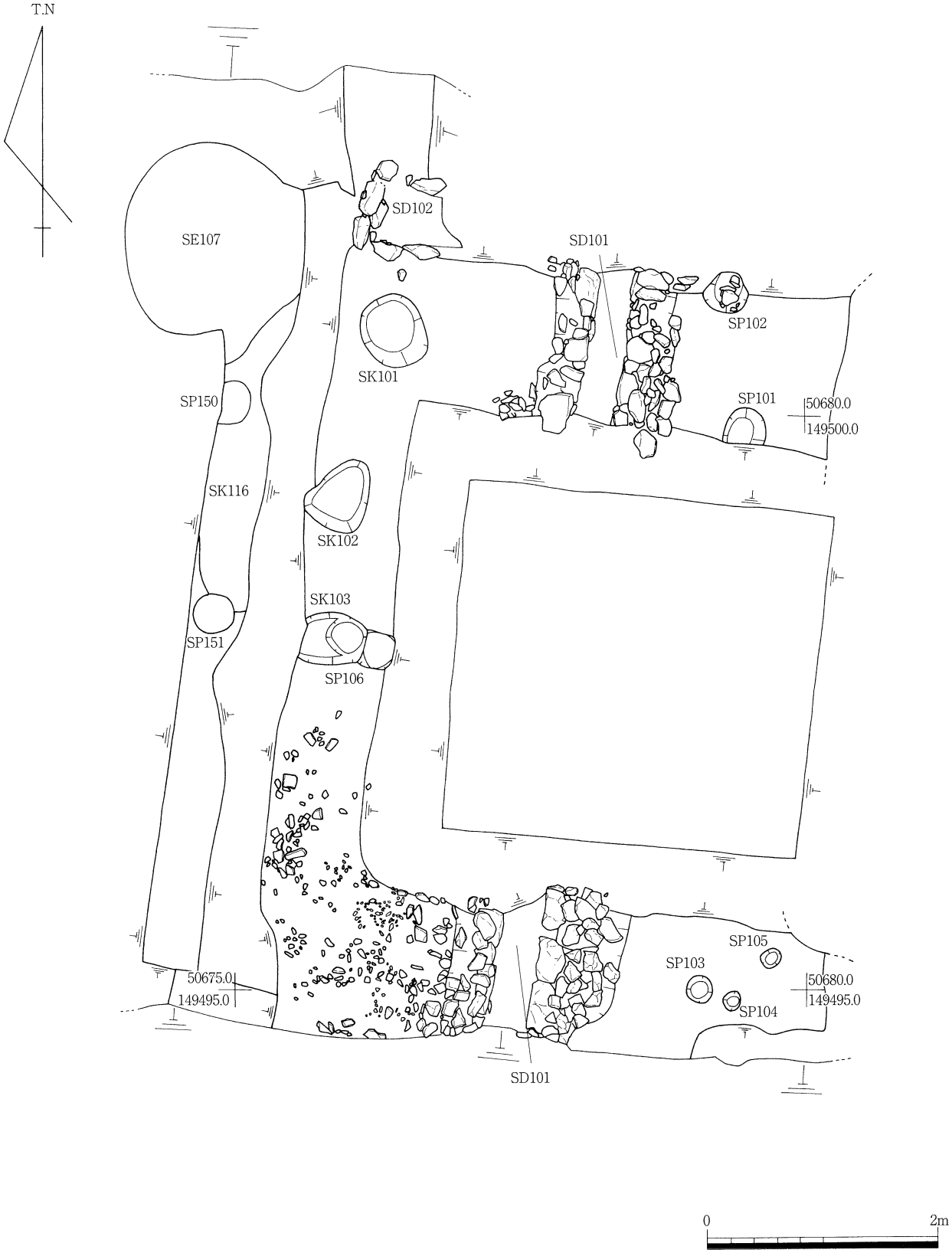
403は肥前系陶器で，灰釉の皿。高台内には，砂粒が付着している。404は瀬戸・美濃系陶器で，志野茶碗。405は備前系陶器擂鉢で，口縁部及び擂目の特徴から乗岡編年の近世2b期に相当する。

SE107（第52・54図参照）

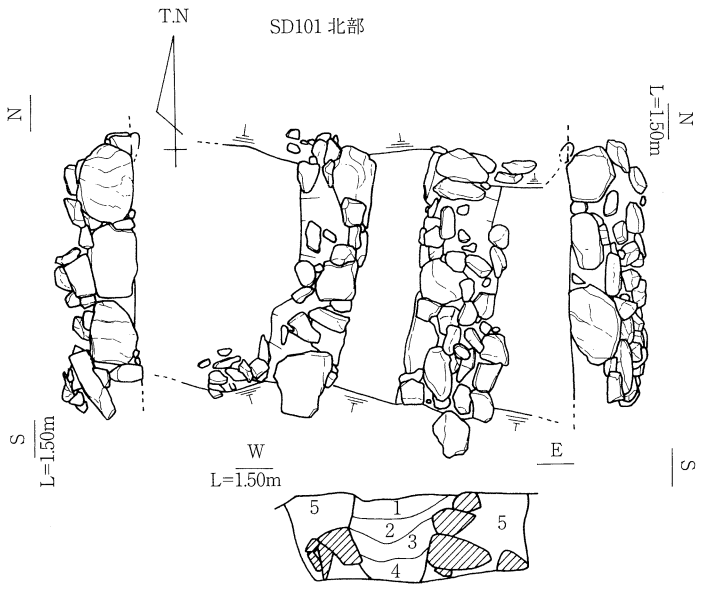
調査地西端部D2・E2，標高1.12mで確認した井戸である。大半部を撹乱直下の砂堆面で検出したが，東端の掘り込みが焼土で充填されたSK116の上面より認められ，またSX102と同埋土をもつことから，これと同時期の所産と考えられる。平面は1.7m程の円形で，掘り込みの下端には杭が認められる。断面は段が付くもので，また底面には径0.7m程の桶が据えられており，内部に湧水が認められる。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系陶器，弥生土器がある。

SE107出土遺物（第54図参照）

406は瀬戸・美濃系陶器で，柿色の釉を施す天目茶碗。407・408は備前系陶器で擂鉢，大甕。407は口縁部及び擂目の特徴から，乗岡編年の近世1c期に相当する。409～411は，土師質土器擂鉢あるいは内耳付鍋とみられる口縁部片。高松城編年（佐藤2003）より，様相3までの所産と考えられる。

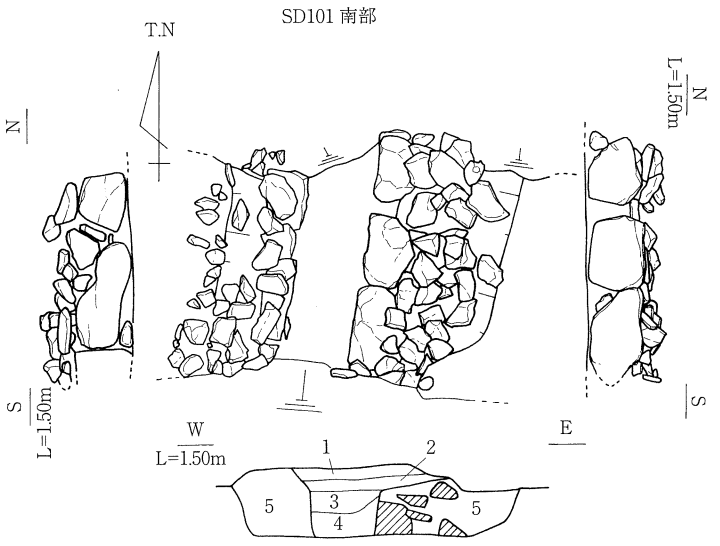


第52図　調査地西端 E2・E3・F2・G2・G3 地点上層部検出遺構 (1/50)



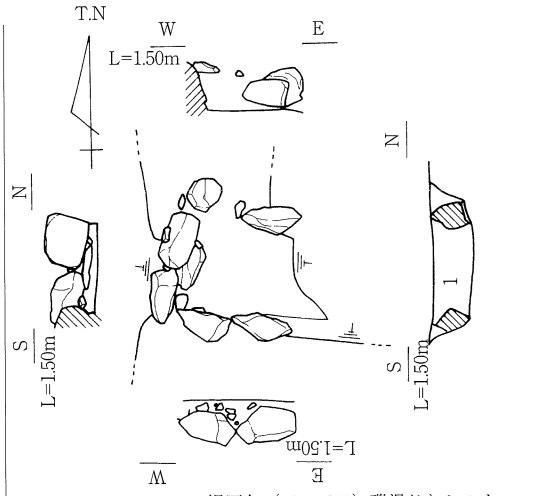
1：浅黄色（5Y7/3）シルト（瓦含む）
2：灰オリーブ色（5Y6/2）細砂（締まらない）
3：黄灰色（2.5Y6/1）シルト質細砂（締まらない）
4：褐灰色（10YR6/1）礫混じりシルト
5：黄灰色（2.5Y6/1）シルト質極細砂
1～4：埋土，5：裏込土

0　1m



1：灰白色（5Y7/2）シルト
2：灰オリーブ色（5Y6/2）シルト質極細砂
3：オリーブ黄色（2.5Y6/4）シルト質細砂（締まらない）
4：灰黄色（2.5Y6/2）細砂（締まらない）
5：褐灰色（10YR6/1）シルト質極細砂
1～4：埋土，5：裏込土

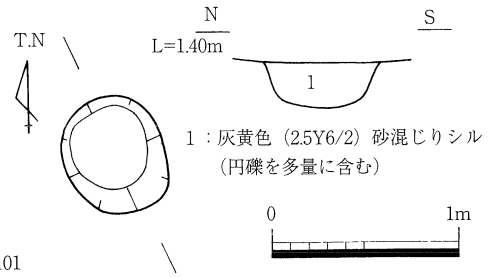
0　1m



1：褐灰色（10YR6/1）礫混じりシルト

SD102

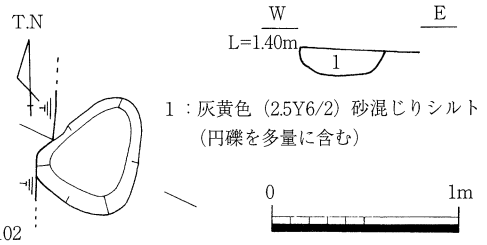
0　1m



1：灰黄色（2.5Y6/2）砂混じりシルト
（円礫を多量に含む）

0　1m

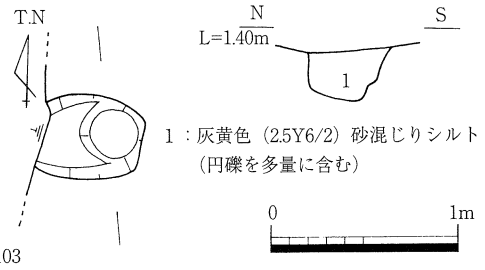
SK101



1：灰黄色（2.5Y6/2）砂混じりシルト
（円礫を多量に含む）

0　1m

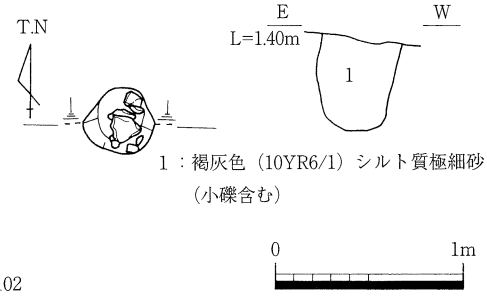
SK102



1：灰黄色（2.5Y6/2）砂混じりシルト
（円礫を多量に含む）

0　1m

SK103

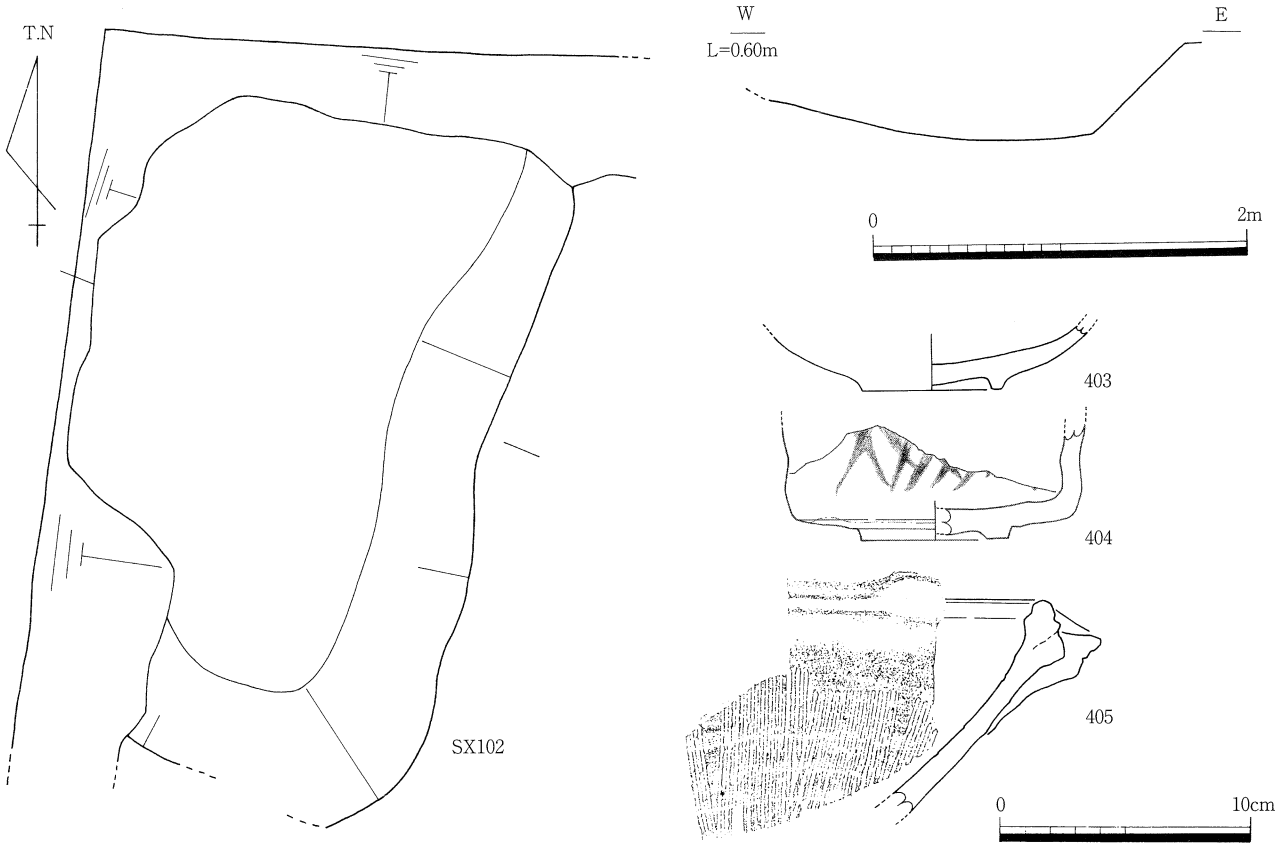


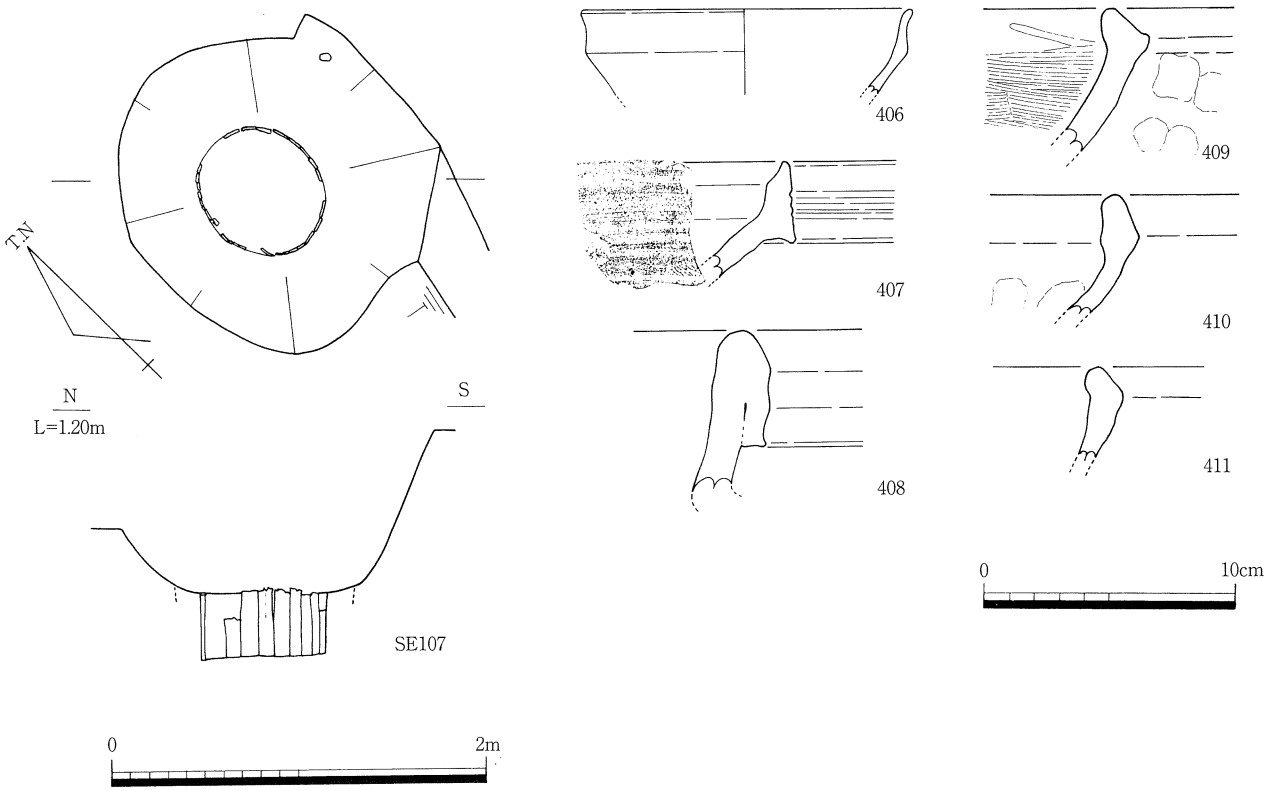
1：褐灰色（10YR6/1）シルト質極細砂
（小礫含む）

0　1m

SP102

第53図　SD101・SD102・SK101～103・SP102 平・断面図（1/40）





第54図　SX102・SE107平・断面図(1/40)，SX102・SE107出土遺物実測図(1/3)

第5節　近世～近代の遺構・遺物

SX101（第55図参照）

調査地西半部D4・E4・F4・G4，標高1.24 mで確認した大型の遺構である。コンクリート製の基礎により一部を欠くが，平面は南北に6.7 m，東西に3.1m程の規模をもつ長方形で，N-7°-Eの主軸方位を測る。深度は0.83 m，断面は台形を呈する。埋土は概ね2つに大別され，最上位に基本層序でB層とした近・現代の遺構ベース層（1層）が認められ，以下は多量の遺物と有機物・炭化物を包含した黒色粘質土によって充填されている。また上述のように本遺構の埋土に，SX103の石積に用いられていたものと同様にみられる花崗岩系の割石が数個体確認された。出土遺物から，19世紀後半の埋没時期が考えられる。

SX101出土遺物（第56～73図参照）

出土遺物は多量でコンテナ150箱程となった。陶磁器類の他，土師質・瓦質土器，瓦，石製品，木製品，金属製品，ガラス製品等と多種にわたるものが認められる。

412～531は，磁器製品。ガラス質の光沢をもつ胎土から，端反碗他，皿類や小形の様々な器種について瀬戸・美濃系（関西系）と推定される製品が肥前系のものと同程度認められる。また近代の所産に典型的な型紙刷りや銅版転写等を用いたものは認められないことから，高松城編年（松本2002）での様相9（19世紀末葉）以降には下らないものと推定される。

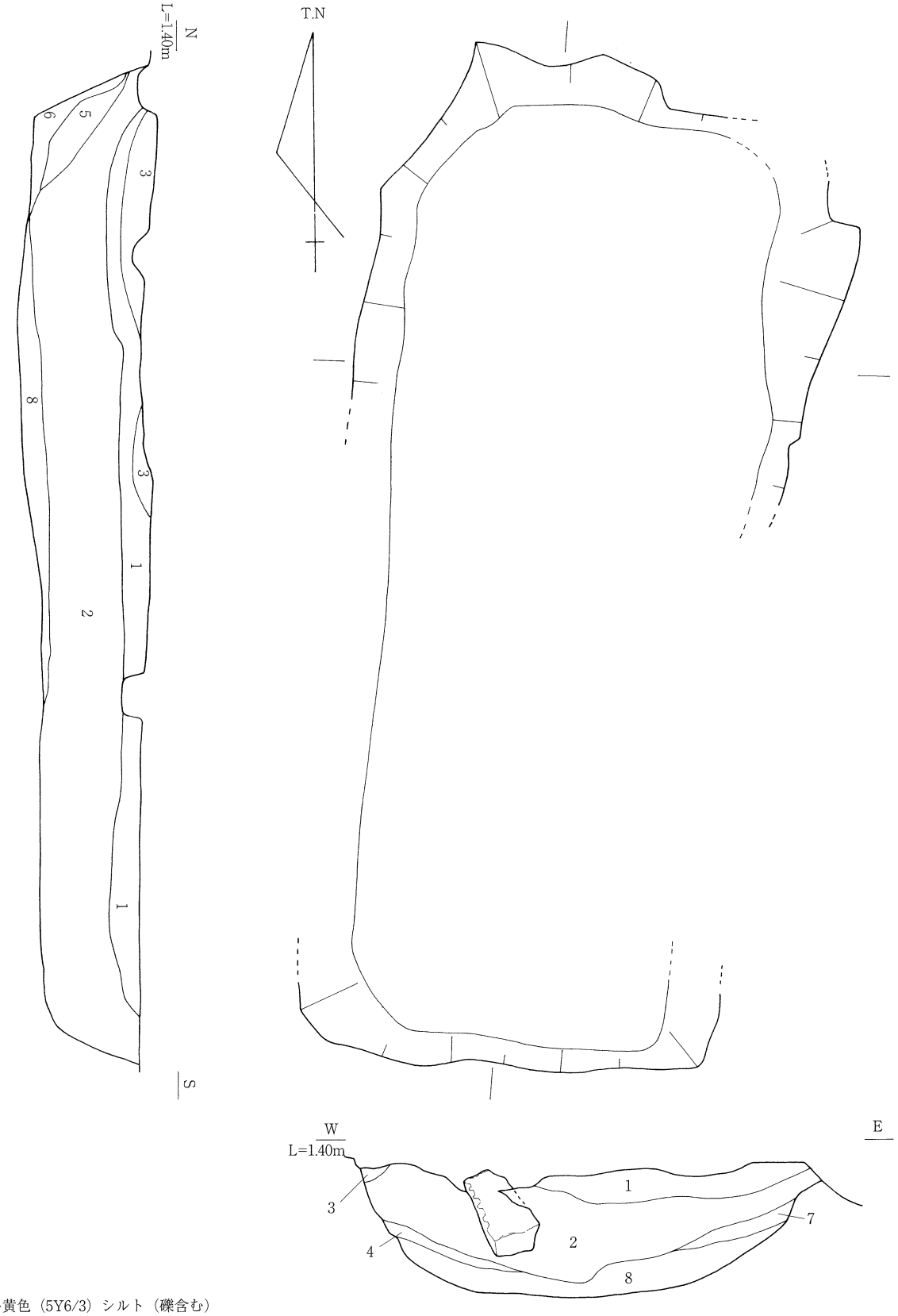
412～459は，碗及び碗蓋。端反碗が多数を占め，セット関係となるものが多く見られる（413/420，426/427，419/432，423/424，437/438，443/444）。肥前系では，端反碗・碗蓋（412～415，420～425）の他，丸碗・碗蓋（437～439），体部が直線的に開く嗽碗形のもの（440），広東碗（441），湯呑碗（447・448）が認められる。染付の装飾文様では，413のように濃みの無い線描きの文様や口縁内面に雷帯文，見込み文様に線描きの環状松竹梅文を施すものが特色として挙げられる。銘款には「青」，「乾」の変形文字が認められる。瀬戸・美濃系端反碗・碗蓋（416～419，426～436）の染付文様では，肥前系のものに比べて太い線描きのものが目立ち，口縁内面の装飾文様も簡略化して見られる。また見込み文様にはワンポイントの文様に加え，銘款や年号を施すものも多く見られる。

442の広東碗は，内外面に黄褐色の釉を施す。443・444は瀬戸・美濃系（関西系）で，雲龍文が染付された丸碗・碗蓋。445・446も瀬戸・美濃系（関西系）。大振りな丼碗のタイプで，濃みの塗埋めによる白抜きの意匠が見られる。449は筒形を呈する色絵の暦手茶碗で，呉須の染付と赤色の上絵を施す。450・451は瀬戸・美濃系（関西系）で，コバルト色の上絵を施す。450の湯呑碗には，屋号とみられる丸に井桁の紋が施される。452～456は瀬戸・美濃系（関西系），色絵の碗。赤を基調に青，黄，緑色等が認められ，452には掻き落しの技法が見られる。器形には端反碗（452・453），丸碗（455），箱形の湯呑碗（456）タイプのものがある。457～459の端反碗・碗蓋は，暗い灰色系の胎土で白化粧を行い，呉須の染付文様を施す。457は印判手，459は蛇ノ目高台になっている。

460～475は，小坏・猪口類。460～465は瀬戸・美濃系（関西系）。460は圏線のみの施文で，高台内に「清玩」の銘款をもつ。462は白磁の盃。463～465は，高台内に「道八」の銘款をもつものである。463・464は同形品で，463は呉須の染付と金彩を施す。464は圏線のみ，465は漢詩が染付されている。466は粗製で，太い線描きで簡略な染付文様を施す。467は白濁色の釉を掛け，呉須で菊を描く。468～473は，瀬戸・美濃系（関西系）。468は口錆を施し，外国船を染付した盃。469は蛇ノ目高台で，口錆と金彩・青色の上絵を施す。470・471のように同形品で，様々な色絵文様をもつものが出土している。470は壺絵の中に，「塩壺　醤油　あぼ志や」とコバルト色の上絵を施す。472は口錆，外面にのみ青磁釉を施す。474・475は，肥前系の瓔珞文猪口（474），貝殻状に型押し成形された紅皿（475）である。

476～499は皿。小皿は瀬戸・美濃系（関西系）のものが主体を占め，中・大皿のもので肥前系のものが目立つ。476～488は，瀬戸・美濃系。476～479は（責）型成形の皿。角皿（476・477），八角皿（478），鳥形（479）があり，476を除き何れも陽刻文に濃みを施す。高台は角皿のものが四角形，八角皿は円形，鳥形のものは分銅形になっている。480～483は，陰刻文の反り皿。480は七福神の陰刻文に，濃みを施す。481～483は，木型打込みの寿文皿。481は無紋の白磁，482・483は赤，青，黄色の上絵が認められる。484～488は，瀬戸・美濃系（関西系）。484は青磁で，蛇ノ目高台のもの。485も青磁で，繊細な陽刻文をもつ角皿。内面と外面を貼り合わせた型物で，兵庫県三田市の三田焼との関連が推定される。486は染付皿で，口錆と高台内に「太明年製」の銘款をもつ。487は赤，青，黄色を用いた色絵の皿。488は鯉を描く染付皿で，口錆を施し，高台内には「玉」の銘款が認められる。489～499は，肥前系の染付皿。489は，蛇ノ目釉剥ぎを施す小皿。490は内外面に網目文を施すもので，見込みは菊花になっている。491は型打成形の輪花皿で，口錆を施す。492も口錆を施す型打成形の輪花皿で，白磁のもの。443は環状松竹梅，二重格子の染付文様をもつ。蛇ノ目凹形高台で，小さな折縁の口縁をもつ。494は型打成形の輪花皿で，一枚絵に口錆を施す。495は，楼閣山水文の角皿。隅入で，縁文様に白抜きの意匠が見られる。496は寿文の皿で，縁文様は線描きとなっている。497は，松竹梅文の輪花皿。縁文様には，蛸唐草を施す。高台内に「冨貴長春」の銘款と4箇所のハリ支え痕が認められる。498は，輪花大皿。縁文様に微塵唐草，見込み文様に環状松竹梅文，その外周帯には濃みの塗埋めによる白抜き文様が見られる。高台内には「成化年製」の銘款，「キリ」と読める釘書きが認められる。499は，芙蓉手花鳥文の大皿。漆による焼継ぎとその傷隠しを金彩によって行っている。

500～511，516～518は，鉢及び蓋物類。500～502は肥前系で，蛇ノ目凹型高台のもの。500は八角形に推定される染付角鉢で，濃みの塗埋めによる白抜きの意匠が見られる。



1：鈍い黄色（5Y6/3）シルト（礫含む）
2：オリーブ黒色（5Y3/1）シルト質粘土（遺物を多量に含む，土壁・炭含む）
3：灰黄色（2.5Y7/2）シルト質極細砂（礫含む）
4：黄灰色（2.5Y6/1）シルト（礫含む）
5：灰色（N5/0）シルト質粘土（明黄褐シルト混じる）
6：灰黄色（2.5Y6/2）砂（2が混じる）
7：黄灰色シルト質粘土（炭・瓦混じる）
8：灰黄色（5Y6/1）砂質シルト・灰色シルトのラミナ状堆積

0　2m

第55図　SX101平・断面図（1/40）

501は竹林七賢人文を描く染付鉢で,「永楽年製」の見込み文様をもつ。高台内には,「乾」銘款が認められる。502は,見込みに山水文を描く輪花鉢。503は,色絵の鉢。呉須の染付に赤,黄(金彩?),及び黒色を用いた上絵が認められる。また口縁及び見込み部分の釉を剥ぎ,桃,黒色で波頭文や菊花の絵付けを施している。504～506は,肥前系の鉢類蓋。505は,外面に染付文様と青磁釉を施す。506は染付に加えて,赤,褐,緑色の上絵付を行う。507・508は,肥前系の段重。508は色絵の福寿文段重で,染付に加えて赤,褐,黄色の上絵付を行う。509は,肥前系の染付鉢。510・511も,肥前系の染付合子。516は,龍泉窯系青磁の輪花鉢。口縁が外反し腰の張る器形で,内外面にヘラ彫りによる花唐草文を施している。漆による焼継ぎとその傷隠しを金彩によって行っており,長期間保持していたものと推察される。517は肥前系,白磁花形小鉢。518は瀬戸・美濃系,植木鉢。口縁に瑠璃釉,体部外面に青磁釉を掛け分けるもので,波状の高台部をもつ。

512～515は,急須,水注及びその蓋。512は肥前系,513～515は瀬戸・美濃系(関西系)である。514は急須で,注口に直交する位置に把手が付く。513は法量や釉調から,514の急須の蓋と推定されるもので,焼継ぎ痕とその傷隠しに金彩を施している。515は鳶口形の片口が付き,その反対方向には耳状の把手が付くものと推定される。

519・520は仏飯器で,瀬戸・美濃系(関西系)のもの。519は赤絵,520は瑠璃釉を外面に施す。

521～526は,瓶類。521・522は肥前系で,染付の油壺と鶴首。523は瀬戸・美濃系で,外面に瑠璃釉を施す爛徳利。524は関西系,青磁の八角瓶。前・後方向の2面に陽刻文が施されており,半裁状の型を用いて成形されているものと考えられる。485と同様に,兵庫県三田市の三田焼との関連が推定される。525・526は,肥前系の染付瓶。525は,若松文の仏花瓶。526については,同形品が数個体出土している。

527は,関西系と推定される磁器焼成の灯明受け皿。白磁で,底部とかえりの上端は無釉である。528・529は,染付蓮華。528は肥前系で,底部は凹状となっており畳付を除き施釉されている。529は瀬戸・美濃系で,底部は無釉。530・531は,肥前系磁器の戸車あるいは窯道具。側面部は無釉であるが,531については磨耗が認められ,戸車として使用されたと考えられる。

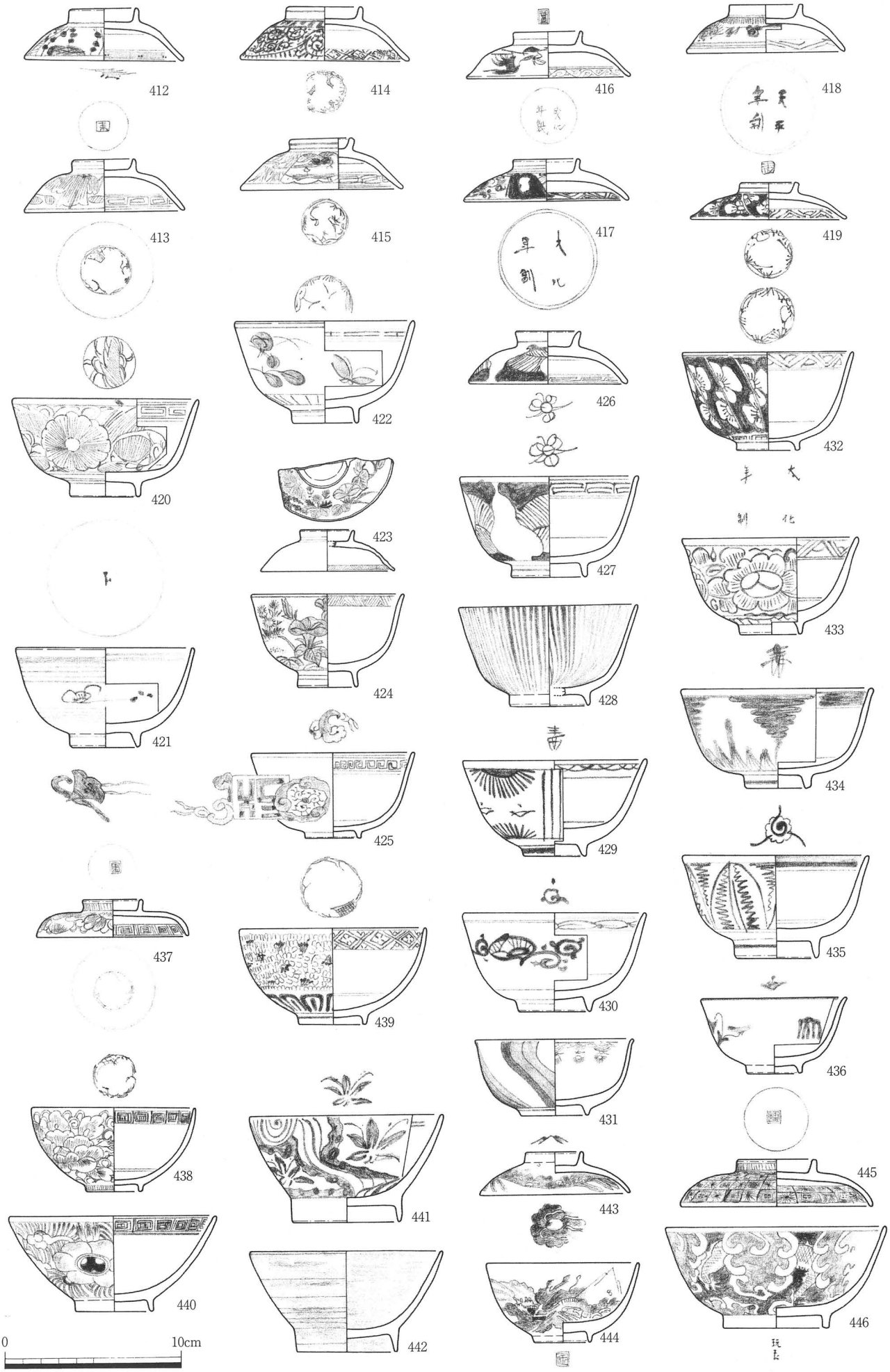
532～634は,陶器。磁器製品と比べ碗・皿類は少なく,替わって鉢類,鍋,土瓶,灯火具が多数確認できる。産地系統では,色絵のものは少ないが端反碗,灯明皿,鉢類等で京・信楽系ものが多数認められる。またこれと明確には分類できないが,理兵衛・富田焼等在地産と推定される鉢,鍋,土瓶類等も相当数認められる。瀬戸・美濃系では大型の鉢・甕類が多く,近世瀬戸窯編年(藤澤1998)では第10・11小期を中心としたもので,織部調の製品も認められる。この他,徳島県の大谷焼と考えられるもの,関西の焼物との関連が想定される刻印をもつものも認められる。

532～544は,碗類。532は陶胎染付で,口錆を施す。533は,瀬戸・美濃系の広東碗。高台部は小振りで,呉須で外面及び見込みに簡略な文様を染付している。534・535は瀬戸・美濃系で,麦藁手の奈良茶碗・碗蓋。536～540は,京・信楽系。536・537は端反碗で,一定量の出土が認められる。537は高台脇及び高台内に墨書が認められ,高台内については「布引」と判読される。538は半球形を呈し,呉須で蝶を染付けている。焼成は,良好で磁器質に近い。539は平碗で,見込みに円錐状のピン痕が残る。540・541は,半筒形碗。541は,内外面に褐色の釉を施す。胎土から理兵衛・富田焼が想定される。542は体部下半に「清」の六角印をもち,清水焼との関連が想定される。六角の印では清水六平衛(明和8年,初代清水六平衛が五条坂で開窯)が知られる。器形は杉形を呈し,器面に大きな轆轤目を残す。内面から外面上半部まで貫入の著しい長石釉が見られ,透明色の釉は高台脇まで及ぶ。口錆を施し,外面に錆絵の染付が認められる。底部無釉で,胎土は灰色を呈し砂粒に黒色粒を含む。543は全面に黒褐色の釉を施釉し,外面は藁灰釉を重ねて施す。見込みに3箇所の円錐状ピン痕,畳付には熔着痕が残る。胎土から理兵衛・富田焼が想定される。544は器壁が薄く,端反口縁で筒形を呈する。高台内を除き貫入が入るやや褐色がかった釉を施し,鉄絵で木賊文を描く。胎土から理兵衛・富田焼が想定される。

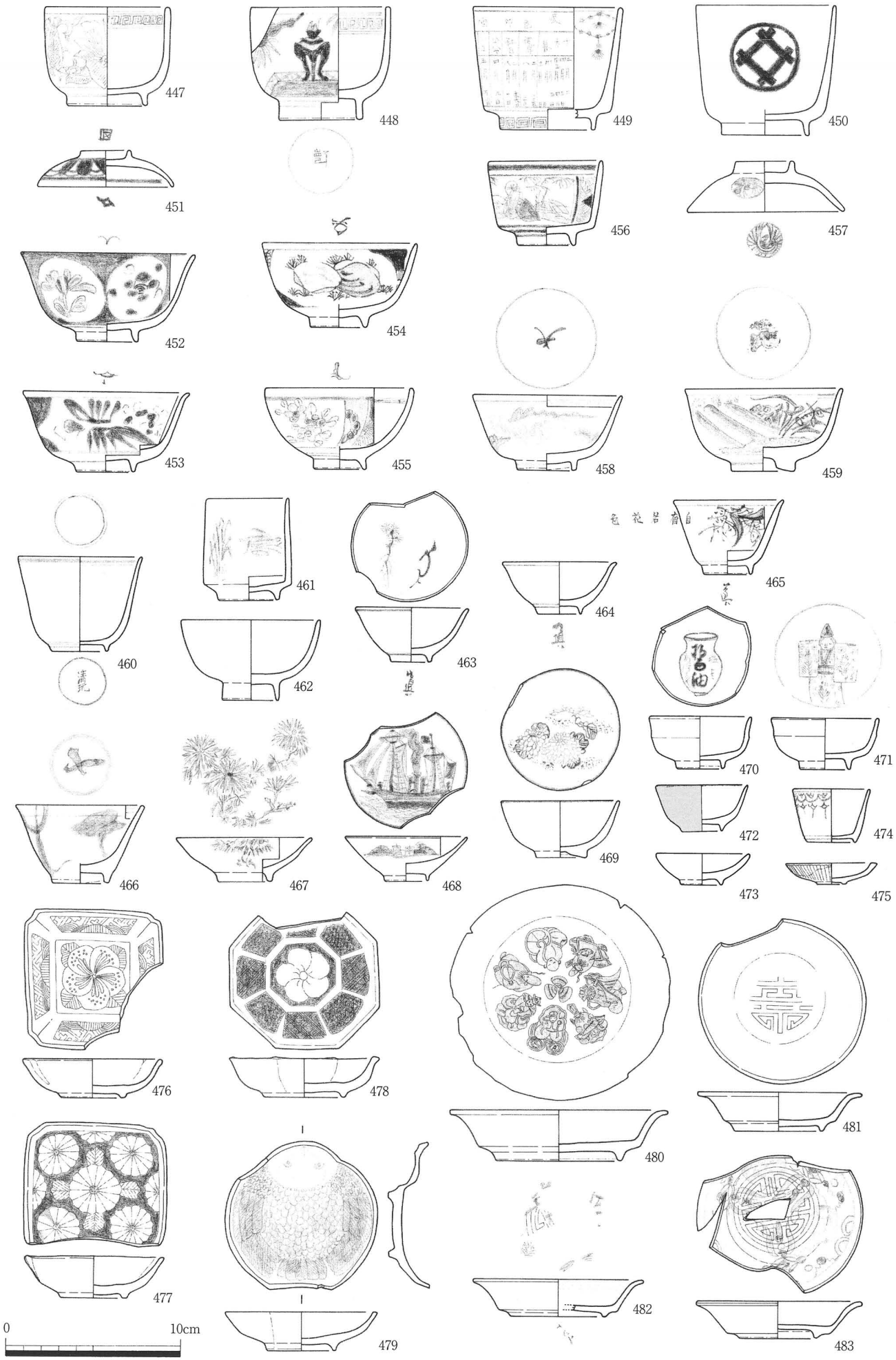
545～549は,小坏・猪口類。545・546は,平碗・丸碗の器形を呈する。底部を除き,やや灰色がかった釉を施す。547は,杉形を呈し高台には三方の抉りをもつ。底部を除きやや灰色がかった釉を施し,呉須で染付文様を描く。548は盃で,内面から高台脇まで灰白色の釉を施す。底部無釉で,器面は赤褐色に焼き締まる。胎土から理兵衛・富田焼が想定される。549は内面に透明色の釉,外面はやや緑灰色がかる釉を水滴状に施す。

550～557は,皿類。550は肥前系,象嵌文様を施す三島手小皿。551～554は瀬戸・美濃系織部皿で,緑釉・透明釉を掛け,鉄絵を描く青織部。551は,菊花文の皿。内面に布目の圧痕が残り,やや歪な器形を呈することから,手捏品と考えられる。552も外面に指頭圧痕状の窪みを残すが,底部は回転ケズリで碁笥底に成形されている。553も浅い碁笥底を呈し,その内部は施釉されており,底部周辺の釉は拭き取られている。554は脚付のもので,舟形を呈する。555は,瀬戸・美濃系染付皿。見込み文様に帆掛船,縁文様に扇・草葉文が認められる。556・557は,瀬戸・美濃系の中・大皿。556は折縁の皿で,鉄絵で圏線を描き,褐色の釉を用いた型紙刷りによる施文が認められる。透明釉が畳付を除き,全面に施されている。557は,馬ノ目皿。底部無釉で,見込みに3箇所の目跡が認められる。

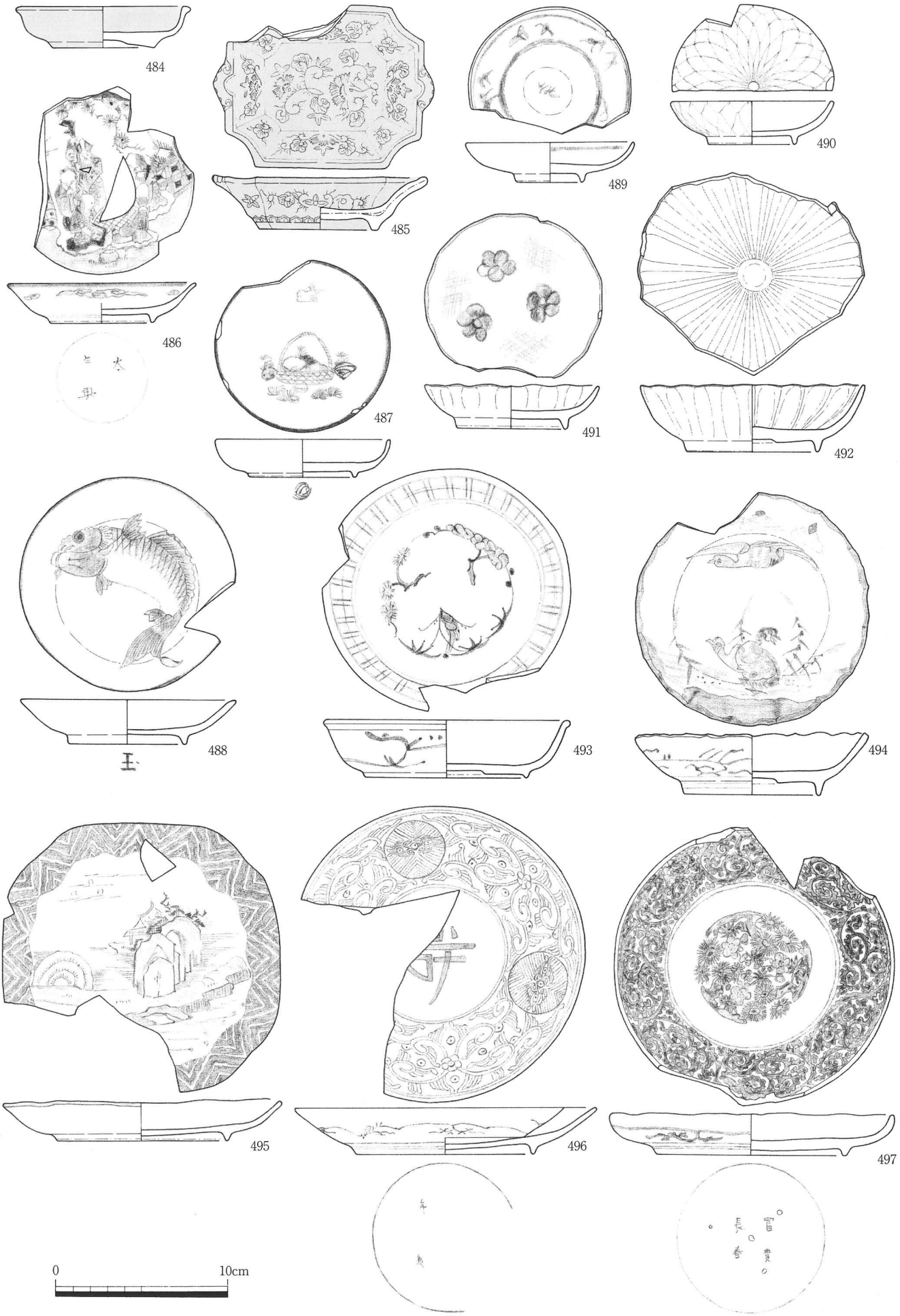
558～568は,鉢類。558は口縁端部が内傾し,かえり状の段が付く。内面から高台脇まで灰釉を掛け,外面の一部に白土を塗り,呉須の染付文様を施す。底部無釉で,高台内は兎巾に削られている。胎土から理兵衛・富田焼が想定される。559は,四方隅入の鉢。内面に灰白



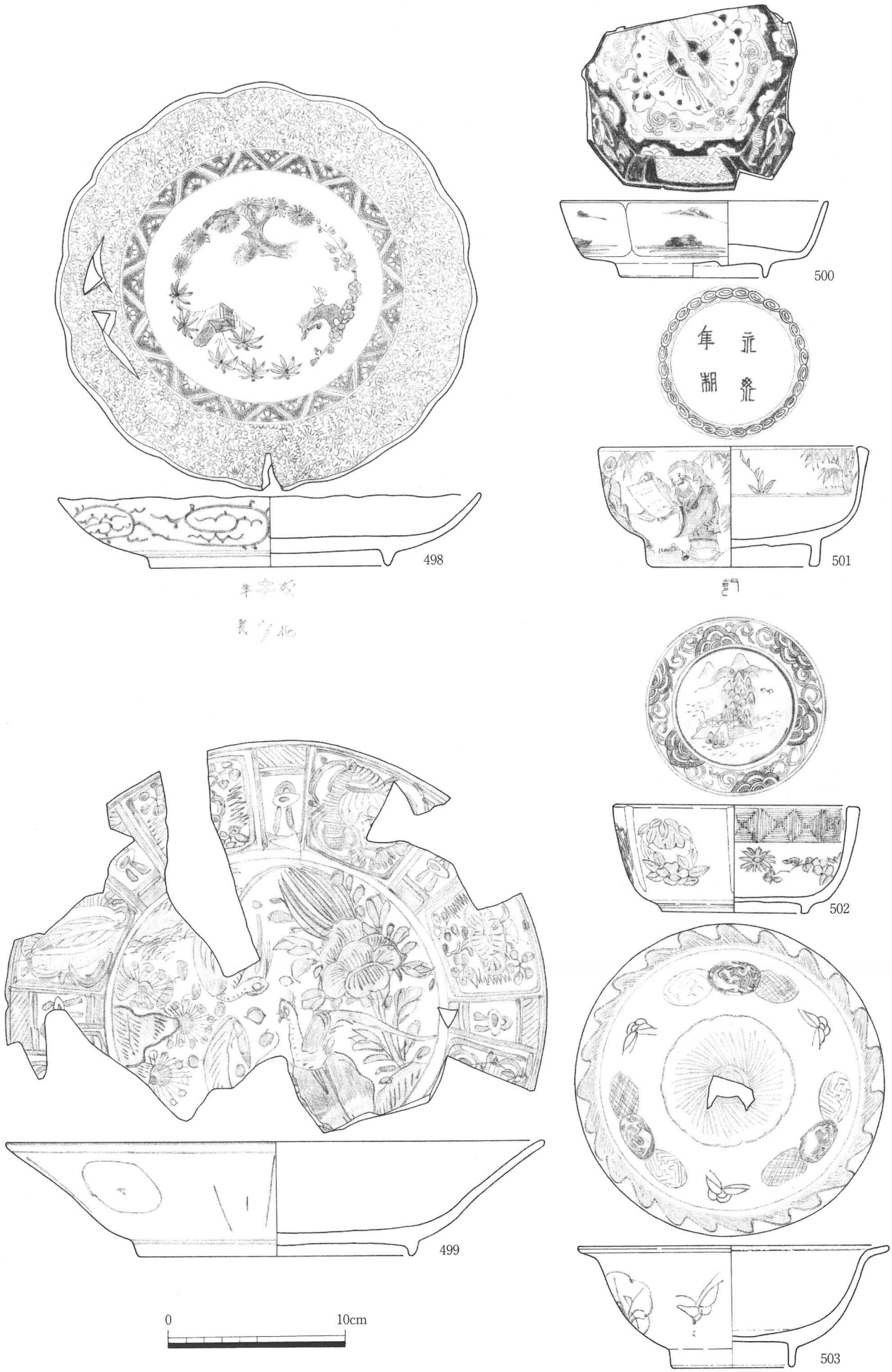
第 56 図　SX101 出土遺物実測図①（1/3）



第 57 図　SX101 出土遺物実測図②（1/3）



第 58 図　SX101 出土遺物実測図③ (1/3)



第 59 図　SX101 出土遺物実測図④ (1/3)

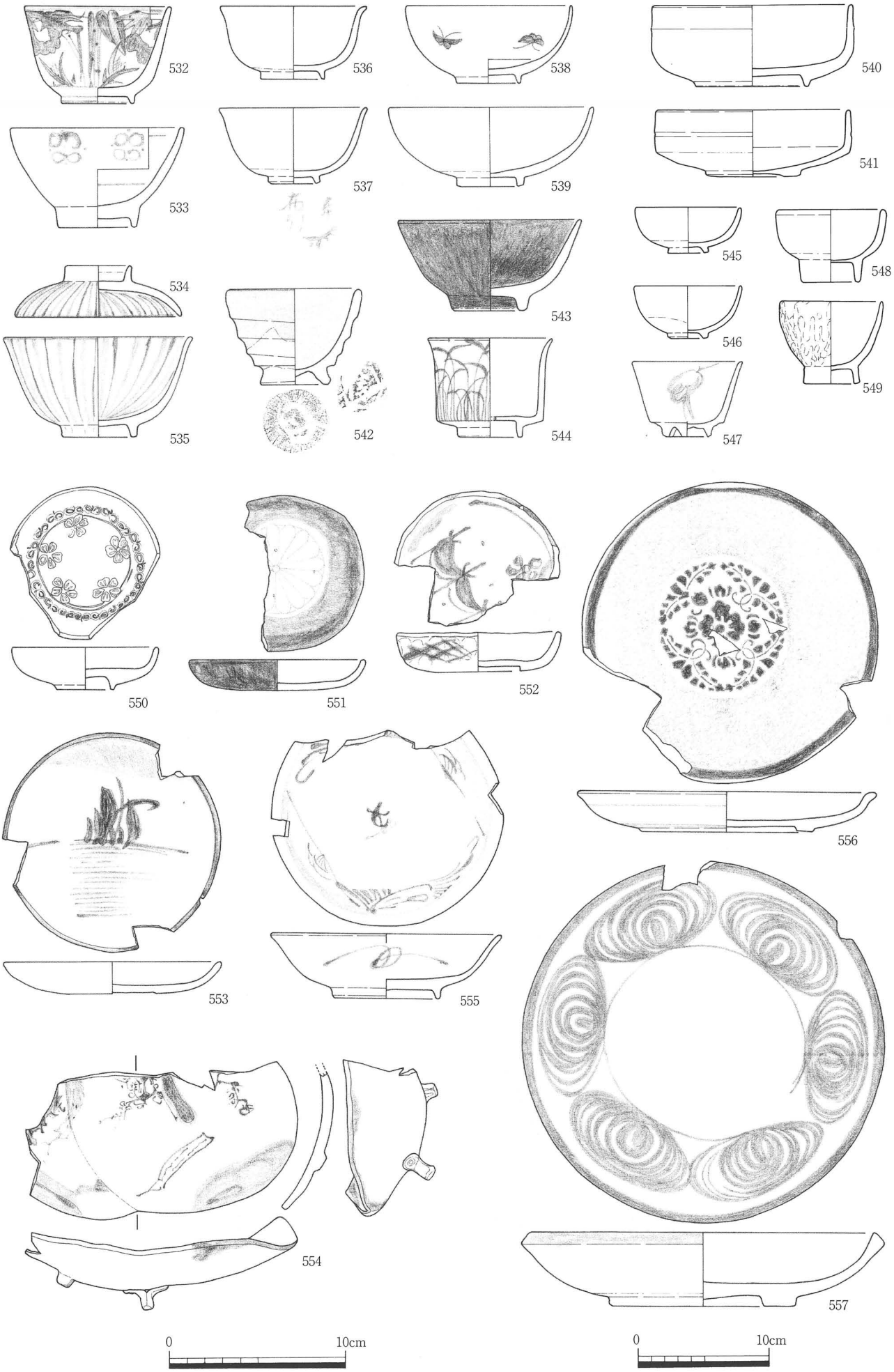
第 60 図　SX101 出土遺物実測図⑤ (1/3)

色の釉，口縁から高台脇まで明緑色の釉を施す。底部無釉で，胎土は鈍い橙色を呈し，やや軟質の焼成となっている。560は，蕪形?の変形鉢。内面から外面上半まで灰白色の釉を施し，呉須で蕪を描き染付けている。また内面には，上絵とみられる痕跡が認められる。底部無釉で，見込みに円錐状のピン痕が残る。胎土から理兵衛・富田焼が想定される。561は，雲錦手鉢。イッチンで桜を描き，透明釉を掛けて赤・黄色の上絵により紅葉を表現する。底部無釉で，高台に2箇所の抉りをもつ。胎土は灰色を呈し，砂粒が目立つ。尾形乾山が創作したとされる雲錦手は，また在地と関連する仁阿弥道八，理兵衛の作によるものも知られる。562は瀬戸・美濃系，志野大鉢。畳付を除き全面に長石釉を施し，鉄絵を描く。563は「古曽部」の刻印をもち，古曽部焼と推定される鉢。内面から体部外面に白土を施し，呉須で外面と見込みに文様を描き，染付けている。底部無釉で，高台内の隅に刻印が認められる。古曽部焼は，大阪府高槻市の古曽部町で寛政年間頃，京焼を修行した五十嵐新平の開業に始まり，1910年頃の廃業まで4代にわたり作陶が行われたとされる。564は，色絵の鉢。内外面にやや灰色がかった釉を掛け，赤，黒，白の色絵を施す。底部無釉で脚が付き，「与三」の五角形印が認められる。刻印の存在については不明だが京焼系であることから，その陶工，水越与三兵衛（初代，文化年間に五条坂で開窯，1877年頃，3代で家絶える）との関連が想定される。565は，四方隅入と推定される鉢。白土を施し，呉須文様と錆絵を描き染付けている。底部無釉で，外面下半に「清」の六角印が認められる。見込みには，円錐状のピン痕が残る。542と同様に「清」の六角印をもち，清水焼との関連が想定される。胎土は，542と同様に見られる。566・567は灰オリーブ色～透明色を呈する釉で，イッチン描きによる施文をもつ鉢。底部無釉で，567のように円錐状のピン痕が残るものがある。口縁部はその折り曲げにより，玉縁状（566），鍔状（577）となる他，様々ものが出土している。何れも胎土から理兵衛・富田焼が想定される。568は，理兵衛焼と考えられる建水。内外面にオリーブ黒色の釉が掛けられ，外面に轆轤目，見込みに渦状痕を残す。底部無釉で，回転糸切り痕とその隅に破風「高」の印が認められる。胎土は灰色を呈し，器面には長石が目立つ。

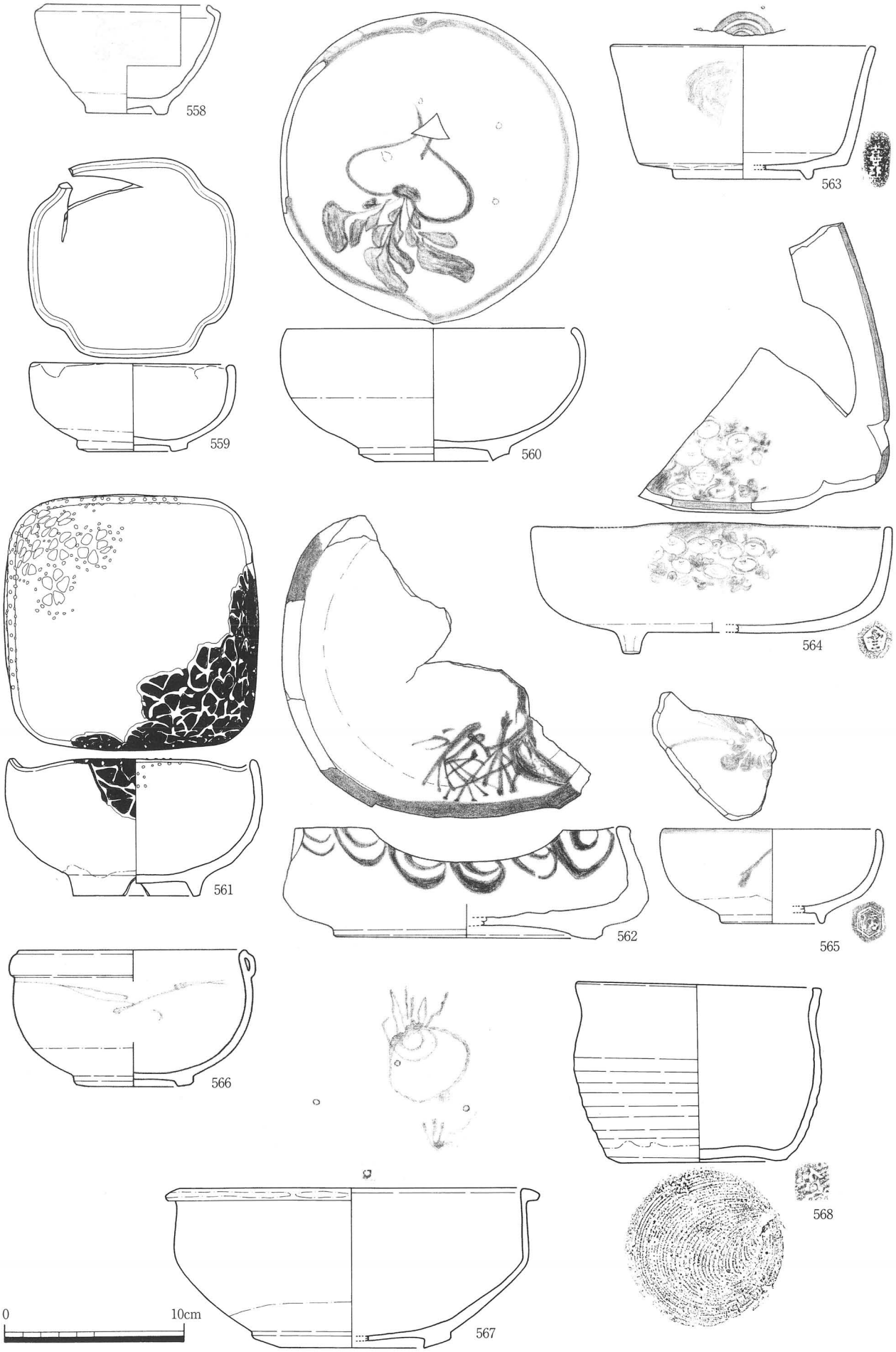
569～574は大谷焼と推定される鉢・壺類。赤褐色を呈する胎土に黒褐色の釉を施すもので，無釉の底部に同心円状のケズリが認められる。598～601の瓶類等も合わせて，同焼物と推定されるものが一定量認められる。569は，蓋。内面に，「さねさ」（「さぬき」?）の墨書が認められる。570～572は，鉢。571は見込みに，焼成後の穿孔を施す。572は口縁上端に熔着痕，外面に被熱痕が認められる。573は茶入れの器形で，肩部に注口あるいは把手の痕跡が認められる。574は壺で，ほぼ完存する。575～577は，京・信楽系の蓋物。575・576は蓋で，上面に透明色の釉を施す。577も内外面に透明色の釉を施すもので，見込みに円錐状のピン痕が3箇所認められる。底部無釉で，赤色顔料が付着する。578は，透明釉を施す片口鉢。579は，京・信楽系の柄杓。内面には錆絵が染付けられる。580～589は，蓋類。580は京・信楽系，581～583については，胎土から理兵衛・富田焼が想定される。581は，上面に透明色の釉を施す。無釉の底部に，白泥の熔着が認められる。582は完存品で，摘みに亀形を貼付ける。上面は白土を掛け，透明色の釉を施す。無釉の底部に，回転糸切り痕が残る。583は瓶類の蓋。摘み部に白土を掛け，受け部を除き透明色の釉を施す。584は，内面に「栗林／理平」の小判印をもつ急須類の蓋。上面に透明色の釉を施し，やや軟質の焼成。理兵衛焼は明治維新を迎えた慶応三年，十代理兵衛以降，「理平」と改めたとされる。585・586は，火入れ・香炉。585は京・信楽系で，六角の香炉と推定される。呉須による梅文の染付が認められる。底部及び内面は無釉で，見込みに重ね焼きの痕跡が残る。586は，内面上半から外面にかけ灰白色の釉に透明色の釉を重ね，貫入が著しく見られる。底部及び内面は無釉。胎土から理兵衛・富田焼が想定される。587は，京・信楽系の水滴。上半部に透明色の釉を施し，上面には陽刻文が認められる。588は青織部の水注で，完存品。底部を除いて，全面に施釉する。589は，京・信楽系土瓶あるいは水注。内面上半から外面に透明色の釉を施し，外面には金彩，青色の上絵の痕跡が残る。底部は無釉で，粒状の3足になる脚が付く。見込みには，環状の熔着痕が認められる。590は，萬古系急須。器壁が薄く，胎土は灰黄褐色を呈する焼き締めである。型成形と考えられ，上半・下半部を繋ぎ合わせる接合痕と上半部を巻き合わせた痕跡が認められる。外面の装飾に，沈線文と赤・白・黄・緑色を用いたイッチン描きで梅花を表現している。591・592は京・信楽系の壺・同蓋で，格子状の鎬と白土，呉須，錆絵による梅花文の染付を施す。

593～600は，瓶類。593は，水白粉瓶。内外面に灰オリーブ色の釉を施し，「〔　〕㊟大坂□□町」と判読されるイッチン描きが認められる。594・595は，徳利。594は，錆絵の染付が認められる。595は口縁に灰釉を施し，呉須文様と鉄絵の染付が認められる。596は，爛徳利。鳶口形の片口，耳状の把手が付くもので，鉄絵を施す。597は，呉須文様と錆絵の染付が認められる。598～601は大谷焼と推定されるもので，何れもほぼ完存する徳利（598・599），花生（600）である。601は，底部に「駒井」と判読される墨書が認められる。

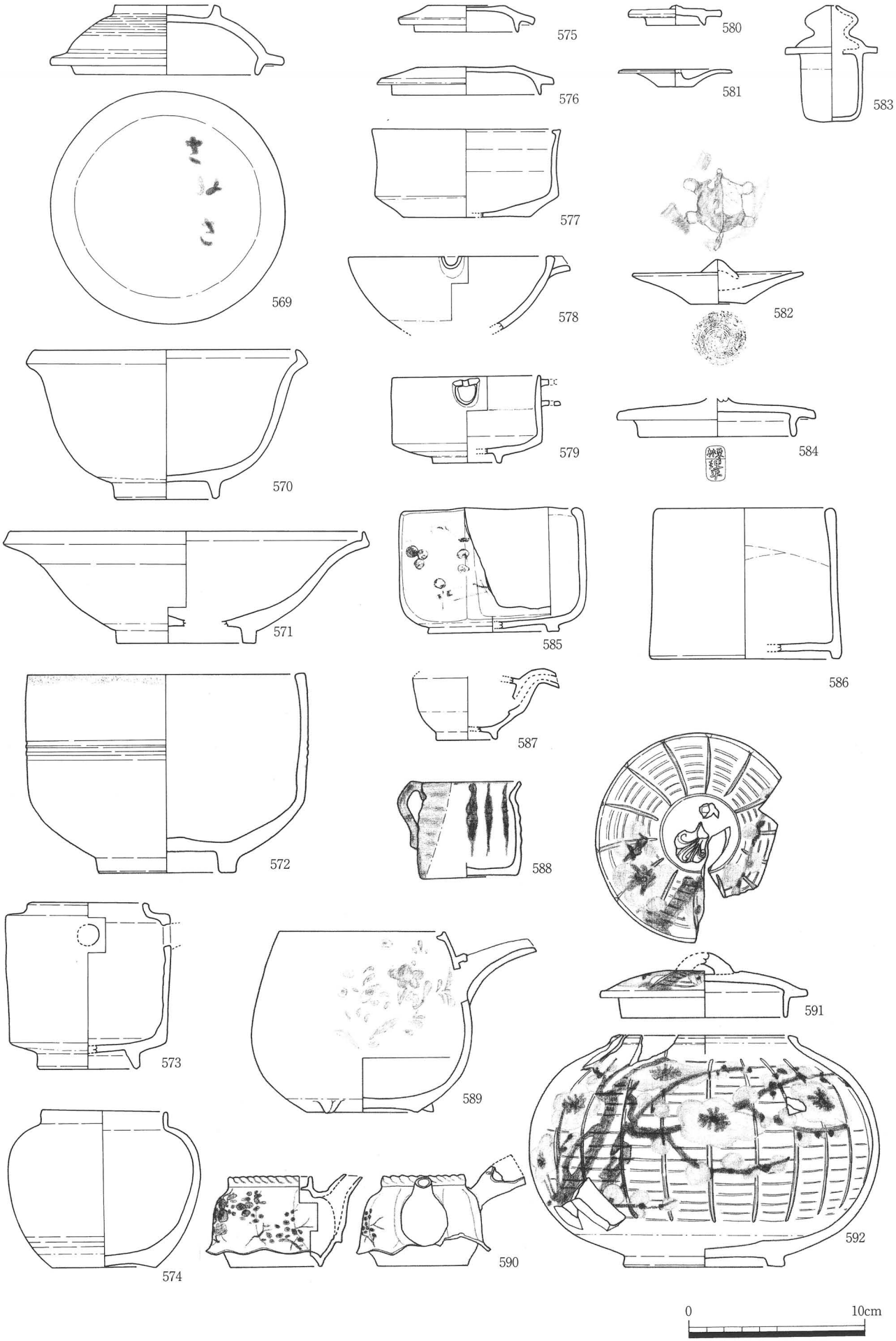
602～613は，灯火具。602～608は京・信楽系灯明皿，受皿。ともに大，中，小の法量が認められる。内面を施釉し，外面及び底部に回転ヘラケズリ痕が認められる。皿は見込みに，円錐状のピン痕が残るものがある。受皿はかえりの上端部が無釉となっており，608には環状の重ね焼きの痕跡が残る。609・610は京・信楽系で，脚付の灯明受皿。大，小の法量が認められる。かえりの上端部と底部を除き，透明色の釉を施す。底部には，回転ヘラケズリ痕が認められる。611は京・信楽系のカンテラで，内面から外面上半部にかけ透明色の釉を施す。612・613は，ひょうそく。612は，瀬戸・美濃系。底部を除き，柿色の釉を施す。底部には，回転糸切り痕が残る。613の口縁端部には，ボタン状の突起が貼り付けられる。胎土から理兵衛・富田焼が想定される。



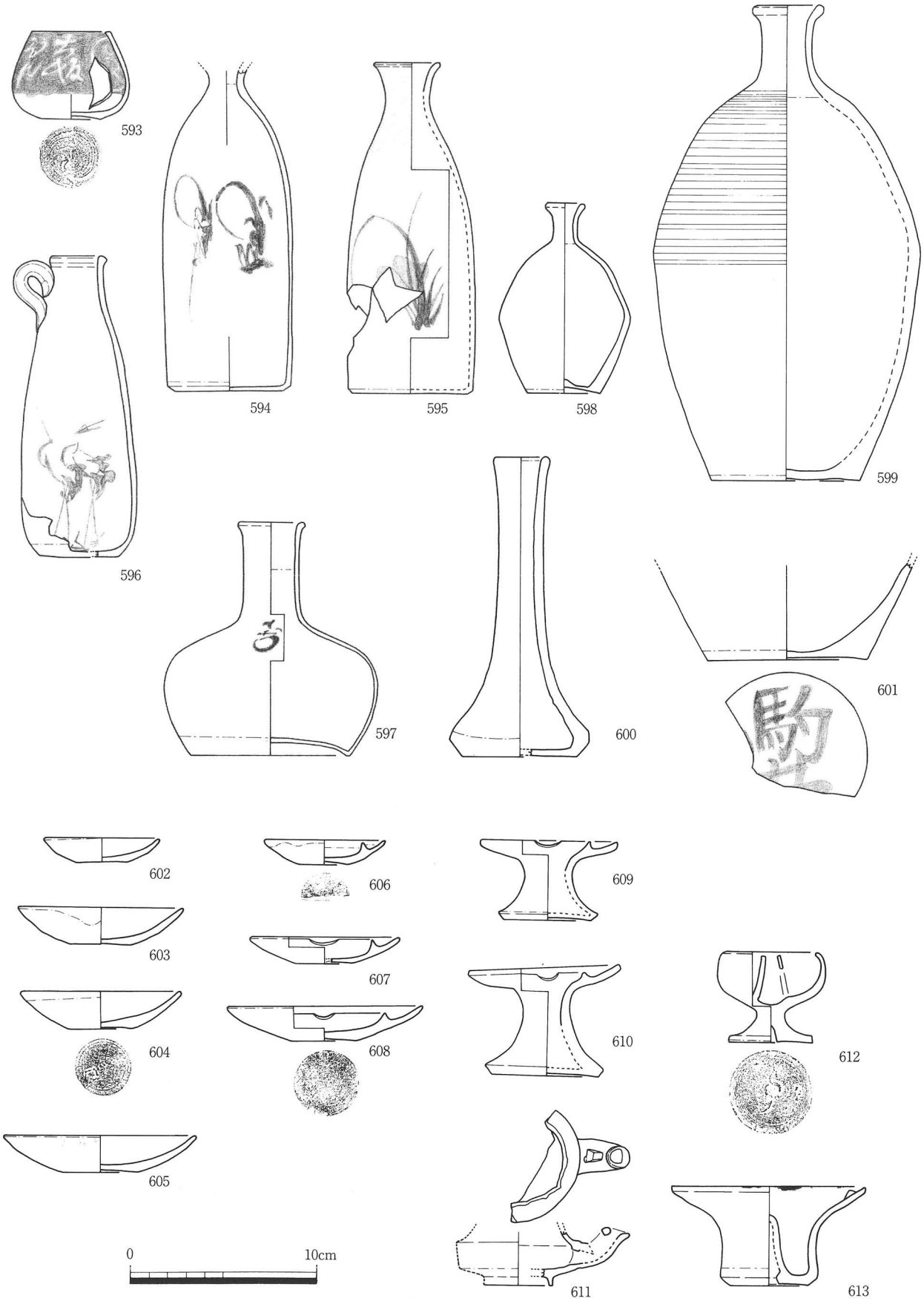
第 61 図　SX101 出土遺物実測図⑥（1/3・1/4），刻印拓本（1/2）



第 62 図　SX101 出土遺物実測図⑦ (1/3)，刻印拓本 (1/2)



第 63 図　SX101 出土遺物実測図⑧ (1/3)



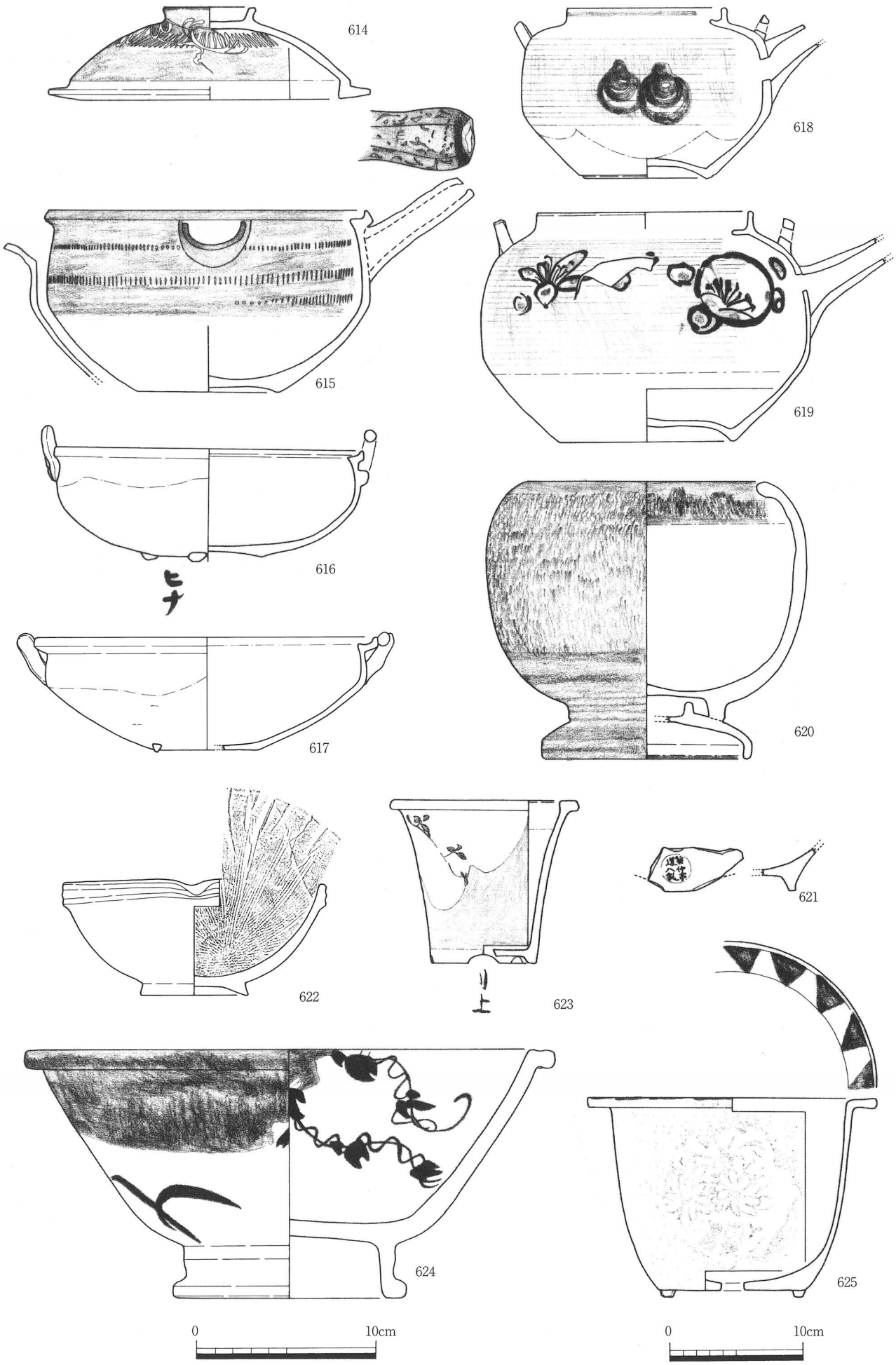
第 64 図　SX101 出土遺物実測図⑨ (1/3)

614～619は，鍋・土瓶類。614・615は，行平鍋・同蓋。共に外面に鉄泥を塗り飛鉋を施し，内面は透明色の釉を施すもので，見込には円錐状のピン痕が残る。装飾には，蓋上面にイッチン描きによる施文，鉄泥を塗る鍋の把手には陽刻文を施す。何れも胎土の特徴から，理兵衛・富田焼が想定される。616は把手付鍋で，円形になる紐状把手が付く。外面上部に鉄泥を塗り，内面は受け部を除いて灰オリーブ色の釉を施す。底部には3足の粒状脚が付き，「ヒナ」と判読される墨書が認められる。胎土から理兵衛・富田焼が想定される。617は把手付鍋で，方形になる紐状把手が付く。受け部を除き，内面及び外面上部に透明色の釉を施す。底部には，粒状の脚が認められる。618・619は，土瓶。618は外面に白土を薄く刷毛塗りし，錆絵を描くもので、灰オリーブ色の釉が蓮弁状に掛けられている。619も染付文様を施すもので，透明色の釉下には白土の薄い刷毛塗りと呉須文様，鉄絵が認められる。618・619共に，胎土の特徴から理兵衛・富田焼が想定される。

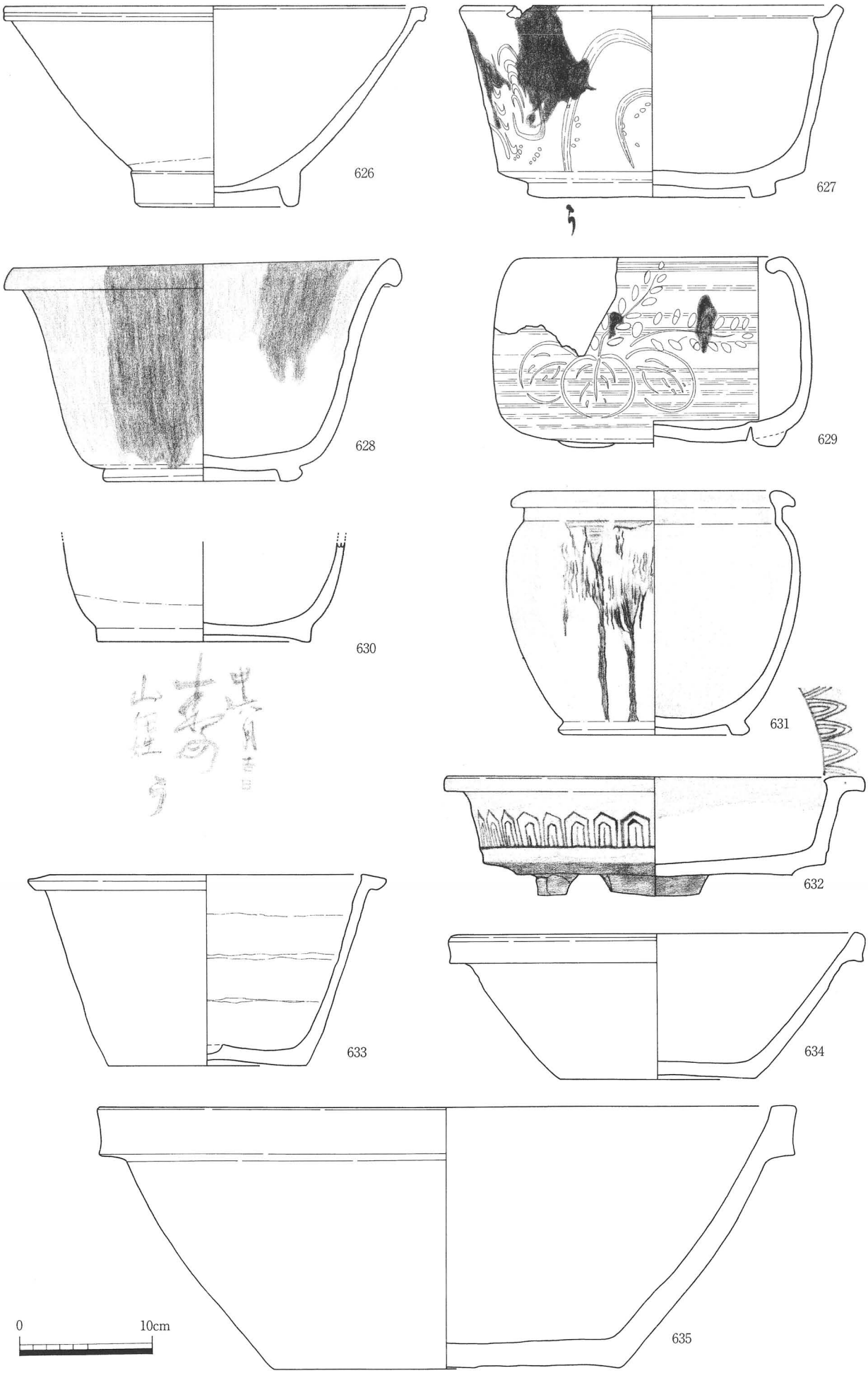
620～632は，鉢・甕類。620は，火鉢・香炉類。胎土は鈍い赤褐色を呈するもので，口縁内側から外面にかけてオリーブ黒色の釉を施し，上半部には白色の釉を薄く重ねる。高台部は本来別個体と考えられる皿形が，熔着した状態で施釉・焼成されている。見込には泥の熔着が認められる。621は，香炉類の脚。黒褐色の釉下に，高橋道八の屋号とされる「華仲亭道八製」の丸印が認められる。622は瀬戸・美濃系擂鉢で，外面に柿色の釉を施す。623は，小形の植木鉢。口縁内側から外面にかけて灰オリーブを施し，上半部に白土を重ねて錆絵を描く。底部は無釉で，「リ上」の墨書が認められる。胎土から理兵衛・富田焼が想定される。624は，瀬戸・美濃系の大鉢。高台が高く，青織部風の緑釉，鉄絵を施す。625は瀬戸・美濃系植木鉢で，外面に型紙刷りによる施文，口縁には鉄絵で鋸歯文を施す。同形のもので，法量が小さいものも存在する。626は赤褐色の胎土に，外面に暗赤褐色の釉を施す。内面及び底部は無釉で，見込みに環状の重ね焼き痕が認められる。627～632は，瀬戸・美濃系。627は，流水陰刻文の水甕。高台内の隅に，「右（左）衛門」と判読される墨書が認められる。628は練鉢で，白・緑色の釉を掛け分け，内外面に透明釉を施す。底部無釉で，高台内には鉄泥を塗布する。629は，桐の陰刻文をもつ火鉢。3足になる脚部の付け根には，各々穿孔を施す。内面及び底部には，鉄泥を塗布する。630は底部に墨書が認められ，「（申）六月吉日（木物）山田姓　右（左）衛門」と判読される。631は，甕。内外面に柿色の釉を施し，更に外面には鉄釉を流す。同形で，法量が大きいものも存在する。632は，3足の脚付盤。口縁及び外面に蓮弁の陰刻文を施し，緑釉を掛ける。内面は透明色の釉を施し，底部には鉄泥を塗布する。

633～648は，備前系の焼き締め・無釉陶器で，鉢類を中心に一定量認められる。633は粗製の甕で，底部無調整。634・635は，捏鉢。634も粗製で，無調整の底部に砂粒が熔着する。見込みには，一面に円形の重ね焼き痕が残る。大型の635は暗赤褐色に焼き締まり，見込みには一面に環状の重ね焼き痕，底部には円形の重ね焼きの痕跡が残る。636・637は，備前系灯明皿。637は型打の陽刻文をもち，口縁に塗土を行う。638・639は鉢。640は蓋で，上面に塗土を行う。641の鉢も，口縁内側から外面，底部まで塗土を行う。642は鉢で，体部の押圧により沓形に歪む。底部には，板状圧痕が認められる。643は，油壺。644は人形徳利で，完存品。底部隅の刻印から，堺産と推定される。645は花生で，箆彫り文，貼花を施す。器面は暗褐色に焼き締まり，黄ゴマが熔着する。底部の隅に，「㊀」の刻印が認められる。漆による焼き継ぎ痕が認められ，長期間保持していたと推定される。646は，急須。器壁は薄く，鈍い橙色に焼き締まる。注口の下半部に，「○」の刻印が認められる。647・648は，擂鉢。ともに粗製で，無調整の底部に砂粒が熔着する。見込みの擂目から，648は明石産と推定される。649は，窯道具の可能性が考えられる環状の粘土紐。赤褐色を呈し，片面に砂粒が溶着する。

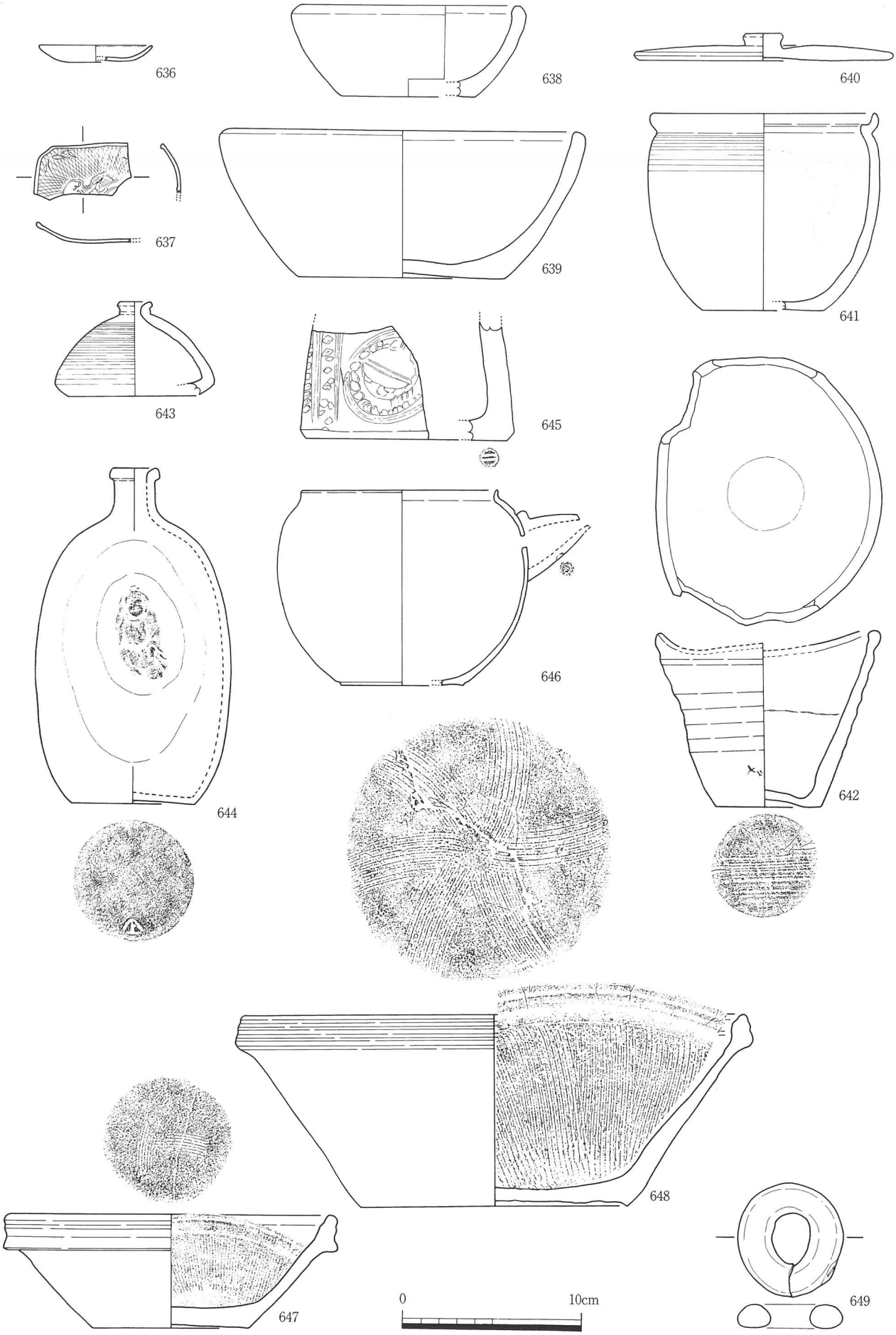
650～667は，源内・屋島焼と推定されるもの及び軟質施釉の陶器。650は碗で，口縁端部がやや内側に肥厚する。鈍い橙色の胎土で，灰オリーブ色の釉が薄く全面に施される。651は，脚付きの盤。鈍い橙色の胎土で，上面に透明色の釉を施す。錆絵を染付け，赤・白色の上絵で梅花文を描く。652は，口縁外側にボタン状の突起が付く（灯明）皿。内面に錆絵で笹葉を描き，薄く透明釉を施す。底部には回転糸切り痕が認められる。653～656は，源内系の焼物と推定されるもの。653は，角鉢。型成形のもので，口縁に穿孔部と見込みに牡丹の陽刻文をもつ。内面に白・緑の釉を施し，透明色の釉が全面に施されている。胎土は，橙色を呈する。654は，長皿。花唐草の陰刻文をもち，緑釉が全面に施される。胎土は，灰白色を呈する。型成形と考えられるが，高台は貼付けられている。655は，花形を呈する香炉。内部構造は欠損するものの，さな状のものが認められる。内面及び高台には、陽刻文が施される。胎土は灰白色で，透明釉を施す高台内と内側構造部の他は全面に緑色の釉が施釉されている。656は舟形を呈する鉢で，接合部から板作りと考えられる。内面に一部緑色の釉が掛かるが，底部を除く全面に透明色の釉を施している。底部の中央には長方形枠の刻印が認められるが，その銘については判読不能である。胎土は，灰白色を呈する。657は，染付鉢。赤橙色の胎土をもち，全面に白化粧を行って，外面に呉須の染付文様を施す。器面の貫入が著しい。底部は碁笥底で，内部に渦状痕が認められる。658は，植木鉢。口縁の内側から外面にかけて黒色の釉を施す。胎土は，赤橙色を呈する。659・660は，染付の土瓶・同蓋。ともに白化粧をし，呉須による染付文様を施す。657は底部無釉で，回転糸切り痕が残る。上面に施釉された透明釉はやや厚く，貫入が著しく認められる。660の注口下半部には，「道八」の名が染付けられている。661・662は，周辺部の調査で，屋島の刻印をもつことが知られる急須・同蓋。赤橙色の胎土に，硬質な透明色の釉を施すもので，この他に把手付鍋（663），行平鍋（664）が一定量認められる。665～667は，同一個体と考えら



第 65 図　SX101 出土遺物実測図⑩（1/3，625：1/4）



第 66 図　SX101 出土遺物実測図⑪ (1/4)



第 67 図　SX101 出土遺物実測図⑫ (1/3)